宮城県文化財調査報告書第68集

玉　造　遺　跡

昭和55年3月

宮城県教育委員会

玉　造　遺　跡

序

本書は、宮城県教育委員会が昭和54年度の国庫補助事業として実施した玉造遺跡の発掘調査の結果をとりまとめたものであります。

この遺跡は、県営圃場整備事業一栗地区の施行計画と係り合いを生じ、遺跡一帯の面工事の実施が昭和54年度のため、53年度に遺跡詳細分布調査を行いました。その結果をもとに、関係者と協議を重ねたところ、大部分の圃場は遺構の現状保存ができました。

発掘調査を実施した箇所は、幹線排水路を布設するため、遺構の現状保存のできかねた部分であります。

ここに、本報告書を刊行するに当たり、遺跡の保護保存に関係された多くの方々の御理解と御協力に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

昭和55年3月

宮城県教育委員会　教育長　　北　村　　潮

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境
１．位置と自然環境 2
２．周辺の遺跡と歴史的環境 3
Ⅲ．調査の方法と経過
１．調査の方法 5
２．調査の経過 5
Ⅳ．調査の成果
１．基本層位 6
２．微高地と湿地 10
３．発見された遺構と遺物 10
（１）竪穴住居跡とその出土遺物 10
（２）土壙・溝とその出土遺物 41
４．遺構以外の出土遺物 44
⑴ 基本層位第Ⅰ層からの出土遺物 44
⑵ 基本層位第Ⅴ層からの出土遺物 44
⑶ 工事中に出土した遺物 44
５．藤原二郎氏の所蔵遺物 46
Ⅴ．遺物・遺構に関する考察と問題点
１．遺　物 49
（１）縄文土器 49
（２）弥生土器 50
（３）土師器 51
（４）須恵器 51
２．遺　構 52
（１）縄文時代の竪穴住居跡 52
（２）平安時代の竪穴住居跡 52
（３）土壙・溝 52
Ⅵ．ま　と　め 53

例　　言

１．本書は、県営圃場整備事業一栗地区の幹線排水路建設に伴う玉造遺跡の発掘調査の報告である。

２．遺跡所在地：宮城県玉造郡岩出山町一栗字玉造

３．遺跡記号　：ＦＨ（宮城県遺跡地名表登録番号35140）

４．調査主体者：宮城県教育委員会・宮城県農政部

５．調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課　調査員：新庄屋元晴・佐々木安彦・千葉宗久
阿部博志・黒川利司・手塚均・小野寺祥一郎・小川淳一

６．調査期間　：昭和54年7月5日～9月1日

７．調査対象面積：約4,800㎡（発掘面積4,575㎡）

８．調査協力機関：岩出山町教育委員会
古川土地改良事務所
二ツ石土地改良区

９．発掘調査に協力された地元の方々は以下のとおりである。（順不同・敬称略）
阿部キヨ子・岡本チエ子・山口愛子・新田和子・大沼富子・大山キヨ子・岡本キヨ
大内光・中鉢ミキエ・中鉢京子・布塚佑・布塚幸子・中鉢佳子・氏家ケイ子・中鉢賢
佐々木敬子・神田映子・佐々木盛男・館内栄之進

10. 本書第２図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図（川渡）を使用したものである。

11. 土色は「新版標準土色帳」（小山、竹原：1967）を使用し、土性は国際土壌学会法の粒径区分を参照にした。

12. 本書の執筆・編集は、宮城県教育庁文化財保護課職員の協議を得て千葉宗久が担当した。

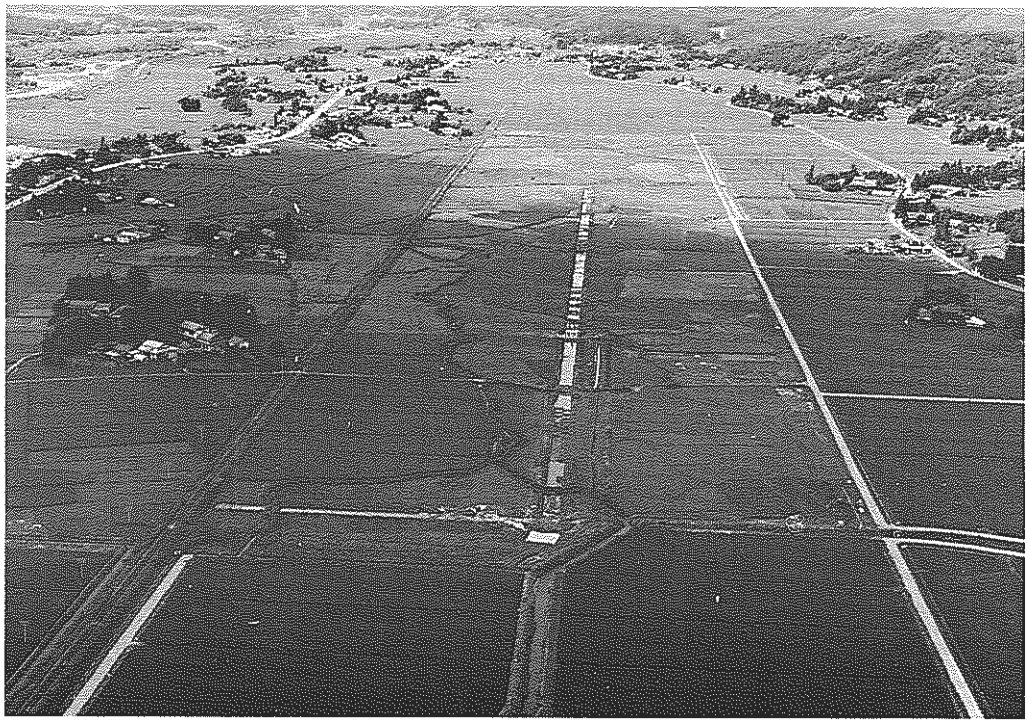
Ⅰ．調査に至る経過

玉造遺跡は、玉造郡岩出山町一栗字玉造地内にあり、縄文時代の包含地として知られている。昭和49年以来、宮城県農政部は農地323.2haを対象とした県営圃場整備事業を一栗地区で実施しており、昭和53年度まで2に203.4haの整備を終了した。

玉造遺跡が係り合いをもつ60.2haの面工事が昭和54年度に実施されることになった。このため昭和53年11月～12月にかけて、宮城県教育委員会は遺跡の範囲及び遺構確認の調査を実施した（小川：1979）。その結果、江合川によって形成された河岸段丘上に微高地と低湿地が確認され、微高地上からは遺物・遺構が検出された。これらの遺物・遺構の分布から、遺跡の面積は約160,000㎡に及ぶものと推定された。

調査結果をもとに、宮城県教育委員会は農政部など関係者間で再三にわたり、事業と遺構の保存との係り合いについて協議と調整を行った。しかし、保存措置を講じかねた排水路建設部分については、事前調査が実施されることになった。

調査は、昭和54年度の国庫補助事業として、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、昭和54年7月5日から9月1日までの期間に実施した。



玉造遺跡の航空写真（南東から撮影）

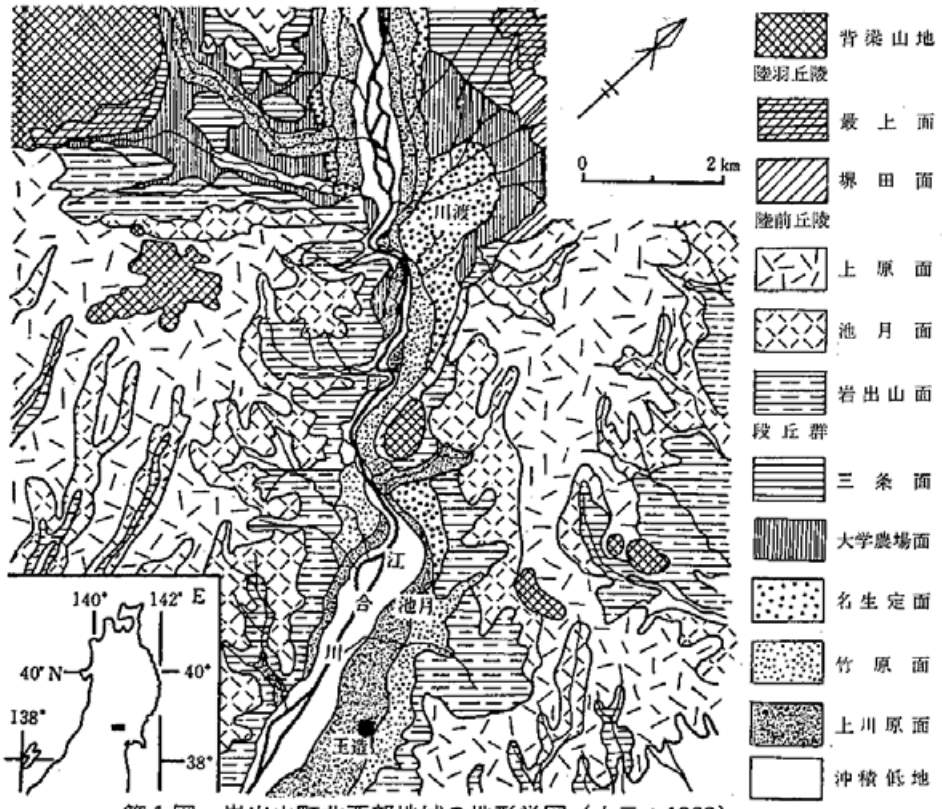
Ⅱ．遺跡の位置と環境

１．位置と自然環境（第１図）

玉造遺跡は、国鉄陸羽東線西岩出山駅と池月駅のほぼ中間地点、玉造郡岩出山町一栗字玉造に所在している。

宮城県北西部に位置する鳴子町鬼首荒雄岳に源を発する江合川（荒雄川）は、奥羽山派東麓からのびて広がる陸前丘陵を開析し、北部の築館丘陵と南部の玉造丘陵に分けている。江合川両岸の築館丘陵、玉造丘陵のすそ部には数段の河岸段丘が形成されており、三条面、大学農場面、名生定面、竹原面、上川原面の５群がある。鳴子町では５群の段丘が形成されているが、岩出山町にはいると、池月付近では名生定面、竹原面、上川原面の３群がみられ、下一栗～上野目付近では竹原面、上川原面の２群の段丘が形成されている。岩出山町南東部、上野目の下流には広く氾濫原や谷底平野を発達させている。さらに古川市付近では広大な大崎低地を形成して、河南町和渕付近で北上川に合流して太平洋に注いでいる。

本遺跡を含む岩出山町北西部地域の段丘の配置は、江合川の北岸と南岸では非対称で、南岸の玉造丘陵側よりも北岸の築館丘陵側の方が発達している。この地域に発達している段丘は５群の段丘中、下位段丘である竹原面と上川原面であり（小元：1966）、本遺跡は上川原面に立地している（註）。この地域の標高は68～79mで南東に緩やかに傾斜し、現在の地目は水田と畑地である。



第１図　岩出山町北西部地域の地形学図（小元：1966）

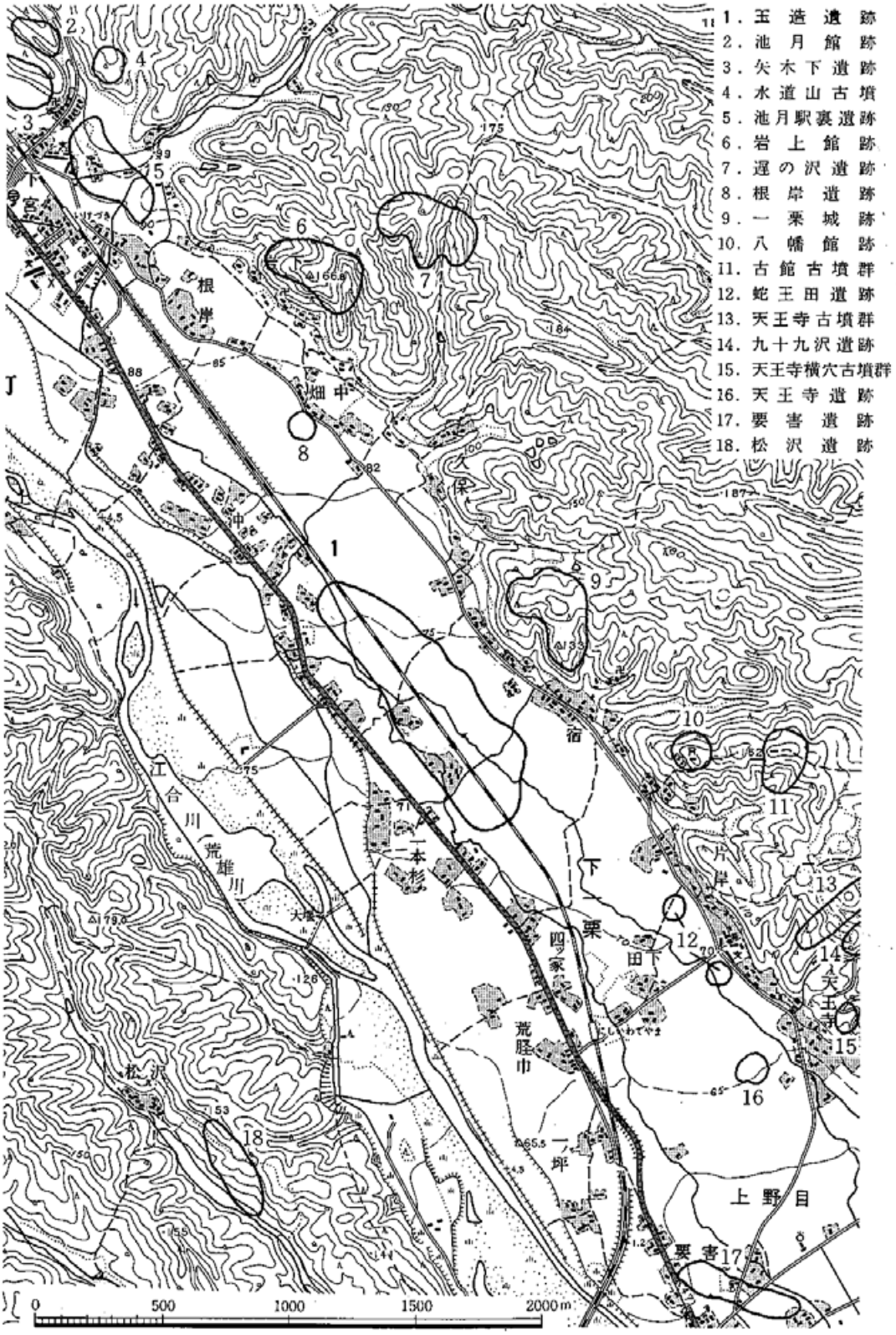
（註）徳島大学教育学部地理学教室の阿子島功氏の御教示による。

２．周辺の遺跡と歴史的環境（第２図）

岩出山町内では、現在171ヵ所の遺跡が確認されている。これらの遺跡のうち、発掘調査が実施されているのは川北横穴古墳群（平・加藤・氏家：1970他）、座散乱木遺跡（石器文化談話会：1978）などである。また、岩出山城のふもとに旧有備館及び庭園があり、昭和８年に国指定を受けている。

時代別の遺跡数をみると、旧石器時代25、縄文時代82、弥生時代49、古墳時代30、奈良・平安時代49、中世～近世49であり、旧石器時代から近世まで各時代の遺跡が万遍なくみられ複合遺跡も多い。ここでは江合川北岸の河岸段丘及び丘陵上の遺跡を中心として概観してみたい。

旧石器時代の遺跡は丘陵上に立地しており、大半は縄文時代や弥生時代などとの複合遺跡で、西天王寺遺跡や座散乱木遺跡などがある。縄文時代の遺跡については、早期・前期の遺跡は丘陵に広く立地しているが、中期・後期・晩期になると江合川流域の河岸段丘上、川沿いの丘陵上に立地する傾向がみられる。段丘背後の築館丘陵南斜面には矢木下遺跡（縄文前・晩期・平安）、池月駅裏遺跡（縄文中・後・晩期）、遅の沢遺跡（縄文早期）など、江合川北岸の段丘上には根岸遺跡（縄文後・晩期）、蛇王田遺跡（縄文中・晩期・弥生）、天王寺遺跡（縄文後・晩期、興野・遠藤：1970）、要害遺跡（縄文中・晩期・弥生）などが立地している。弥生時代の遺跡については、河岸段丘上は少なく丘陵上に広く立地する傾向がある。河岸段丘上には蛇王田遺跡、要害遺跡、丘陵上には西天王寺遺跡、九十九沢遺跡（縄文早・前・晩期・弥生・奈良・平安）などが立地している。古墳時代の遺跡は丘陵上に立地しており、高塚古墳としては水道山古墳群、古館古墳群、天王寺古墳群など、横穴古墳としては天王寺横穴古墳群、川北横穴古墳群などがある。平安時代の遺跡としては矢木下遺跡、九十九沢遺跡などの包含地や合戦原窯跡が丘陵上に立地している。中世の城館跡としては、池月館跡、岩上館跡、古館跡（八幡館跡）、一栗城跡（以上紫桃：1973）などが丘陵上に立地している。また、朱迎寺板碑、天王寺板碑群、自口板碑群も存在している。近世の遺跡としては、岩出山城、伊達家霊廟、旧有備館及庭園、散華経塚などがある。



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅲ．調査の方法と経過

１．調査の方法（第４図）

今回の調査対象範囲は国鉄陸羽東線の北側の水田・畑地である。調査対象地区は幅約６m×延長約800mの幹線排水路敷地であり、「冂」状に屈折している。調査面積は約4,800㎡である。

調査は幹線排水路の中心杭№49（原点Ａ）と№57（原点Ｂ）を結ぶ直線を南北の基準線（Ｎ－36°－W）とし、それに直交する直線を東西の基準線（Ｎ－54°－Ｅ）として３m方眼のグリッドを設定した。南北方向については、原点Ａの南側を100区、北側を101区とし、アラビア数字で示した。東西方向については、60mを単位とした大きなブロック（Ａ・Ｂ・Ｃ）に区画し、各ブロックを20（Ａ・Ｂ・Ｃ…Ｓ・Ｔ）に分け、アルファベットを組み合わせた。原点Ａの東側をＢＡ区、西側をＢＢ区とし、この東西と南北をそれぞれ延長してグリッド名を付した。

このようにして、発掘調査を実施したわけであるが、調査の記録には日誌・図面・写真がある。発見された遺構の平面図は1/20で、遺構配置図は1/100で作成し、レベルを記入した。各遺構の断面図及び調査区の基本層位については1/20で作成した。写真については、白黒写真は４×5、35㎜で、カラー写真はスライド用として35㎜がある。

２．調査の経過

調査は昭和54年7月5日に始まり、陸羽東線わきのＣＱ－100・101区から東にむかい原点Ａで北に直角に折れて、遺構や遺物がどのように分布するかを確認しながら進められた。調査には、まず重機を使用して表土を掘り下げ、その後にケズリをかけて遺構面を精査した。その結果、ＡＴ～ＢＭ－99～102区では平安時代の竪穴住居跡が５軒検出され、続いてＢＡ・ＢＢ－162～175区では縄文時代の竪穴住居跡１軒、土壙10数基検出された。また、ＢＡ・ＢＢ－240～243区では縄文土器を含む土壙状の遺構（第７・８・９住居跡）が検出された。なお、前年度の遺構確認調査で復元されたとほぼ同様の旧地形が確認された。調査の全容がほぼ明らかになった8月4日に、成果を一般に公開するため、発掘現場において報告会を開催した。この段階で、遺構は縄文時代の竪穴住居跡１軒、平安時代の竪穴住居跡５軒、土壙10数基などが発見されている。しかし、現地報告会の後に、ＢＡ・ＢＢ－240～243区の土壙状遺構の精査に入って、竪穴住居跡であることが判明した。この住居跡の精査時には、湧水が著しく、排水ポンプを作動させながらの作業の日が連続した。調査終了は9月1日であった。

Ⅳ．調査の成果

１．基本層位（第３図）

調査区内においては、基本的に７枚の層が確認された。

第Ⅰ層：厚さ約30cmの「暗褐色・褐色シルト層」で、表土である。この層から、縄文土器、土師器、須恵器などが出土している。

第Ⅱ層：厚さ２～４cmの「黒褐色シルト層」で、わずかに炭化物を含んでいる。地区によっては、２層に細別され、上層が下層に比べてわずかに明度が高い。

第Ⅲ層：厚さ２～６cmの「にぶい黄橙色シルト層」で、無遺物層である。この層の性格については、火山灰と考えられる（註）。

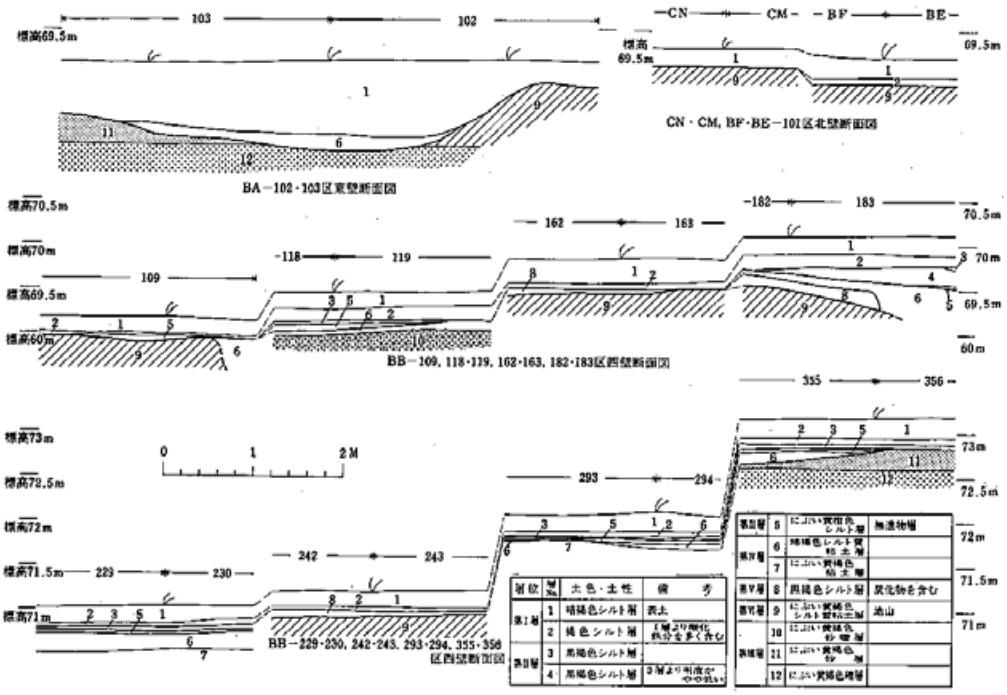
第Ⅳ層：厚さ10～20cmの「暗褐色シルト質粘土層・にぶい黄褐色粘土層」で出土遺物はない。

第Ⅴ層：厚さ10～20cmの「黒褐色シルト層」で、炭化物を含んでいる。ＢＡ・ＢＢ－163～166区やＢＡ・ＢＢ－232～239区付近では、縄文土器や石器が出土している。

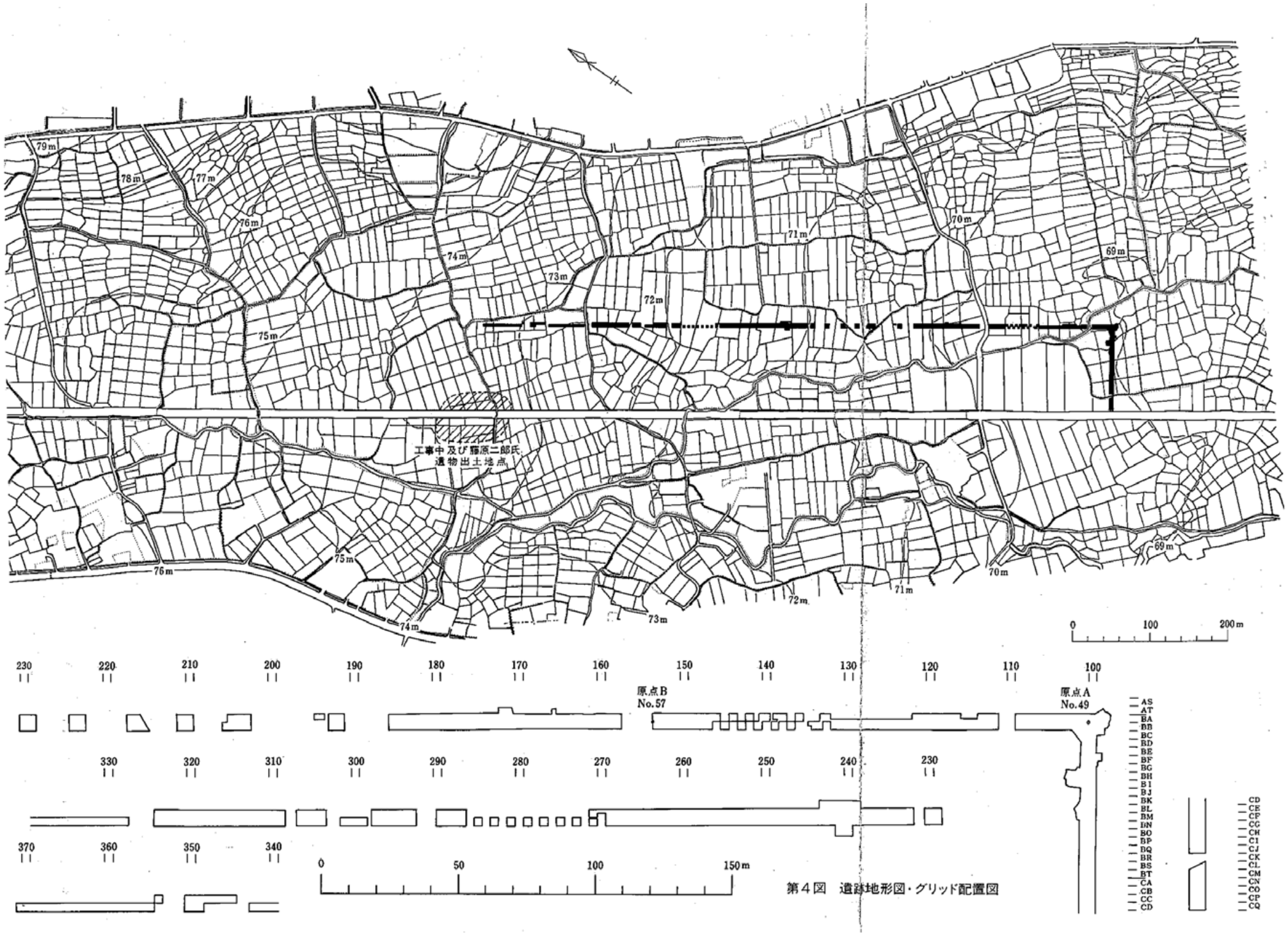
第Ⅵ層：「にぶい黄褐色シルト質粘土層」で、地山である。この層の上面が遺構確認面である。

第Ⅶ層：「にぶい黄褐色砂礫層」で、地区によっては、砂層と礫層に分かれている。

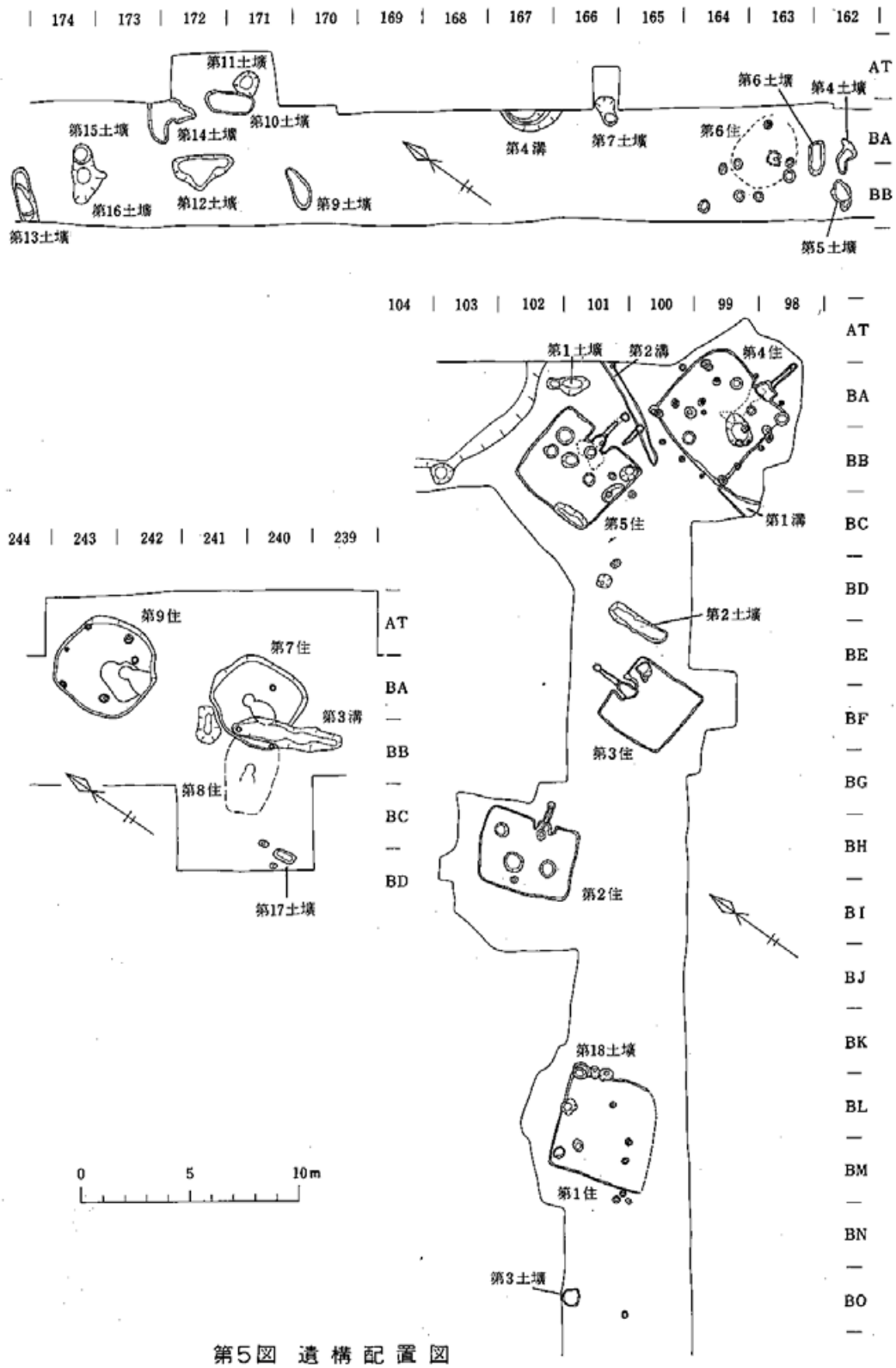
（註）本遺跡に隣接する根岸遺跡〔渋谷正三（1980）：「根岸遺跡」『宮城県文化財調査報告書第64集』〕において、この土層（灰白色土）を分析した結果、火山灰であることが明らかになった。



第３図　基　本　層　位



第４図　遺跡地形図・グリッド配置図


174
173
172
171
170
169
168
167
166
165
164
163
162
AT
BA
BB
第11土壙
第10土壙
第15土壙
第14土壙
第16土壙
第12土壙
第9土壙
第13土壙
第4溝
第7土壙
第6土壙
第4土壙
第6住
第5土壙
104
103
102
101
100
99
98
BC
BD
BE
BF
BG
BH
BI
BJ
BK
BL
BM
BN
BO
第1土壙
第2溝
第4住
第5住
第1溝
第2土壙
第3住
第2住
第18土壙
第1住
第3土壙
244
243
242
241
240
239
第9住
第7住
第3溝
第8住
第17土壙
0
5
10m

第5図　遺構配置図

２．微高地と湿地

調査区内の微地形をみると、微高地と湿地がいりくんでいることが確認された。この微高地と湿地の成因については、「江合川河床の低下による段丘化の過程で、旧氾濫原に形成された後背湿地的な凹地と自然堤防状の微高地」（小川：1979）と考えられている。微高地と湿地における基本層位は大きく異なっており、第Ⅰ層の表土を除くと、微高地では第Ⅴ・Ⅵ層の２枚、湿地では第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層の３枚の層が確認された。また、調査区内における微高地はＣＧ～ＣＱ－100・101区、ＡＴ～ＢＴ－98～109区、ＢＡ・ＢＢ－116～181区、ＢＡ・ＢＢ－232～269区の４地区に認められ、その他の地区は湿地となっている。

３．発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構には、竪穴住居跡９軒、土壙17基、溝４条がある。竪穴住居跡については、発見された順に第１～９までナンバーを付し、縄文時代（第６～９住）、平安時代（第１～５住）の順に記述している。土壙と溝については、第１表に一括している。

遺物には土器や石器などがある。土器については、図示した土器の器形や文様などを中心に記述し、また破片資料については特徴的な文様をもつものに限り取り上げた。その他の破片資料については、縄文土器は第７表、土師器・須恵器は第８表に一括している。石器については、紹介のみにとどめ、第９・10表に一括している。

（１）竪穴住居跡とその出土遺物

①縄文時代の住居跡

〔第６住居跡〕（第６図）

本住居跡はＢＡ・ＢＢ－163区付近の地山面で床面の一部と炉が確認され、第６土壙によって切られている。しかし、平面形、規模、竪穴層位、壁などは削平のため不明である。

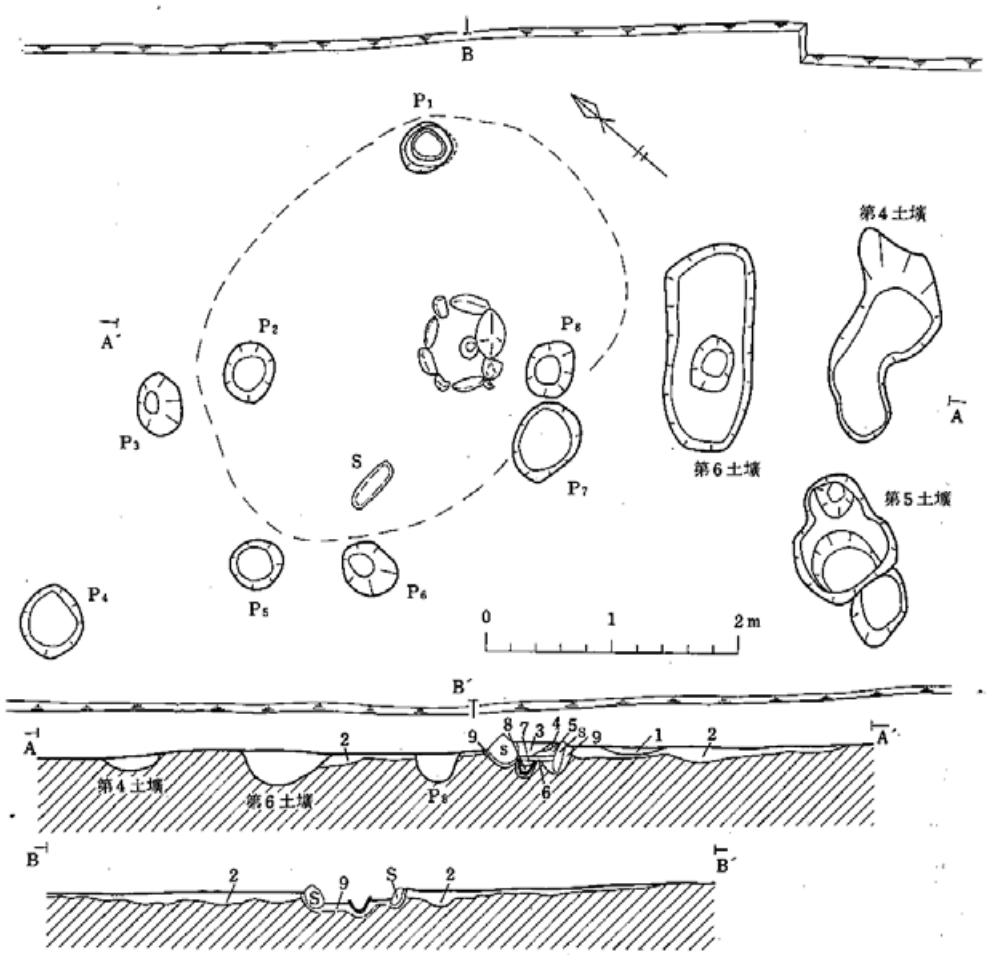
床面：床面はかなり削平されているが、部分的に残っており床面下には掘り方が認められる。炭化物が床面に、炉を中心として楕円形（3.6×2.6m）の範囲で検出された。また床面からは、側面にのみ焼面の認められる石が検出され、大きいもので長さ約44cmある。石の掘り方はなく、炉に使用された石であるかどうかは不明である。

柱穴：住居推定範囲内にピットは８個検出されている。掘り方と柱痕跡の確認されたものはP_1であり、他の７個については、柱痕跡は認められない。８個のピットは深さも一定しておらず、配置などの規則性も認められないことから、柱穴については不明である。

炉：（位置・方向）削平が著しいため、住居内における炉の位置・方向は不明である。

（平面形・規模）平面形は楕円形で、規模は長軸78cm、短軸64cmである。

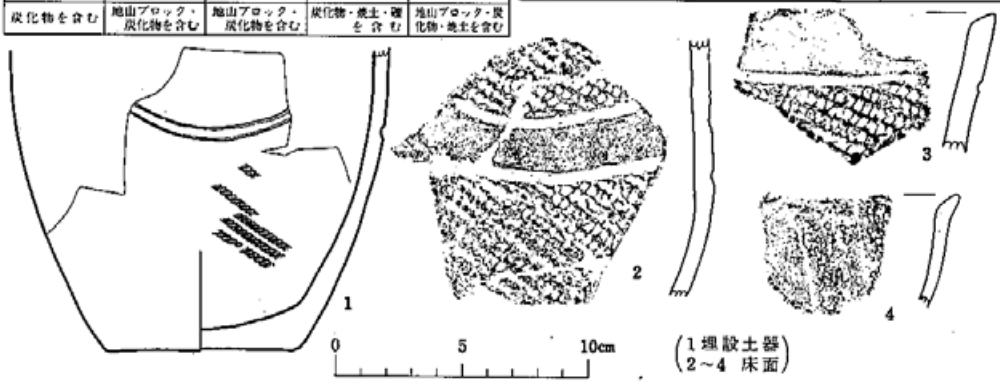
（構造）土器埋設石囲炉が認められた。石囲炉は大小９個の川原石から成り、中央部からやや東寄りに土器が埋設され、正位の状態で検出された。土器の中には２層の堆積土が認められた。



Pit No.	P1（掘り方）	P1（柱痕跡）	P2	P3
深さ（cm）	46	46	18	44
土色	灰黄褐色(10YR5/2)	灰黄褐色(10YR5/2)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	灰黄褐色(10YR5/2)
土性	シルト	シルト	シルト	シルト
備考	地山ブロックを含む	炭化物を含む	地山ブロック・炭化物を含む	地山ブロック・炭化物を含む

P4	P5	P6	P7	P8
7	8	15	13	24
褐灰色(10YR5/1)	暗褐色(10YR3/4)	灰黄褐色(10YR5/2)	灰黄褐色(10YR5/2)	灰黄褐色(10YR5/2)
シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
炭化物を含む	地山ブロック・炭化物を含む	地山ブロック・炭化物を含む	炭化物・焼土・礫を含む	地山ブロック・炭化物・焼土を含む

層No	土色	土性	混入物・その他	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を多量・焼土をわずかに含む	炉内の床のかき出し？
2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロックを多量に含む	住居掘り方埋土
3	暗灰色(10YR3/1)	シルト	炭化物をわずかに含む	炉内堆積土
4	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物・焼土を含む	〃
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・焼土を含む	〃
6	褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物・焼土を多量に含む	〃
7	褐色（10YR4/4）	シルト	炭化物をわずか・焼土を多量に含む	埋設土器内埋積土
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を多量に含む	〃
9	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む	炉掘り方埋土



第6図　第6住居跡と出土遺物

（構築方法）炉には掘り方が認められ、中央部は一段低くなっている。その中に土器が埋設されている。石は掘り方埋土にのっており、掘り方の側壁沿いに並んでいる。これらのことから、炉の構築手順は次のようになる。①石囲部の掘り方を掘る。②この掘り方底面に土器を埋設する。③掘り方に土をつめながら掘り方側壁沿いに石をおく。

（使用痕跡）石囲炉の石と埋設土器は火熱を受け赤変している。炉内には焼土・炭化物が多量に含まれた層が堆積している。炉の西の床面上には、深さ約４㎝の皿状のくぼみがみられ、中には焼土・炭化物が堆積していた。

出土遺物：床面、炉、住居の掘り方埋土から、縄文土器や石器が出土している。

縄文土器（第６図）

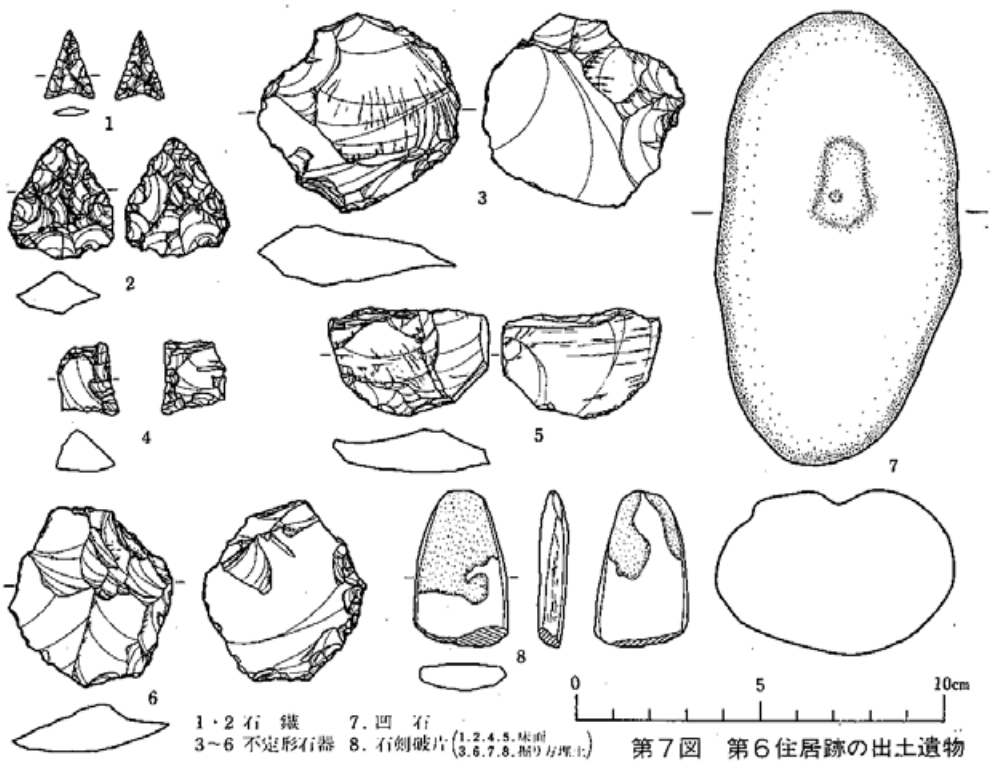
器形や文様構成のうかがえるものはなく、体部下半から底部の残存している埋設土器（第６図１）以外は大部分が小破片である。

第６図１・２の体部には沈線が施され、縄文（ＬＲ）のある部分と無文の部分とに区画されている。

第６図３は口縁部が外傾気味であり、口縁部に１条の沈線が巡ると考えられる。沈線によって縄文（ＬＲ）のある部分と無文の部分とに区画されている。

第６図４の口縁部には沈線が施され、刺突文の部分と無文の部分とに区画されている。

石器（第７図）床面から石鏃、不定形石器、掘り方埋土から不定形石器、石剣、凹石などが出土している。



1・2 石　鏃　　7. 凹　石
3～6 不定形石器　8. 石剣破片（1.2.4.5.床面 3.6.7.8.掘り方埋土）

第７図　第６住居跡の出土遺物

〔第７住居跡〕（第８図）

確認面：ＢＡ・ＢＢ－240～241区付近の地山面で確認した。

重複：第３溝により切られ、第８住居跡と重複している。第８住居跡との新旧関係は湧水のため不明である。

平面形・規模：平面形は不整の円形で、規模は径約４ｍである。住居内面積は約11.3㎡である。

竪穴層位：２層認められた。第１層は住居西部、第２層は住居全域の床面に堆積している。

壁：地山を壁としており、床面から緩やかに立ち上がり、北壁で約20㎝残存している。

床面：掘り方埋土を床としている。第３溝に一部分切られているが、全体にほぼ平坦である。

柱穴：床面からは３個のピットが検出された。３個とも柱痕跡と掘り方が区別でき、堆壌土の土色や土性、大きさなども共通している。炉の長軸方向を中軸線とするとP_1とP_2は対称な位置にあるが、この長軸方向にはピットは検出されなかった。また、P_3と対称な位置にもピットは検出されなかった。

周溝：認められない。

炉：**（位置・方向）**住居跡の南側に位置し、炉の長軸方向はＮ－6°－Ｅである。

（平面形・規模）軸長約1.7ｍ、最大幅約1.1ｍの下ぶくらみの楕円形である。

（構造）土器埋設石囲部、敷石石組部、掘り込み部の３部から成る土器埋設石組複式炉である。

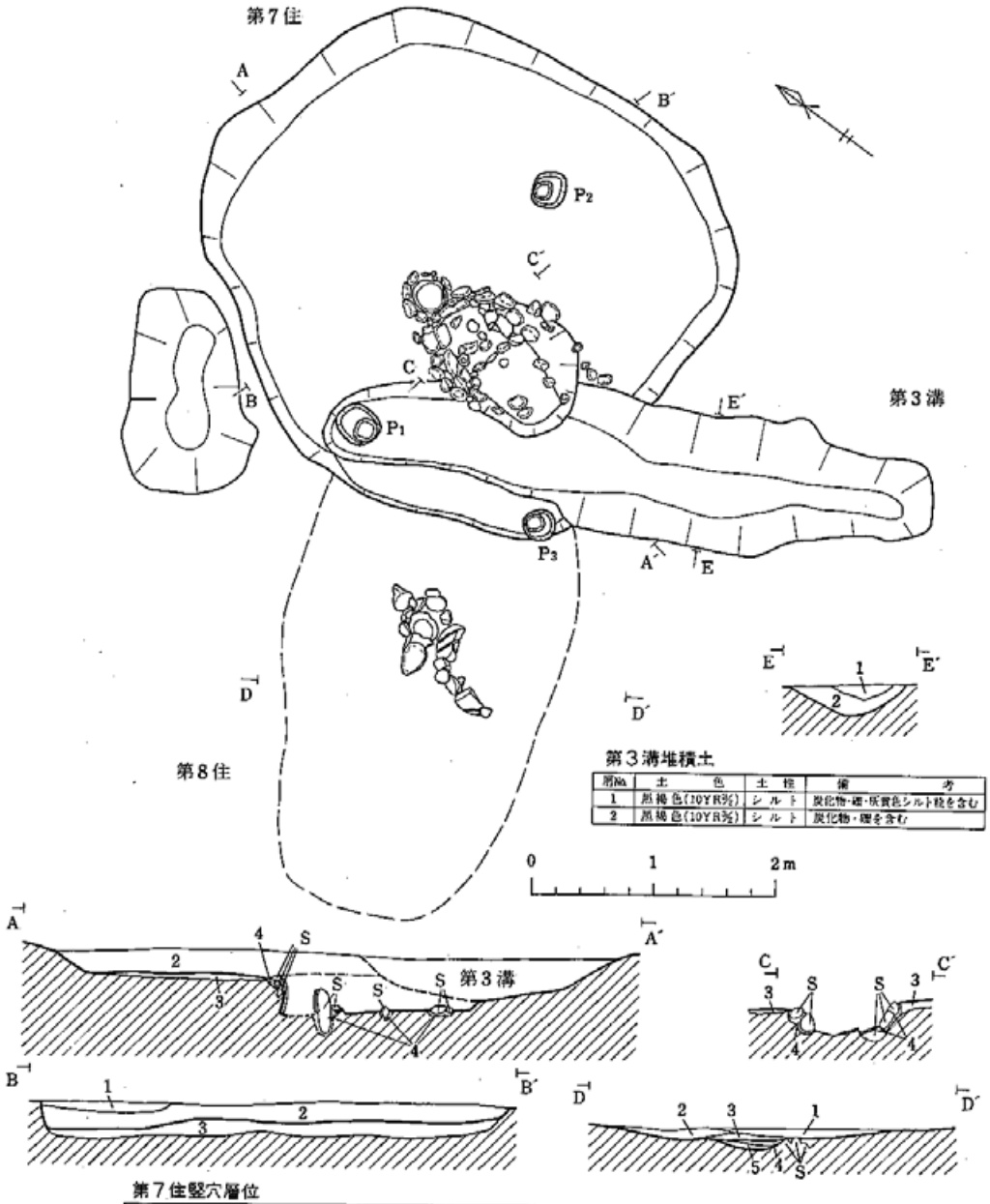
〈土器埋設石囲部〉石囲部の大きさは径45㎝の円形である。底部欠損で径約30㎝の深鉢土器が正位の状態で検出された。埋設土器は大小12個の河原石で囲まれている。

〈敷石石組部〉奥壁・左右側壁に２～３段の石を積みあげている。平面形は半径約50㎝の半円状で、掘り込み部との境には、石を一列に配し区画を作っている。土器埋設石囲部との境の奥壁石は高さ約40㎝、横幅約30㎝、厚さ約10㎝の板状の石を使用している。左側壁より右側壁の石組はくずれがみられる。敷石部分の石は数が少なく、まばらである。床面から底面までの深さは約30㎝である。

〈掘り込み部〉約90×70㎝の楕円形である。底面は、床面から約30㎝の深さで、ほぼ平坦である。

（構築方法）炉全体の掘り方に、土器埋設石囲部では土器が埋設され、その周囲に石が並べられている。敷石石組部では埋土に石がのっている。石は２～３段に積まれ、両側壁石は、奥壁石および敷石石組部と掘り込みを区画する石にかぶっている。これらのことから炉の構築手順は次の様になる。①炉全体の掘り方を掘る。②土器を埋設する。奥壁石、敷石石組部と掘り込み部を区画する石をすえる。③両側壁石をすえる。②・③の過程で掘り方に土がつめられている。

（使用痕跡）埋設土器、敷石石組部の奥壁石・側壁石は火熱を受けて赤変している。掘り込み部の底面には炭化物が多量に認められたが、底面が焼けているかどうかは不明である。なお、炉周辺の床面には炭化物が認められた。



第3溝堆積土

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物・礫・灰黄色シルト粒を含む
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・礫を含む

第7住竪穴層位

層位	層No	土色	土性	混入物・その他	備考	遺物取り上げ層
第1層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物・にぶい黄褐色・細粒を含む		1層
第2層	2	黒色(10YR3/1)	シルト	炭化物・礫を多量に含む		1層
	3	黄灰色(2.5Y5/1)	シルト質粘土	グライ化している	住居掘り方埋土	
	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト		炉掘り方埋土	

Pit No	P_1(掘り方)	P_1(柱痕跡)	P_2(掘り方)	P_2(柱痕跡)	P_3(掘り方)	P_3(柱痕跡)
深さ(m)	50	50	39	39	28	28
土色	緑灰色(10GY5/1)	暗灰色(N3/)	緑灰色(10GY5/1)	暗灰色(N3/)	緑灰色(7.5GY5/1)	暗灰色(N3/)
土性	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土	粘土
備考	炭化物・小礫を含む	炭化物を含む	小礫を含む	炭化物を含む		

第8住竪穴層位

層位	層No	土色	土性	混入物・その他	備考
第1層	1	黒色(10YR3/1)	シルト	炭化物を含む・粘性あり	住居内堆積土？
第2層	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	細かい炭化物を含む	住居内堆積土？
第3層	3	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土	細かい炭化物を含む	住居内堆積土？
	4	黒色(10YR3/1)	シルト	細かい炭化物を含む・粘性あり	炉内堆積土？
	5	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物をわずかに含む・粘性あり	炉内堆積土？

第8図　第7・8住居跡と第3溝

出土遺物：床面・炉・堆積土から、縄文土地や石器が出土している。

縄文土器

完形土器はなく、器形や文様構成のうかがえる土器は、ほとんどが口縁部から体部上半にかけて残存する土器である。器形には深鉢形土器と浅鉢形土器がある。

深鉢形土器

器形や文様構成をうかがえるものには埋設土器（第11図１）を含めて７点あるが、すべて体部下半は欠損している。ここでは図示遺物、口縁部資料、体部資料に分けて述べてみたい。

１．図示遺物

第９図１・３・４は口縁部から体部上半にかけて残存する大形の土器である。口縁部は波状口縁で外反している。頸部に隆起線と刺突の組み合わせによる文様帯を有し、口縁部無文帯と体部文様帯とに区画されている。体部上半には隆起線による渦巻文が描かれている。１・３の文様は４個配置され横方向に展開している。４は渦巻文にそって刺突文が施されている。渦巻文内は無文であり、体部には地文として縄文（ＬＲ－１、ＲＬ－３・４）が施されている。なお、これらの土器の体部は磨消縄文手法によって文様が描かれている。

第９図２は底部が欠損している小形土器である。口縁部は波状口縁で外反しており、体部がふくらんでいる。頸部には第９図１・３・４と同様の文様帯を有し、口縁部無文帯と体部文様帯とに区画されている。体部上半には隆起線による楕円文が４個配置され、横方向に展開している。楕円文内は無文であり、体部には地文として撚糸文（R）が施されている。なお、体部は磨消縄文手法によって文様が描かれている。

第10図１・２は口縁部から体部上半にかけて残存する土器である。口縁部は平口縁で外反し、頸部でしまり、体部がふくらんでいる。頸部には隆起線が巡り、口縁部無文帯と体部文様帯とに区画されている。口縁部下半から体部には隆起線による文様が描かれ、横方向に展開すると考えられる。体部には地文として縄文（ＲＬ－1、ＬＲ－2）が施されている。なお、これらの土器の体部は磨消縄文手法によって文様が描かれている。

第11図１は口縁部から体部上半にかけて残存する埋設土器である。口縁部は４つの大波状口縁で外反し、体部はややふくらむ器形と考えられる。口縁から体部にかけて隆沈文（註）による逆Ｓ字「ƨ」状文が４個描かれ、横方向に展開している。なお、体部は磨消縄文手法によって文様が描かれ、文様内には縄文（ＲＬ）を充塡している。

２．口縁部資料

第12図１は平口縁で内彎している。口縁部から体部上半にかけて隆起線により文様が描かれ、縄文（ＬＲ）のある部分と無文の部分とに区画されている。

第12図４は波状口縁と考えられ、傾きは外反である。隆起線により文様が描かれ、縄文（ＲＬ）

（註）隆沈文とは、隆起線文の片側に沈線文の加えられたものである。

のある部分と無文の部分とに区画されている。

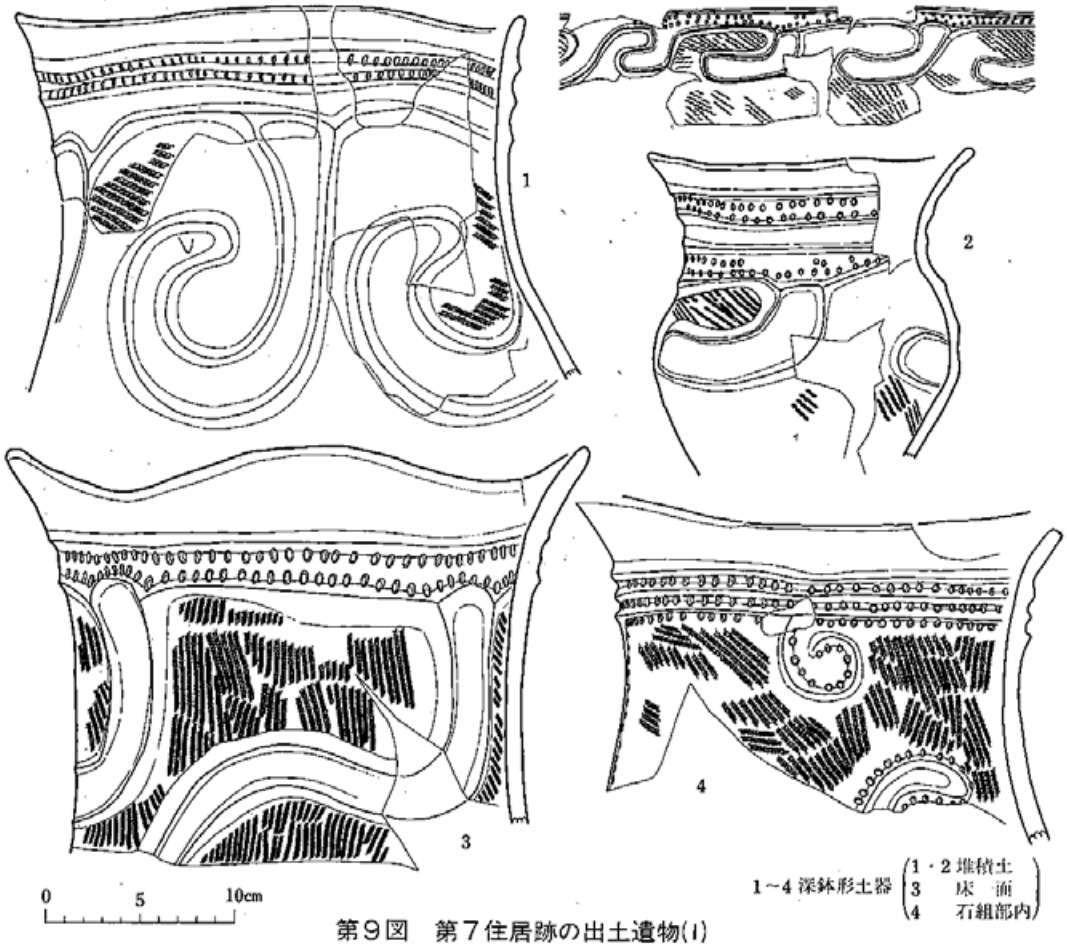
第12図３は平口縁で外反しており、口縁上端部断面は平坦である。隆起線により文様が描かれ、地文として縄文（ＲＬ）が施されている。

第10図３は平口縁で外傾し、頸部で「く」の字に折れ曲がっている。口縁部は無文であり、体部には特別浮き出された隆線による文様が描かれている。文様内には縄文（ＬＲ）が施され、内外面に朱が施されている。

第12図６は平口縁で内彎すると考えられる。隆沈文により文様が描かれ、刺突文のある部分、無文の部分、縄文（ＲＬ）のある部分とに区画されている。

第12図２は平口縁で外反している。頸部に１条の隆沈文が巡り口縁部無文帯と体部文様帯とに区画されている。体部は隆沈文により、縄文（ＬＲ）のある部分と無文の部分に区画されている。

第12図５は平口縁で外反している。沈線により文様が描かれ、縄文のある部分と無文の部分とに区画されている。第12図７・８は平口縁で直立気味である。地文として縄文が施されている。



第９図　第７住居跡の出土遺物(1)

３．体部資料

第10図４、第12図９～12は隆起線で渦巻文が描かれ、縄文（ＲＬ）のある部分と無文の部分に区画されている。

浅鉢形土器

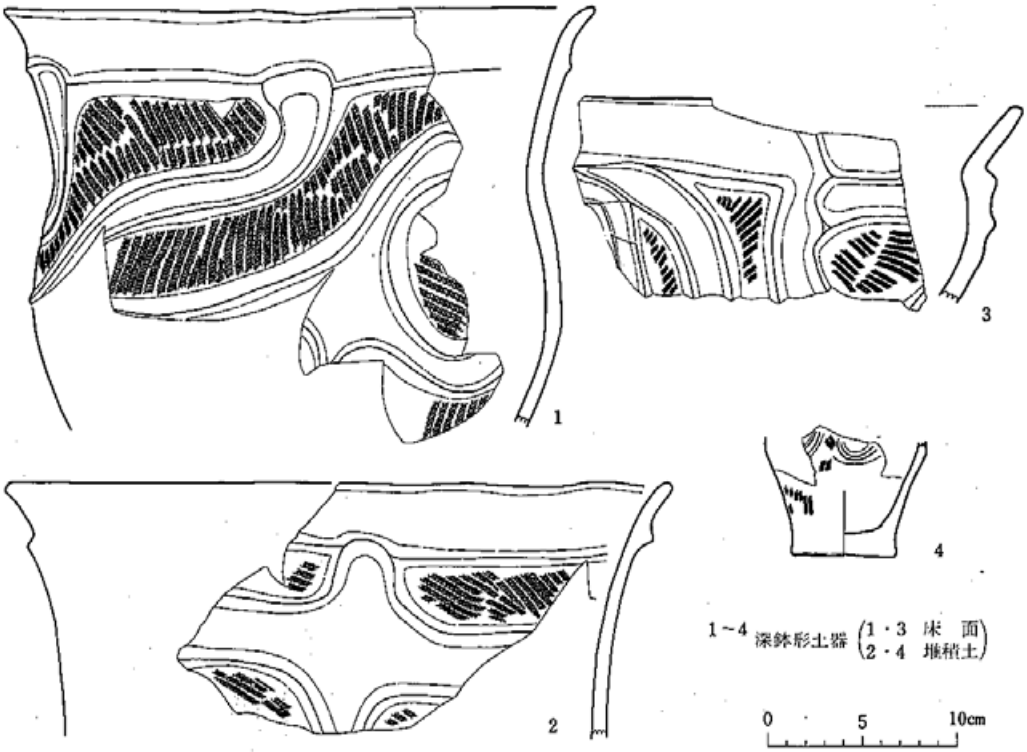
器形や文様構成をうかがえるものは第11図２だけで、他はすべて口縁部資料である。

第11図２は口縁部が平口縁で内彎する器形であり、口縁上端部断面は平坦である。口縁部から体部上半にかけて、隆起線による渦巻文が５個描かれ、横方向に展開している。隆起線により縄文（ＲＬ）のある部分と無文の部分とに区画されている。なお、文様は磨消縄文手法によって描かれている。

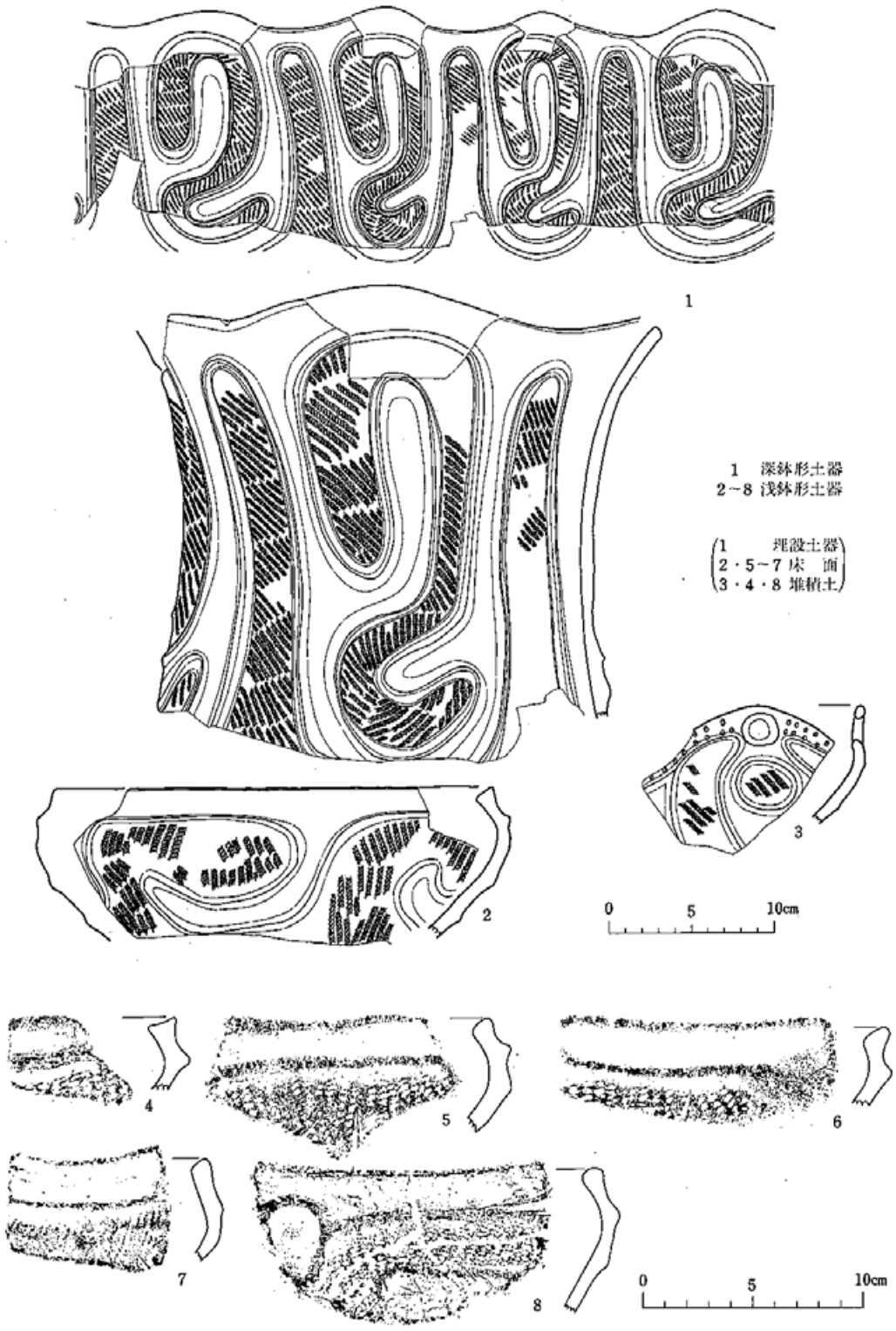
第11図４・５・７の口縁上端部断面は平坦であり、第11図６・８は丸味をもっている。すべて口縁部は隆起線文により縄文（ＲＬ－４～７、ＬＲ－８）のある部分と無文の部分とに区画されている。

第11図３は口縁部に径13㎜の孔と２条の刺突文が横走している。体部には、隆線による楕円文が描かれ楕円文内に縄文（不明）が施されている。

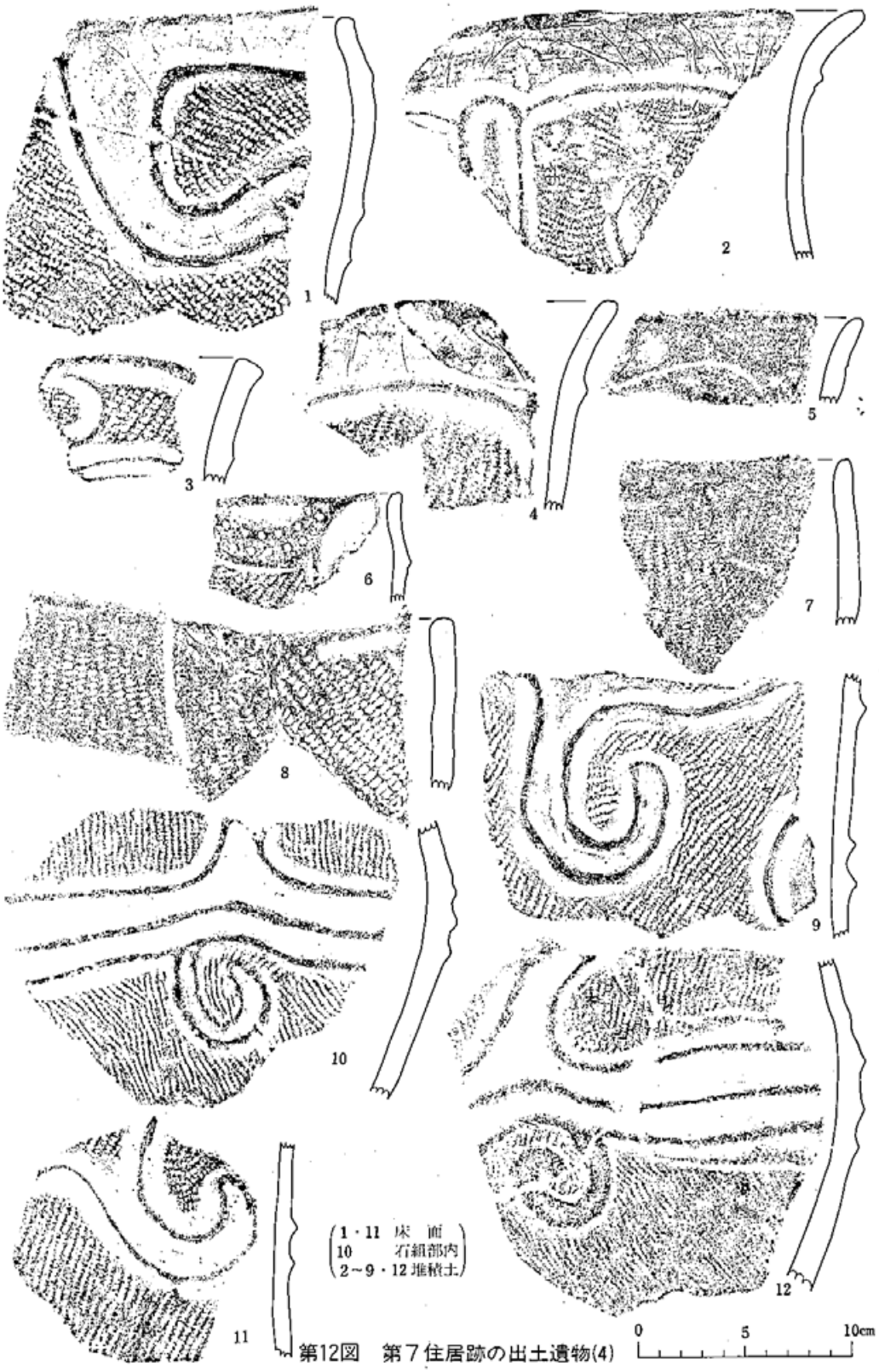
石器（第13図）床面から不定形石器、堆積土から石鏃、不定形石器、磨製石斧、凹石、磨石が出土している。



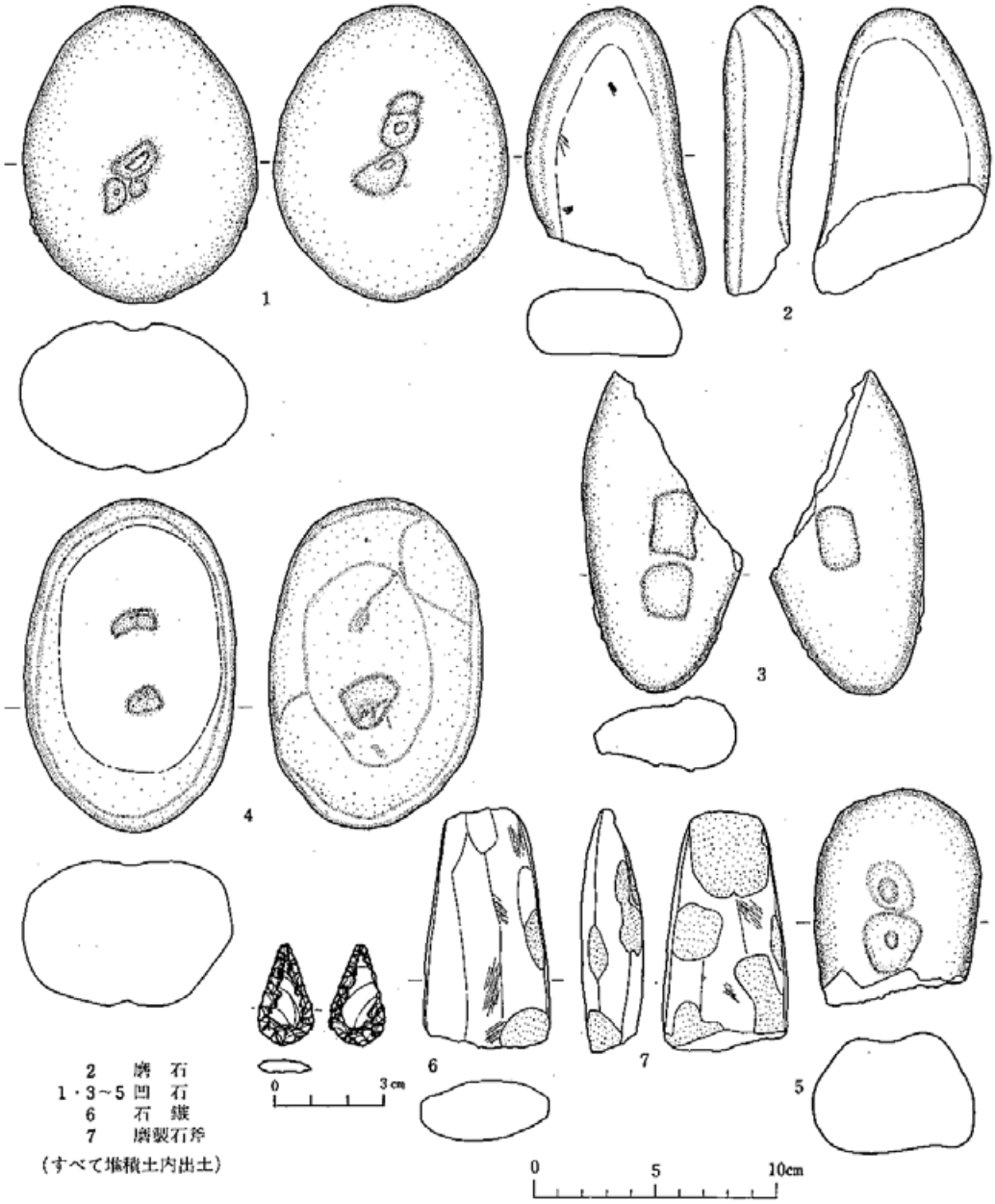
第10図　第７住居跡の出土遺物(2)



第11図　第７住居跡の出土遺物(3)



第12図　第７住居跡の出土遺物(4)



第13図　第７住居跡の出土遺物(5)

〔第８住居跡〕（第８図）

本住居跡はＢＢ・ＢＣ－240～241区の地山面で炉が確認された。しかし平面形・規模・床面などは、削平が著しく不明であり、炉周辺のくぼみに認められた堆積土についても住居内堆積土なのかどうかは不明である。

炉：（位置・方向）削平が著しいため、住居内における炉の位置は不明である。長軸方向は残存部から、N－70°－Eと推定される。

（平面形・規模）平面形・規模は不明である。

（構造）土器埋設石囲部と石組部の一部が残存している土器埋設石組複式炉である。

〈土器埋設石囲部〉石囲部の大きさは径約50cmの円形である。埋設土器は底部のみ残存しており正位の状態で検出された。この土器は大小10個の河原石に囲まれているが、南西部で石は認められず、別個体の深鉢土器が横位の状態で埋設土器に重なって検出された。

〈石組部〉石組部の平面形や規模は不明であり、右側壁石の６個だけが残存している。

（構築方法）検証はできなかった。

（使用痕跡）埋設土器、石囲部の７個の石、石組部の石の内側は火熱を受け赤変している。特に石囲部南側にある石は火熱により、もろくなりき裂の走っているものもある。

出土土器：床面・炉・堆積土から、縄文土器や石器が出土している。

縄文土器

器形や文様構成のうかがえるものは、炉内に横位の状態で検出された深鉢形土器（第14図１）のみである。

深鉢形土器

１．図示遺物

第14図１は口縁部が平口縁で外反し、体部がふくらむ器形である。体部中央に１条の沈線が波状気味に巡り、体部上半と体部下半とに区画されている。体部上半は沈線により斜方向に伸びた逆Ｓ字「〜」状文が４個描かれ、横方向に展開している。逆Ｓ字状文内と体部下半には、地文として複飾縄文（ＲＬＲ）が施されている。なお、体部上半の文様は磨消縄文手法によって描かれている。

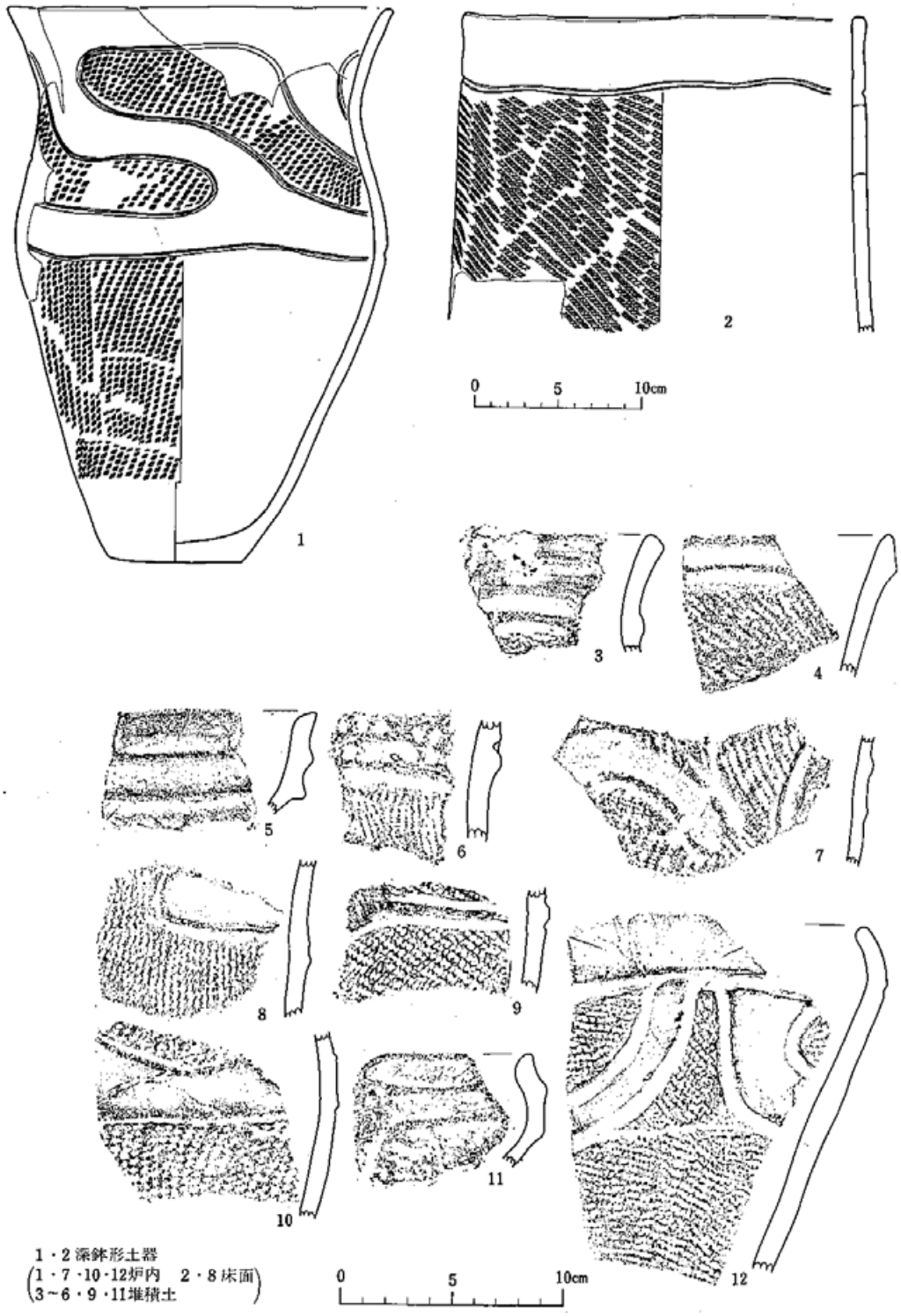
第14図２は口縁部が平口縁で直立気味の円筒状の器形と考えられる。頸部に沈線が１条巡り、口縁部無文帯と体部とに区画されている。体部には地文として縄文（ＬＲ）が施されている。

２．破片資料

第14図３・４・５は口縁部資料であり、すべて平口縁で外反気味と考えられる。隆起線によって文様が描かれ、縄文（ＬＲ）のある部分と無文の部分とに区画されている。

第14図６・７は体部資料であり、６は隆起線と刺突の組み合わせによる文様が描かれ、隆起線の下部には縄文（ＲＬ）が施されている。７は隆起線によって文様が描かれ、縄文（ＲＬ）のある部分と無文の部分とに区画されている。

第14図８・９・10は体部資料であり、隆沈文により文様が描かれ、縄文（ＲＬ－10、ＬＲ－９）や撚糸文（Ｌ－８）のある部分と無文の部分とに区画されている。



第14図　第８住居跡の出土遺物

浅鉢形土器

第14図12は口縁部が平口縁で直立気味、頸部で折れて体部は外傾する器形と考えられる。口縁部には無文帯が巡り、体部との境には１条の沈線が横走している。体部上半には沈線により文様が描かれ、縄文（ＬＲ）のある部分と無文の部分とに区画されている。

第14図11は口縁部が内彎するもので口縁上半部に無文帯が巡り、その下部に１条の隆起線が横走している。また隆起線により文様が描かれ、縄文のある部分と無文の部分とに区画されている。

石器　堆積土から不定形石器や剥片が出土している。

〔第９住居跡〕（第15図）

確認面：ＡＴ・ＢＡ－242・243区の地山面で確認した。

重複：認められない。

平面形・規模：平面形は円形で、規模は径約4.5mである。住居内面積は約15㎡である。

竪穴層位：５層認められた。第１層は住居全域に堆積している。第２層は西側から流入し、西側と北側に堆積している。第３層は東側から流入し、東側と南側に堆積している。第４層は炉の上部に堆積している。第５層は住居全域の床面に堆積している。

壁：地山を壁としており、床面から緩やかに立ち上がる。残存壁高は約20～30cmである。

床面：床面は、全体的にほぼ平坦で、床面下には掘り方が認められる。

柱穴：床面から６個のピットが認められた。６個のピットはP_2・P_4・P_5が住居壁際、P_1・P_3・P_6が壁から約30～60cm離れた位置に検出された。なお、P_1とP_6は炉の両脇に位置している。炉の長軸方向を中軸線とすると、P_1とP_6、P_2とP_3、P_4とP_5がほぼ対称の位置にあたっている。P_1～P_5については柱痕跡と掘り方の区別ができ、柱痕跡および掘り方埋土の土色や土性は共通している。また、掘り方の大きさは径が30～40cm、柱痕跡は径約20cm、深さは35～45cmと一定している。P_6については柱痕跡は不明であるが、掘り方埋土の土色や土性などは他のピットと共通している。これらのピットは配置に規則性がみられ、大きさ・深さ・土色・土性などにも共通性があることから、本住居跡に伴う柱穴と考えられる。

周構：認められない。

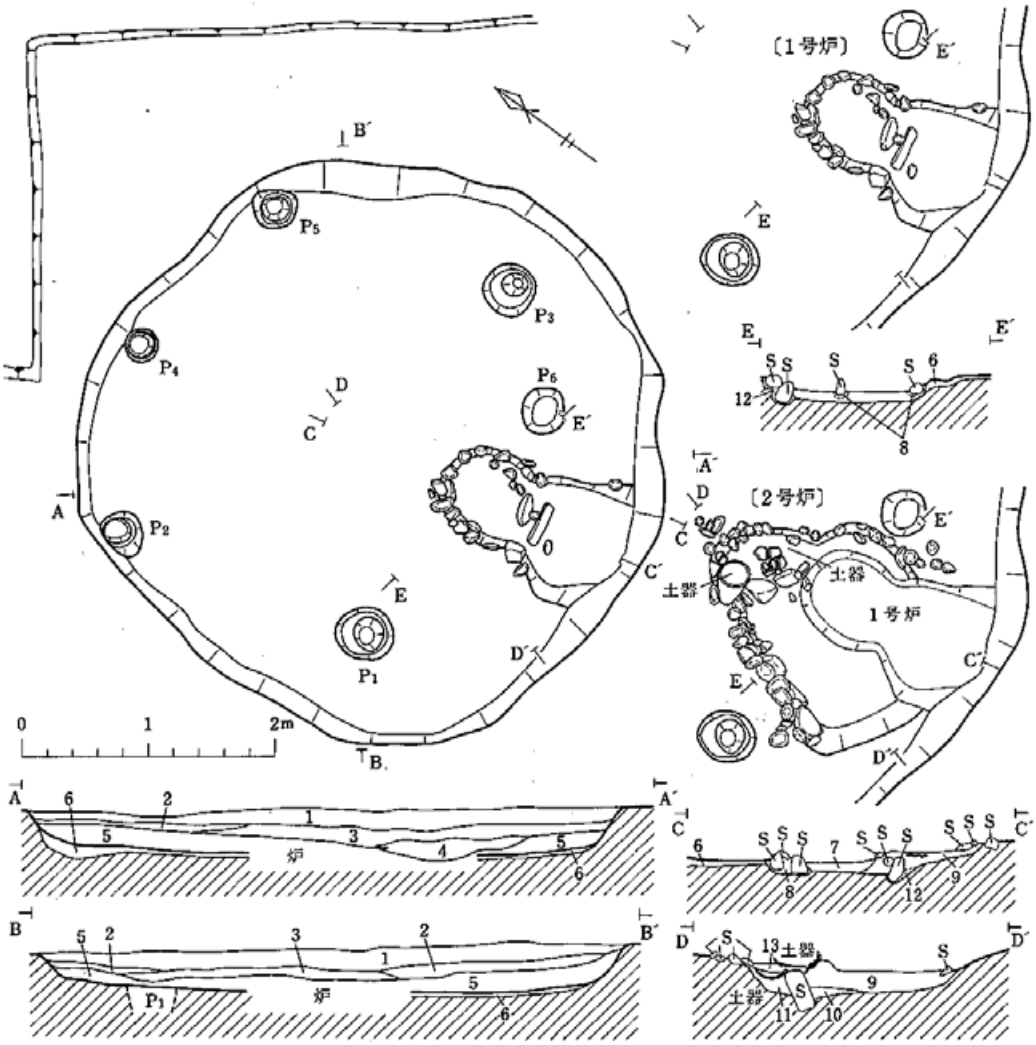
炉：複式炉が２基重複して検出された。１号炉が２号炉内堆積土にのっていることから、１号炉が２号炉よりも新しい時期のものと考えられる。

１号炉（位置・方向）住居跡の南側に位置し、炉の長軸方法はN－13°－Wである。

（平面形・規模）軸長約２m、最大幅約１mのダルマ形である。

（構造）石組部、掘り込み部の２部から成る石組複式炉である。

〈石組部〉20数個の石が円形に並んでおり、その大きさは径が約80cmである。石は１～２段に



層位	層No	土色	土性	混入物・その他	備考	遺物取り上げ層
第1層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	砂礫・酸化鉄分を含む		1層
第2層	2	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト質粘土	砂礫・酸化鉄分を含む		2層
第3層	3	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭・砂礫を少量・酸化鉄分を含む		3層
第4層	4	黒色(10YR1/2)	シルト	炭化物・砂礫を含む		3層
第5層	5	暗灰黄色(2.5Y5/2)	シルト質粘土	炭化物・砂礫を含む		4層
	6	黄灰色(2.5Y5/1)	砂質シルト	炭化物・小礫を含み、グライ化している	世居掘り方埋土	
	7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物を多く含む	1号炉堆積土	
	8	暗褐色(10YR3/3)	シルト		1号炉掘り方埋土	
	9	灰色(5Y5/1)	砂質シルト		2号炉堆積土	
	10	オリーブ黒(5Y3/1)	砂質シルト	炭化物を含む	〃	
	11	オリーブ黒(5Y3/2)	砂質シルト	炭化物を含む	〃	
	12	暗褐色(10YR3/3)	シルト		2号炉掘り方埋土	
	13	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト	炭化物を含む	土器内堆積土	

Pit No	P1(掘り方)	P1(柱痕跡)	P2(掘り方)	P2(柱痕跡)	P3(掘り方)	P3(柱痕跡)	P4(掘り方)	P4(柱痕跡)	P5(掘り方)	P5(柱痕跡)	P6
検出面	34	34	45	45	42	42	40	40	39	39	35
土色	灰色(5Y5/1)	黒褐色(2.5Y3/1)	灰色(5Y5/1)	黒褐色(2.5Y3/1)	灰色(5Y5/1)	黒褐色(2.5Y3/1)	灰色(5Y5/1)	黒褐色(2.5Y3/1)	灰色(5Y5/1)	黒褐色(2.5Y3/1)	灰色(5Y5/1)
土性	シルト質粘土	シルト	シルト質粘土	シルト	シルト質粘土	シルト	シルト質サンド	シルト	シルト質サンド	シルト	シルト質粘土
備考	炭化物を含む グライ化している	炭化物を含む 下部グライ化	炭化物を含む グライ化している	炭化物を含む グライ化している	炭化物を含む グライ化している	炭化物を含む 下部グライ化	炭化物を含む グライ化している	炭化物を含む グライ化している	炭化物を含む グライ化している	炭化物を含む グライ化している	2.5Y5/1ブロック 炭化物を含む

第15図　第９住居跡

積み上げられているが、石組部と掘り込み部との境には、約35×14×10cmほどの長い石が区画として置かれている。石組部の内側は火熱を受け赤変している。

〈掘り込み部〉径約80cmの楕円形であり、南端は住居跡の壁と一致している。

２号炉（位置・方向）住居跡の南側に位置し、炉の長軸方向はN－2°－Wである。

（平面形・規模）軸長約2.2m、最大幅1.6mの下ぶくらみの楕円形である。

（構造）石組部Ⅰと石組部Ⅱの２部から成る石組複式炉である。

〈石組部Ⅰ〉石組部の大きさは約１×0.6mで、約25個の石が半円形に並んでいる。石組内からは体部から底部にかけて残存する深鉢形土器（第16図１）が斜位の状態で検出された。この土器は火熱を受けた形跡があり、埋設土器の可能性はあるが掘り方は認められていない。

〈石組部Ⅱ〉平面形は1.2×1.6mの楕円形で、南側には石がない。石組部Ⅱの奥壁には35×30×15cm、20×20×10cmの２個の大きな石を立て、石組部Ⅰとの境にしている。左側壁は２～３段に石が積み上げられているが、右側壁は石がまばらであり１号炉構築の際に一部が除去されたと考えられる。

出土遺物：床面・炉・ピット・堆積土から、縄文土器や石器が出土している。

縄文土器

器形や文様構成のうかがえるものは４点あり、すべて深鉢形土器である。それらは２号炉の埋設土器の可能性があるもの（第16図１）、炉内出土のもの（第16図２・３）、堆積土内出土土器（第16図４）である。

１．図示遺物

第16図１は口縁部欠損の土器で、体部が内彎する。体部に隆沈文が波状気味に巡り、体部上半の文様帯と体部下半とに区画されている。体部上半には隆沈文により横長の楕円文が描かれ、複節縄文（ＲＬＲ）のある楕円文と無文の部分とに区画されている。体部下半には地文として複節縄文（ＲＬＲ）が施されている。なお、体部上半文様は磨消縄文手法によって描かれている。

第16図２は口縁下半部から体部下半部にかけて残存する土器である。口縁部傾きは外反し、体部がふくらむ器形である。体部中央に１条の沈線が波状に巡り、体部上半文様帯と体部下半とに区画されている。口縁部下半から体部上半にかけて、沈線によって文様が描かれ、横方向に展開すると考えられる。体部下半には地文として縄文（ＲＬ）が施されている。なお、体部の文様は磨消縄文手法によって描かれている。

第16図４は底部のみ欠損している土器である。口縁部は波状口縁で直立気味と考えられ、体部はふくらむ器形である。口縁部直下には１条の沈線が巡っている。体部にはＳ字状連鎖沈線文と、この文様の上端を頂点とする沈線区画による逆Ｖ字状文の組み合わせが４個描かれている。地文としては、撚糸文（Ｒ）が施されているが、部分的に磨消縄文の消し残しがみられる。

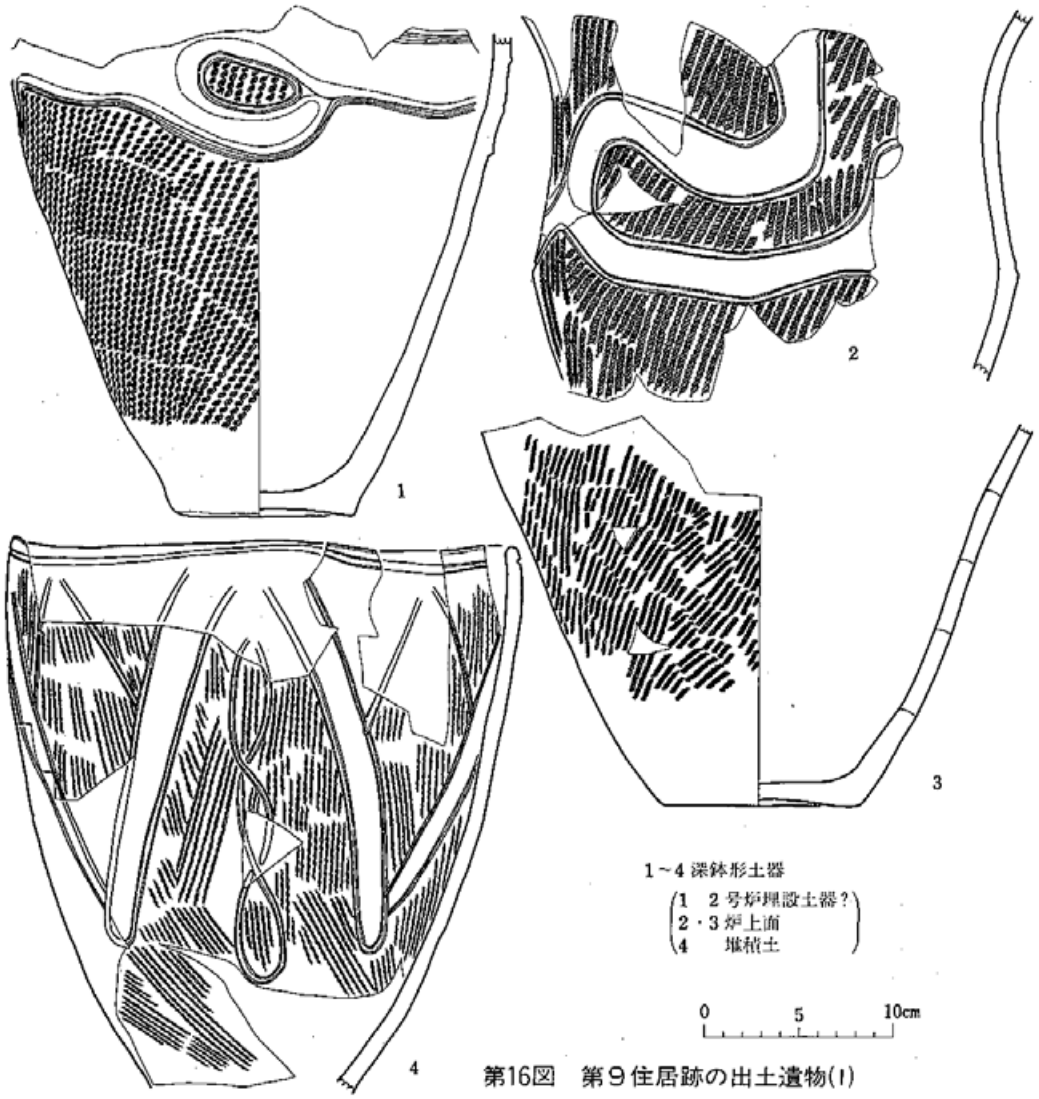
第16図３は体部下半から底部が残存している土器である。口縁部から体部上半の文様は不明であるが、体部下半には地文として縄文（ＲＬ）が施されている。

２．破片資料

第17図１は口縁部資料であり、平口縁で内彎気味と考えられる。隆起線によって文様が描かれ、縄文（ＲＬ）のある部分と無文の部分とに区画されている。隆起線にそって刺突文が部分的に施されている。

第17図２・３は口縁部資料であり、隆沈文によって縄文（ＬＲ－２・ＲＬＲ－３）のある部分と無文の部分とに区画されている。

第17図４～７は体部資料であり、４・５・７は隆起線によって文様が描かれ、縄文（ＲＬ－５・７、ＲＬＲ－４）のある部分と無文の部分に区画されている。６は隆起線と刺突の組み合わせによる

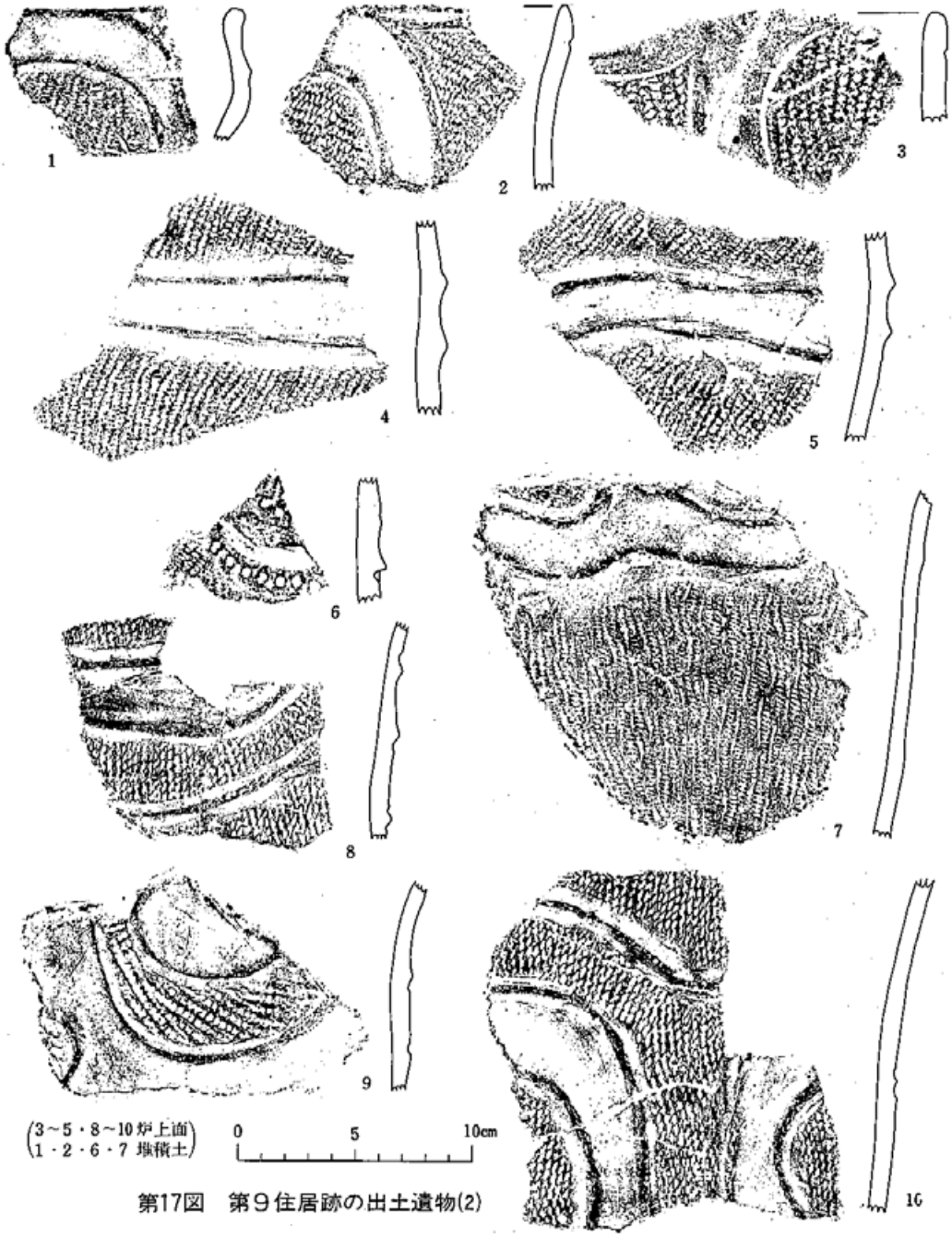


第16図　第９住居跡の出土遺物(1)

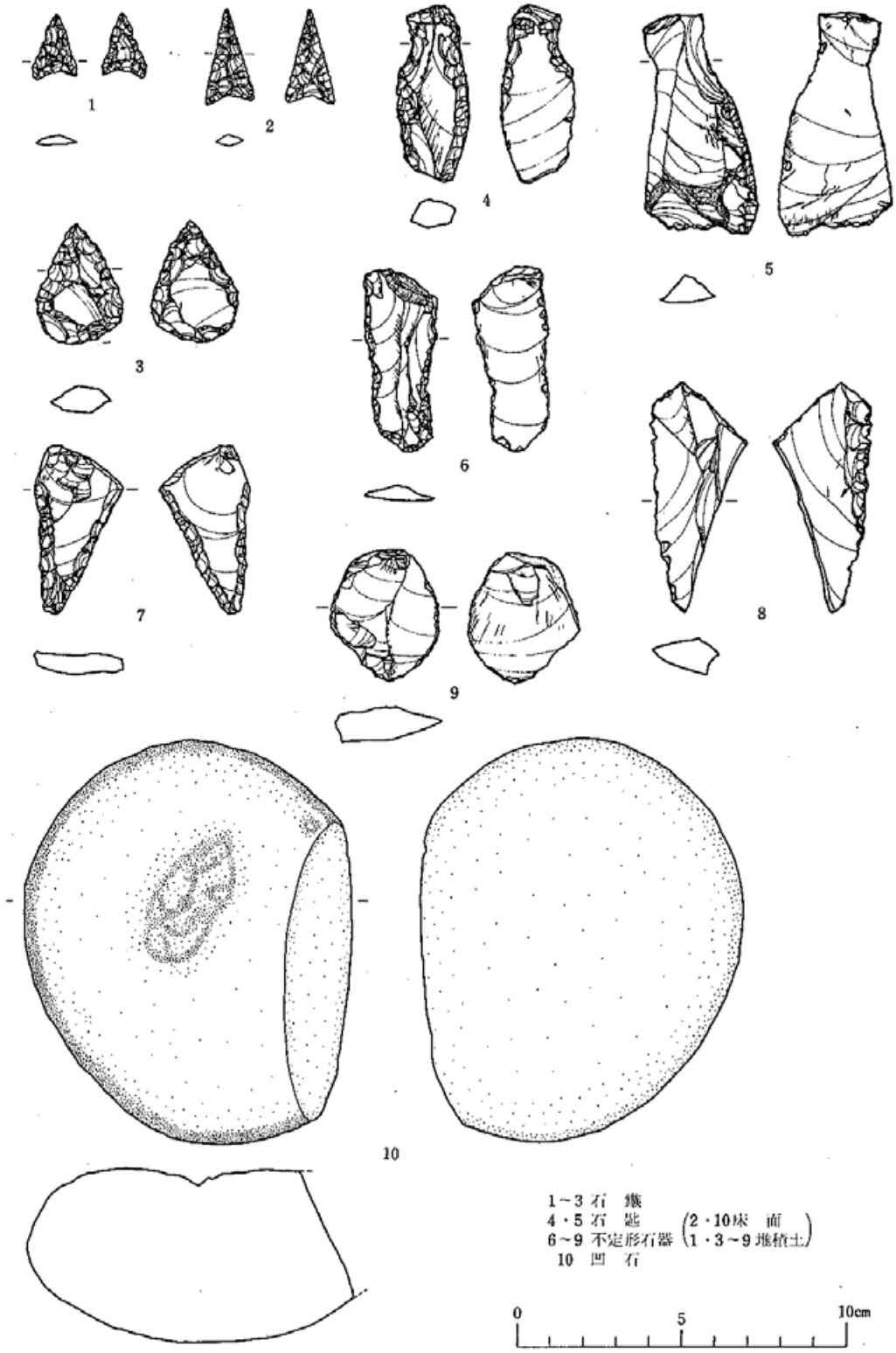
文様が描かれ、その下部に縄文（ＲＬ）が施されている。

第17図８～10は体部資料であり、隆沈文によって文様が描かれ、縄文（ＬＲ－９）や撚糸文（Ｌ－８・10）のある部分と無文の部分とに区画されている。

石器（第18図）床面から石鏃、不定形石器、凹石、堆積土から石鏃、石匙、不定形石器、凹石などが出土している。



第17図　第９住居跡の出土遺物(2)



第18図　第９住居跡の出土遺物(3)

②平安時代の住居跡

〔第１住居跡〕（第19図）

確認面：ＢＬ・ＢＭ－100・101区付近の地山面で確認した。

平面形・規模：南側は削平を受けているが、方形を基調とした住居と考えられる。規模は、北辺が約4.6mある。

竪穴層位：２層認められた。第１層は住居全休の床面に堆積している。第２層は住居東側の床面に堆積している。

壁：東・北・西辺の３辺が残存しており、地山を壁としている。残存壁高は最も良好な部分で約４cmである。

床面：住居北東隅の床面下は掘り方埋土で、大部分は地山を床としている。北東部はやや高いが、全体的にはほぼ平坦で固くしまっている。床面の中央部から東側にかけて炭化物層が１～２mmの厚さではりついている。

柱穴：床面から４個のピットが検出された。いずれのピットも柱痕跡、掘り方の区別はできない。また、ピットの大きさ、堆積土、配置などの共通性や規則性も認められず、柱穴とは考えられない。

周溝：認められない。

カマド：削平のため不明である。

貯蔵穴状ピット：２個検出されている。P_1は北西隅、P_2は北壁際から検出されている。P_1の平面形は径約50cmの円形で、床面からの深さは約10cmある。P_2の平面形は80×60cmの不整な楕円彩で、床面からの深さは約20cmある。

出土遺物：床面・ピット・堆積土から・土師器・須恵器・石器が出土している。住居に伴うと考えられる遺物は、床面・ピット（P_2）から出土したものである。

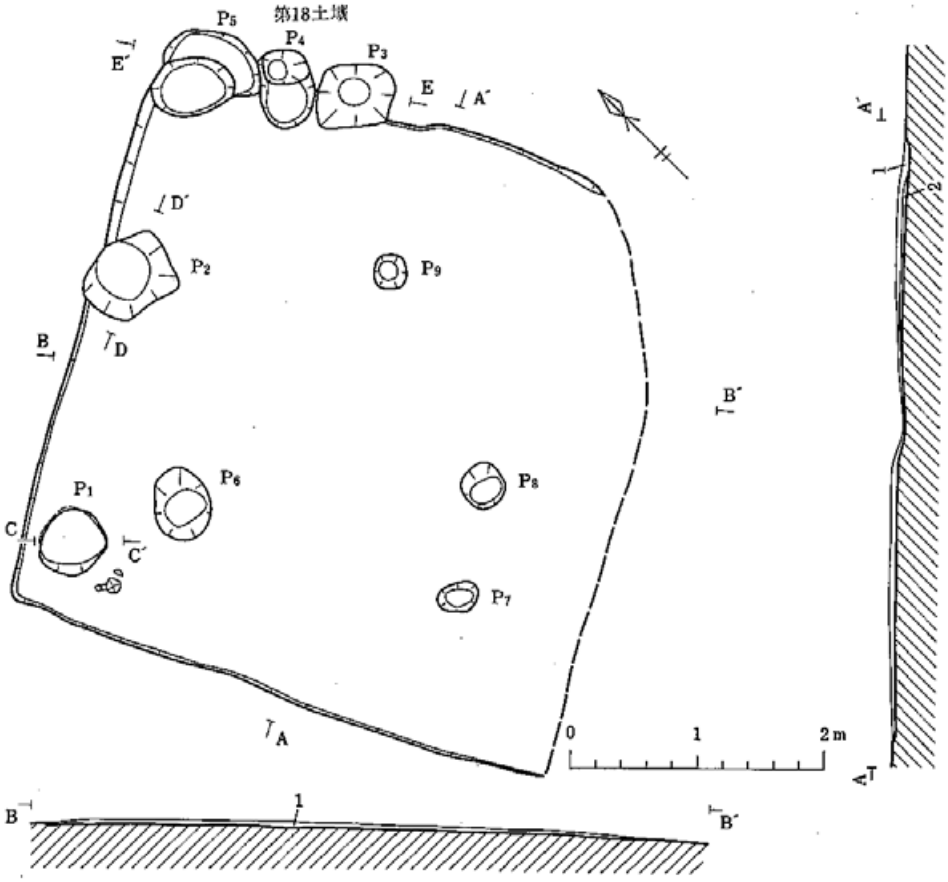
〔住居に伴う遺物〕

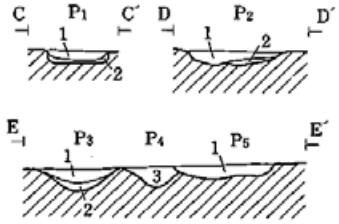
土師器

坏（第19図１）：製作に際し、ロクロを使用しており、底部は回転糸切り技法で切り離されている。器形は体部から口縁部まで直線的に外傾する。体部下端に回転ヘラケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理が加えられている。外面の体部に墨書があるが判続できない。

甕（第19図２）：口縁部から体部上半にかけての破片であり、製作に際し、ロクロを使用している。口縁部は外傾しており、上端が丸くおさまる。内外面ともロクロ調整が施されている。

その他の遺物としては、堆積土から石鏃（第19図３）が出土している。





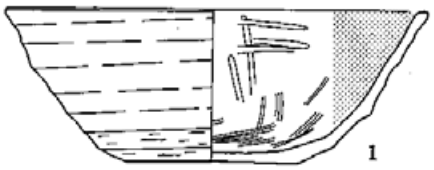
第１住竪穴層位

層位	層No.	土色	土性	出入物その他	遺物取り上げ層
第１層	1	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物・酸化鉄分粒含む	１層
第２層	2	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト		１層

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
深さ(cm)	10	20	16	37	10	21	25	17	7
備考	貯蔵穴ピット	貯蔵穴ピット	第18土壙						

P_1・P_2・第18土壙堆積土

層位	層No.	土色	土性	備考	
第１層	1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物・酸化鉄分を含む	P_1
第２層	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	酸化鉄分を含む	
第１層	1	黄褐色(10YR5/4)	シルト	焼土・炭化物を含む	P_2
第２層	2	黒色(10YR1/1)	シルト	炭化物を多量に含む酸化鉄分を含む	
第１層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物を含む	第18土壙
第２層	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト		
第３層	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物をわずかに含む	



1．土師器 坏（床 面）
2．土師器 甕（床 面）
3．石 鏃　　（堆積土）

0　5　10cm

0　3cm

第19図　第１住居跡と出土遺物

〔第２住居跡〕（第20図）

確認面：ＢＨ・ＢＩ－102区付近の地山面で確認した。

平面形・規模：平面形は不整の長方形で、東辺は約4.4m、北辺は約3.4mである。住居内の面積は約13.1㎡である。

竪穴層位：３層認められた。第１層は住居全域に堆積している。第２層は住居の東側の一部を除いてほぼ床面全体に堆積している。第３層は東壁際から床面にかけて堆積している。

壁：４壁が残存し、地山を壁としている。壁は床面から急角度で立ち上がり、残存壁高は約15～20cmある。

床面：掘り方埋土を床としている。北部と南西隅がやや高いが、全体的にはほぼ平坦で固くしまっている。床面中央部に、炭化物が１～２㎜の厚さで、楕円状にはりついている。

柱穴：床面から３個のピットが検出された。いずれのピットも柱痕跡は認められない。また、規則性なども認められず、柱穴とは考えられない。

周溝：認められない。

カマド：東辺中央部からやや南寄りに検出され、燃焼部と煙道部とから成る。燃焼部側壁は粘土で構築されている。燃焼部は奥行約42cm、幅約46cmである。燃焼部内に支脚として用いられたと考えられる径約18cmの円礫が検出された。燃焼部底面は皿状にくぼんでいる。燃焼部底面・奥壁・側壁の内側・円礫は火熱を受けて赤変している。奥壁はややゆるやかに約12cm立ち上がり、煙道へ移行している。煙道底面の傾斜は煙出しに向かって下がっている。煙道部の長さは約95cmあり、底面幅は10～14cmある。煙出しは、平面形が32×24cmの楕円形で、煙道底面との比高は約36cmある。軸方向はＮ－72°－Ｅである。

貯蔵穴状ピット：中央から南寄り、80×75cmの楕円形で深さ約15cmのピットが認められた。

出土遺物：床面・カマド・堆積土から、土師器・須恵器・石器が出土している。住居に伴うと考えられる遺物は、床面・カマドから出土したものである。

〔住居に伴う遺物〕

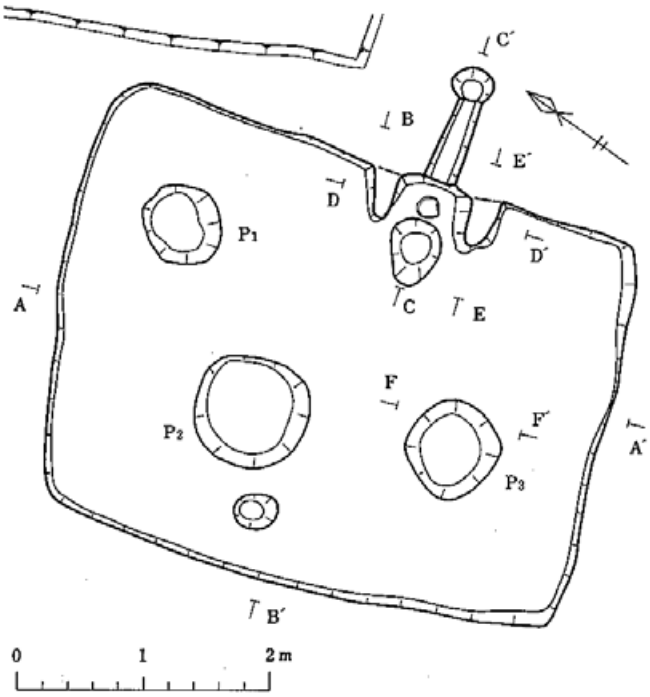
土師器

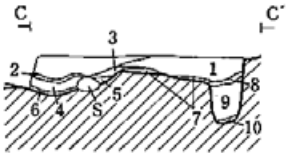
甕（第20図２）：口縁部から体部上半が残存しており、製作に際し、ロクロを使用している。口縁部は外傾し、端部は丸くおさまり、体部中央はわずかにふくらんでいる。内面にはヘラナデが加えられている。また、内面に積み上げ痕が認められる。

須恵器

坏（第20図１）：底部は回転糸切り技法で切り離されており、体部から口縁部まで直線的に外傾する。

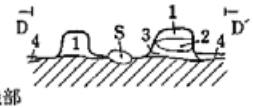
その他の遺物としては、堆積土から不定形石器などが出土している。



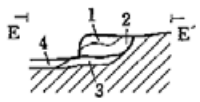


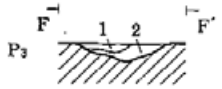
カマド内堆積土

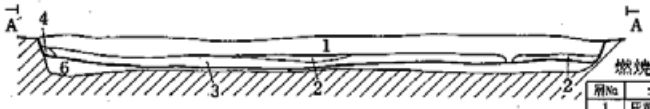
層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	褐灰色(7.5YR5/1)	シルト	酸化鉄分を若干含む
第2層	2	黒色(10YR1/1)		炭化物層
第3層	3	にぶい橙色(7.5YR6/4)	シルト	
第4層	4	にぶい黄色(2.5Y6/3)	シルト	焼土ブロックを含む
第5層	5	赤褐色(5YR4/6)	シルト	焼土であり,炭化物を含む
第6層	6	黒色(10YR1/1)		炭化物層
第7層	7	赤褐色(5YR3/6)		焼土
第8層	8	黒色(10YR1/1)		炭化物層
第9層	9	褐色(7.5YR5/6)	シルト	
第10層	10	黒色(10YR1/1)		炭化物層



燃焼部側壁

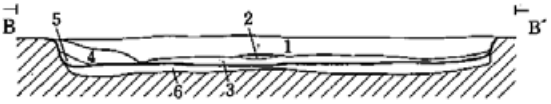






燃焼部側壁

層No	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト質粘土	炭を少量・地山粒を多量に含む
2	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト質粘土	地山ブロックを多量に含む
3	灰黄色(2.5Y7/2)	シルト質粘土	地山ブロックを多量に含む
4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山粒酸化鉄分を多量に含む・住居掘り方埋土



P3 堆積土

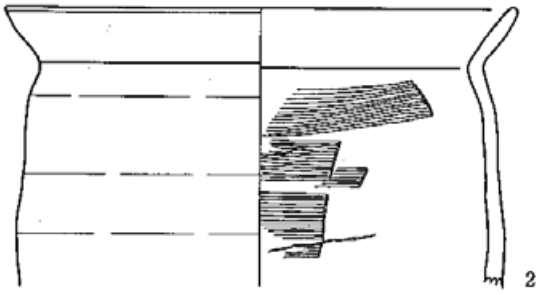
層位	層No	土色	土性	備考
第1層	1	褐色(7.5YR4/3)	シルト	炭・焼土を多量に含む
第2層	2	にぶい褐色(7.5YR5/4)	シルト	炭・焼土を若干・地山粒を多量に含む

Pit No.	P1	P2	P3	P4
深さ(cm)	23	24	15	36
土色		灰黄褐色(10YR5/2)		褐灰(10YR5/1)
土性		シルト質粘土		粘土
備考	貯蔵穴状ピット?		貯蔵穴状ピット?	

第2住居穴層位

層位	層No	土色	土性	混入物・その他	備考	遺物取り上げ層
第1層	1	褐灰色(7.5YR5/1)	シルト	7.5YR5/1シルトを少量ブロック状に酸化鉄分を多量に含む		1 層
第2層	2	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト	7.5YR5/1シルトをブロック状に含む		2 層
	3	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト	炭化物・酸化鉄分を含む		2 層
第3層	4	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト			
	5	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト			
	6	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山粒・酸化鉄分を多量に含む	住居掘り方埋土	

1



2

1. 須恵器 坏(床 面)
2. 土師器 甕(カマド内)

0 5 10cm

第20図 第2住居跡と出土遺物

〔第３住居跡〕（第21図）

確認面：ＢＥ・ＢＦ－100・101区付近の地山面で確認した。

平面形・規模：平面形は１辺約3.4mの方形である。住居内の面積は約11.5㎡である。

竪穴層位：４層認められた。第１層は住居全域に堆積している。第２層は東壁際から住居南東部の床面に堆積している。第３層は南壁際に堆積している。第４層は住居中央部の床面に堆積している。

壁：４壁が残存しており、地山を壁としている。壁は床面から急角度に立ち上がり15～20cm残存している。

床面：掘り方埋土を床としている。全体的にほぼ平坦で、固くしまっている。

柱穴：住居の内からはピットが全く検出されていない。

周溝：認められない。

カマド：北辺中央部に検出され、燃焼部と煙道部とから成る。燃焼部側壁は粘土で構築されている。燃焼部は奥行約80cm、幅約50cmである。燃焼部支脚として用いられたと考えられる角礫が検出された。燃焼部底面は皿状にくぼんでいる。燃焼部底面・奥壁・側壁の内側・角礫は火熱を受けて赤変している。奥壁はほぼ垂直に約12cm立ち上がり、煙道へ移行している。煙道底面の傾斜は、煙出しに向かってわずかに上がっている。煙道部の長さは約1.4mあり、底面幅は10～20cmある。煙出しは平面形が径約40cmの円形で、煙道底面との比高は約32cmある。軸方向はＮ－1°－Ｅである。

貯蔵穴状ピット：北東隅に認められた。約１×0.7mの不整の方形で、深さは約18cmである。

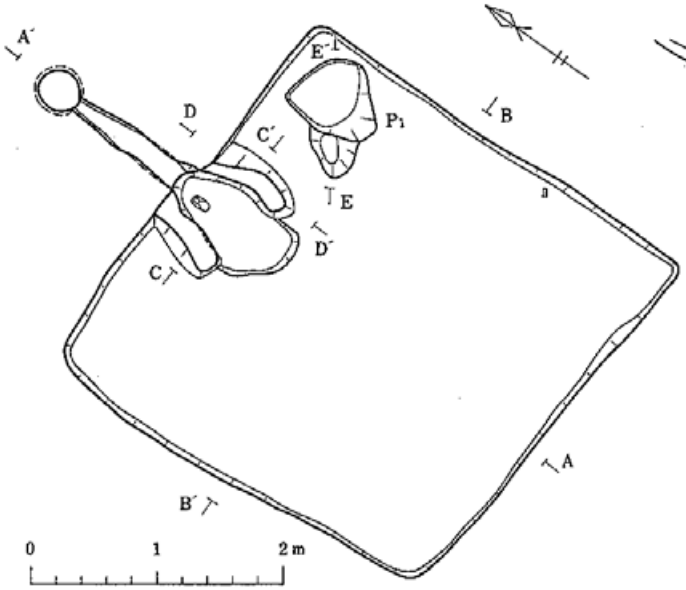
出土遺物：床面・カマド・堆積土から、土師器・須恵器・石器が出土している。住居に伴うと考えられる遺物は、床面・カマドから出土したものである。

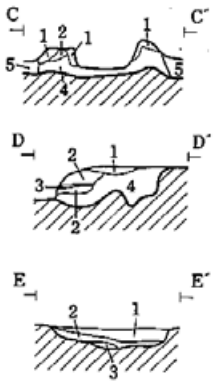
〔住居に伴う遺物〕

土師器

甕（第21図１）：口縁部から体部上半にかけて残存しており、製作に際してロクロを使用している。口縁部が外傾し、端部は平坦であり、体部はわずかにふくらんでいる。体部の外面にはヘラケズリ、内面にはナデが加えられている。

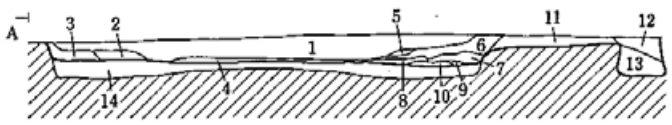
その他の遺物としては、床面から砥石、堆積土から石鏃と砥石が出土している（第21図２～４）。





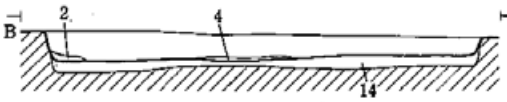
第３住
竪穴層位

層位	層No.	土色	土性	混入物・その他	備考	遺物取り上げ層
第1層	1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト質粘土	わずかに炭を含む・若干酸化されている		1 層
第2層	2	褐色 (10YR5/3)	シルト質粘土	わずかに木炭、焼土を含む・地山ブロックを含む		1 層
第3層	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	木炭・焼土は第2層より多い		1 層
第4層	4	灰褐 (7.5YR5/3)	シルト質粘土	わずかに炭化物・地山粒を含む		1 層
	5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト質粘土	わずかに焼土を含む	カマド崩壊土	
	6	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	焼土を多く含む、若干地山粒・木炭・骨粉を含む	カマド内堆積土	
	7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭・焼土・灰を多量に含む	〃	
	8	黒色 (10YR3/1)		木炭の層・わずかに焼土を含む	〃	
	9	明赤褐色(5YR5/6)	粘土	焼土である	カマド天井崩壊土	
	10	にぶい黄褐色(5YR5/3)	粘土	灰を多量に含む・わずかに焼土を含む	カマド内堆積土	
	11	にぶい褐色(7.5YR5/3)	シルト	炭化物を少量含む	壁直内堆積土	
	12	褐色 (7.5YR5/3)	シルト	わずかに炭化物粒を含む	壁直し内堆積土	
	13	にぶい褐色(7.5YR5/3)	シルト	炭化物を多量に含む	〃	
	14	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト		住居掘り方埋土	



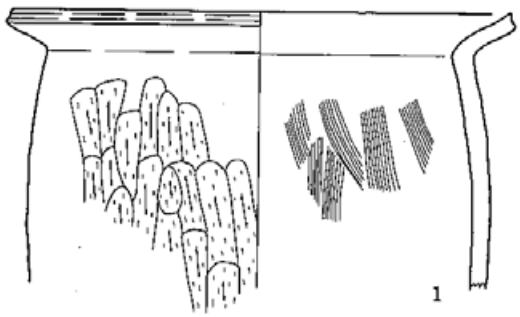
燃焼部側壁

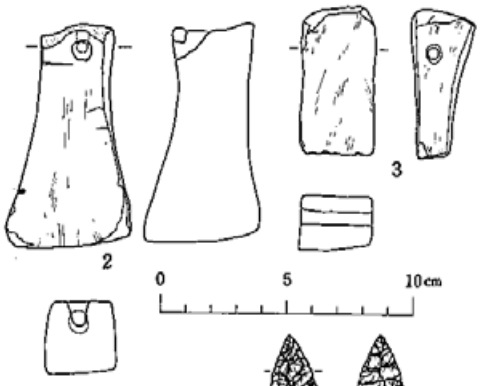
層No.	土色	土性	備考
1	にぶい褐色(7.5YR5/3)	シルト質粘土	焼けて赤変している
2	にぶい褐色(7.5YR5/3)	シルト質粘土	
3	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	炭化物を含んでいる
4	にぶい褐色(7.5YR5/3)	シルト質粘土	
5	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	住居掘り方埋土



P1 堆積土

層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土	地山ブロック、少量の木炭を含む
第2層	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト質粘土	木炭・焼土・炭を多く含む
第3層	3	褐色 (7.5YR5/3)	粘土	灰を多量に、焼土をわずかに含む





1．土師甕棺（カマド内）
2．砥　石（床　面）
3．砥　石（堆積土）
4．石　鏃（堆積土）

第21図　第３住居跡と出土遺物

〔第４住居跡〕（第22図）

確認面：ＢＡ・ＢＢ－98～100区付近の地山面で確認した。

平面形・規模：平面形は１辺約4.6mの方形である。住居内の面積は約19.4㎡である。

竪穴層位：２層認められた。第１層は住居全域に堆積している。第２層は住居西壁際から床面にかけて堆積している。

壁：４壁が残存しており、地山を壁としている。壁は床面からゆるやかに立ち上がり、５～11cm残存している。

床面：掘り方埋土を床としており、全体的にはほぼ平坦で固くしまっている。

柱穴：床面から17個、壁に接して４個のピットが検出され、P_1～P_8には柱痕跡が認められた。そのうちP_1～P_4の底面には礎板（図版９）が検出されており、P_1はP_{26}を、P_2はP_{27}を、P_4はP_{28}を切っている。また、住居跡周辺の壁ぞいから７個のピットが検出され、柱痕跡の認められたのはP_9だけである。ピットの大きさ、深さ、堆積土の土色・土性、配置などからみて、P_1～P_4に共通性や規則性が認められ、４本柱を基本とした住居跡が考えられる。また、住居周辺から検出された７個のピットについては、配置や深さなどの規則性から、住居跡に関連したピットと考えられる。

周溝：認められない。

カマド：東辺中央部から南寄りに検出され、燃焼部と煙道部とから成る。燃焼部は住居壁外に約50cm、地山を削り出し、両側壁先端は粘土で構築されている。燃焼部は奥行約70cm、幅約80cmで側壁は「ハ」字状に開く。底面からは支脚として用いられたと考えられる角礫が検出された。燃焼部底面は皿状にくぼんでいる。底面・奥壁・側壁の内側は火熱を受けて赤変している。奥壁はやや急角度で約11cm立ち上がり、煙道へ移行している。煙道底面には凸凹がある。煙道部の長さは約1.5mあり、底面幅は約15cmある。煙出しは平面形が40×30cmの楕円形で、煙道底面との比高は約34cmある。軸方向はＳ－76°－Ｅである。

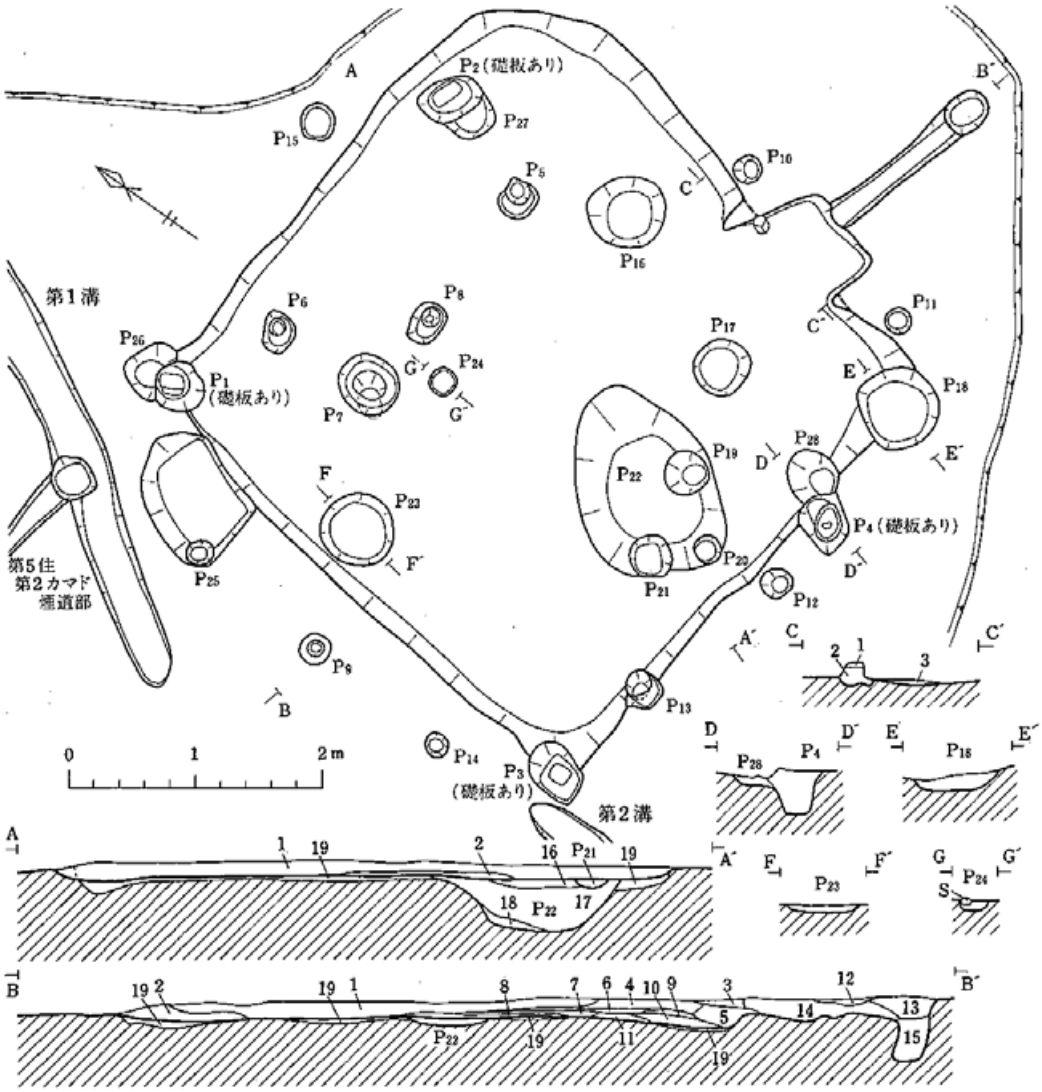
貯蔵穴状ピット：住居南東隅に認められた。平面形は径約65cmの円形で深さは約14cmである。

出土遺物：床面・カマド・煙道・ピット・堆積土から、土師器・須恵器・石器が出土している。住居に伴うと考えられる遺物は、床面・カマド・煙道・ピットから出土したものである。

〔住居に伴う遺物〕

土師器

坏（第23図１・２）：１はP_{19}、２はP_{20}から出土し、２点とも製作に際してロクロを使用している。底部の切り離し技法は、１は回転糸切りであり、２は磨滅のために不明である。器形は２点とも、底部から口縁部にかけてやや丸味をもって立ち上がっている。１の体部にはロクロ調整、体部下端から底面周縁に手持ちヘラケズリが施され、２の体部は磨滅のため不明である。



第4住竪穴層位

層位	層No	土色	土性	混入物・その他	備考	遺物取り上げ層
第1層	1	褐色(10YR5/4)	シルト	わずかに炭化物・焼土を含む・酸化をんている		1 層
第2層	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト質粘土	わずかに・地山粒を含む・酸化されている		1 層
	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	わずかに炭やカマド粘土を含む	カマド内流出土	
	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土(7.5YR5/6)を多量に含む	〃	
	5	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	炭・焼土をわずかに含む	〃	
	6	黒色(10YR2/1)		炭・わずかな焼土を含む	〃	
	7	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト質粘土	地山に類似する・酸化されている	〃	
	8	褐色(10YR4/4)	粘土	炭・焼土を含む・地山粒をわずかに含む	〃	
	9	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土	炭層・わずかに焼土を含む	〃	
	10	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土	炭を主体とする・わずかに炭・焼土を含む	〃	
	11	黒色(7.5YR1/2)		炭	〃	
	12	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土を含む	煙道内流出土	
	13	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	炭を含む	〃	
	14	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	焼土・煙道崩壊土・炭を含む	〃	
	15	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土	炭・焼土をわずかに含む	煙道内流出土	
	16	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物・地山粒を含む	P22 埋土	
	17	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	地山ブロックを多量に含む	〃	
	18	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物・地山粒を含む	〃	
	19	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロックを含む	住居掘り方埋土	

燃焼部側壁

層No	土色	土質	備考
1	にぶい褐色(7.5YR5/3)	シルト質粘土	
2	にぶい褐色(7.5YR5/3)	シルト質粘土	地山ブロックを多量に含む
3	赤褐色(5YR5/6)	砂質シルト	

P11	No	P1（掘り方）	P1（柱痕跡）	P2（掘り方）	P2（柱痕跡）	P3（掘り方）
長さ(cm)		57	57	58	58	60
土色		褐色(7.5YR5/3)	黒褐色(10YR3/1)	灰黄褐色(10YR5/2)	黒褐色(10YR3/2)	褐色(7.5YR5/3)
土性		シルト	シルト質粘土	シルト	シルト質粘土	シルト
備考		礎板あり		礎板あり		礎板あり
				(図版9－13)		(図版9－14)

P3（柱痕跡）	P4（掘り方）	P4（柱痕跡）	P5（掘り方）	P5（柱痕跡）	P6（掘り方）
60	57	57	68	68	32
黒褐色(10YR3/2)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	黒褐色(10YR3/1)	灰黄褐色(10YR5/2)	暗灰色(10YR5/1)	褐色(10YR4/4)
シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト	シルト質粘土	シルト
	礎板あり				

P6（柱痕跡）	P7（掘り方）	P7（柱痕跡）	P8（掘り方）	P8（柱痕跡）	P9（掘り方）
32	59	59	50	50	23
にぶい黄褐色(10YR5/4)	褐色(10YR4/4)	暗褐色(10YR3/3)	暗褐色(10YR3/3)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	暗褐色(10YR3/3)
シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト

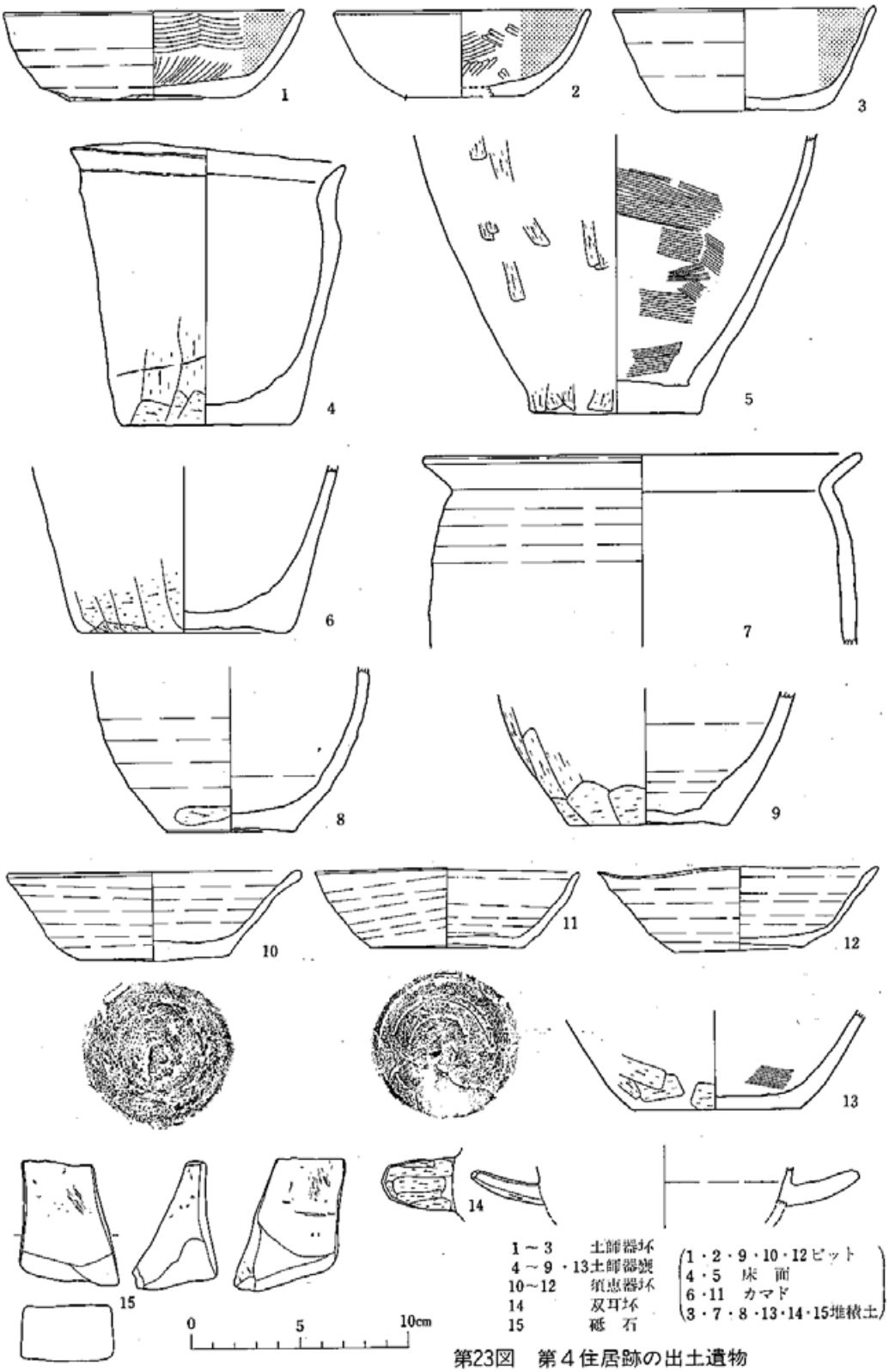
P9（柱痕跡）	P10	P11	P12	P13	P14
23	18	27	25	45	10
黒褐色(10YR3/2)	黒褐色(10YR3/2)	黒褐色(10YR3/2)	褐色(7.5YR4/3)	暗褐色(10YR3/3)	黒褐色(10YR3/2)
シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト

P15	P16	P17	P18	P19	P20
7	15	16	15	47	36
にぶい黄褐色(10YR5/3)	灰黄褐色(10YR5/2)	灰褐色(7.5YR4/2)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	暗褐色(10YR3/3)	暗灰色(10YR3/1)
シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト

P21	P22	P23	P24	P25	P26
16	44	7	10	32	15
にぶい黄褐色(10YR5/3)		暗色(10YR3/3)	にぶい黄褐色(10YR5/3)	黒褐色(10YR3/1)	褐色(10YR4/4)
シルト		シルト質粘土	シルト質粘土	シルト	シルト

P27	P28
17	60
褐色(10YR4/4)	にぶい黄褐色(10YR5/3)
シルト	シルト

第22図　第４住居跡



第23図　第４住居跡の出土遺物

内面は、２点ともヘラミガキ・黒色処理が加えられている。

甕（第23図４・５・６・９）：４はロクロ不使用の完形土器である。器形はやや歪んでいるが、口縁部径と器高がほぼ等しく、最大径が口縁部にある。口縁部は外傾し、体部は直線的である。体部外面の下半にヘラケズリが施され、積み上げ痕も認められる。５・６・９は体部下半から底部にかけて残存している。９は製作に際してロクロを使用しており、５・６は使用していない。３点とも体部外面の下半にヘラケズリが加えられ、５の内面にはヘラナデが施されている。

須恵器

坏（第23図10・11・12）：３点とも底部はヘラ切り技法で切り離されており、器形は体部から口縁部までやや直線的に外傾している。再調整は加えられていない。

〔堆積土内出土遺物〕

土師器

坏（第23図３）：製作に際し、ロクロを使用している。器形は体部から口縁部まで直線的に外傾する。外面はロクロ調整であり、内面と底面は磨滅が著しく、調整は不明である。内面には黒色処理の痕跡がわずかに認められる。

甕（第23図７・８・13）：７・８は製作に際し、ロクロを使用している。７は口縁部から体部にかけての破片である。口縁部が外傾し、端部は丸くおさまり、体部はふくらんでいる。８の底部は回転糸切り技法で切り離され、再調整として底面周縁に軽いナデが施されている。体部下端にはケズリが加えられている。13の底部切り離しはヘラケズリによる再調整のため不明である。体部外面にヘラケズリ、内面にナデが加えられている。

須恵器

双耳坏（第23図14）：坏の体部から耳にかけての破片である。

その他の遺物としては、堆積土から砥石（第23図15）が出土している。

〔第５住居跡〕（第24図）

確認面：ＢＡ～ＢＣ－101・102区付近の地山面で確認した。

重複：第２溝が第２カマドの煙出しの一部を切っている。

平面形・規模：平面形は南北にやや長い隅丸方形で、東辺は約4.5m、北辺は約4.1mである。住居内の面積は約17.6㎡である。

竪穴層位：１層認められ、住居全域の床面に堆積している。

壁：４壁が残存しており、地山を壁としている。壁は床面から急角度で立ち上がり、８～12cm残存している。

床面：掘り方埋土を床としている。住居南部がやや高いが、全体的にはほぼ平坦で、固くし

まっている。カマド周辺には炭化物、焼土が認められた。

柱穴：床面から８個のピットが検出された。いずれのピットも柱痕跡は認められない。

周溝：認められない。

カマド：東辺中央部に第１カマド、東辺中央部から南寄りに第２カマドが検出されている。燃焼部側壁が、第２カマドには残存していないが、第１カマドには残存していることから、第１カマドが住居廃絶時のものと考えられる。

第１カマドは、燃焼部と煙道部とから成る。燃焼部側壁は粘土で構築されている。燃焼部は奥行約70cm、幅約60cmである。燃焼部内に、支脚として用いられたと考えられる土師器甕が検出された。燃焼部底面・奥壁・側壁の内側・土師器甕は火熱を受けて赤変している。奥壁は、ゆるやかな角度で約10cm立ち上がり、煙道へ移行している。煙道底面の傾斜は、煙出しに向って下がっている。煙道部の長さは約1.4mあり、一部分はトンネル状になって残存している。底面幅は約20cmある。煙出しは平面形が35×30cmの楕円形で、煙道底面との比高は約15cmある。軸方向はＳ－81°－Ｅである。

第２カマドは燃焼部が除去されており、煙道も一部削平されている。煙道底面の傾斜は、煙出しに向かって下っている。煙道部の長さは約1.5mと推定される。底面幅は約15cmある。煙出しは径約30cmの円形で、煙道底面との比高は約17cmある。軸方向はＳ－79°－Ｅである。

出土遺物：カマド・煙道・煙出し・ピット・堆積土から、土師器・須恵器・石器が出土している。住居に伴うと考えられる遺物は、カマドから出土したものである。

〔住居に伴う遺物〕

土師器

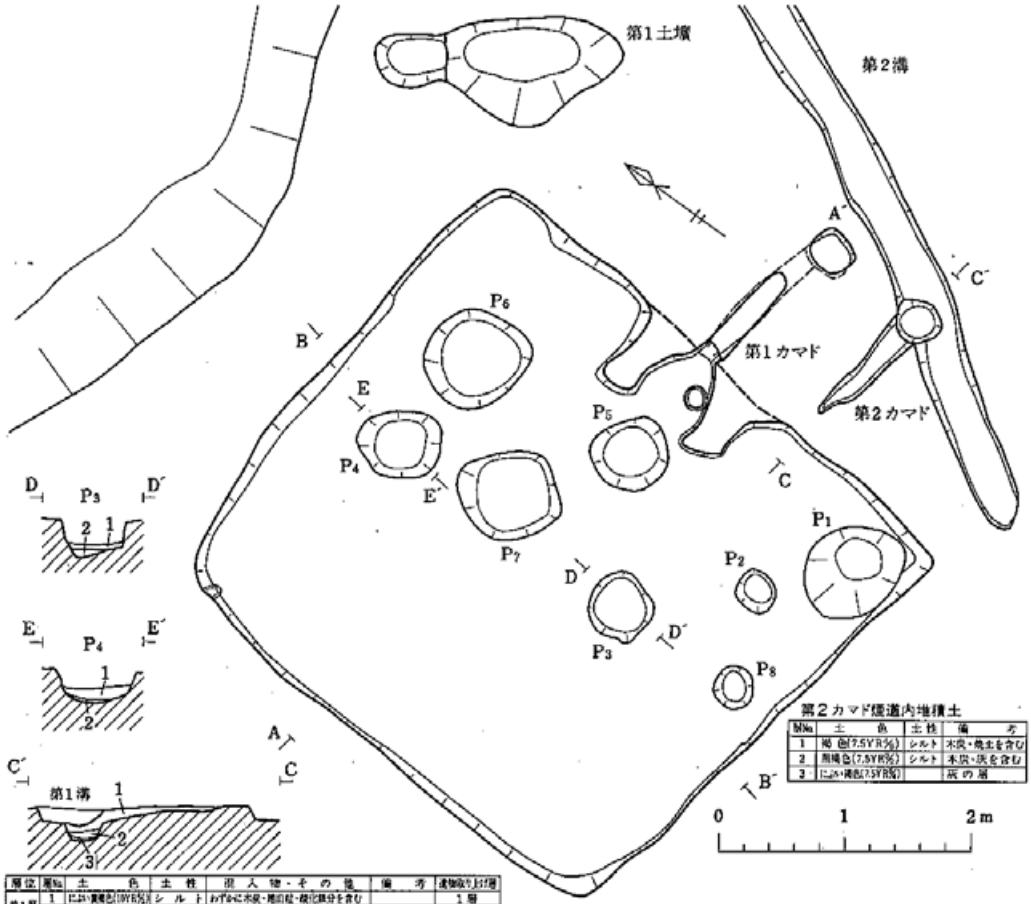
甕（第24図２）：カマドの支脚として用いられたと考えられる土器で、口縁部から体部上半にかけて残存している。製作に際し、ロクロを使用していない。口縁部が外傾し、端部は丸くおさまり、体部中央がわずかにふくらむ。口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。内外面にわずかに積み上げ痕が認められる。

〔堆積土内遺物〕

土師器

坏（第24図１）：製作に際し、ロクロを使用している。器形は体部から口縁部まで直線的に外傾する。体部下端から底部全面に回転ヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が加えられている。底部切り離しは再調整のため不明である。

その他の遺物としては、堆積土から石鏃（第24図３）が出土している。

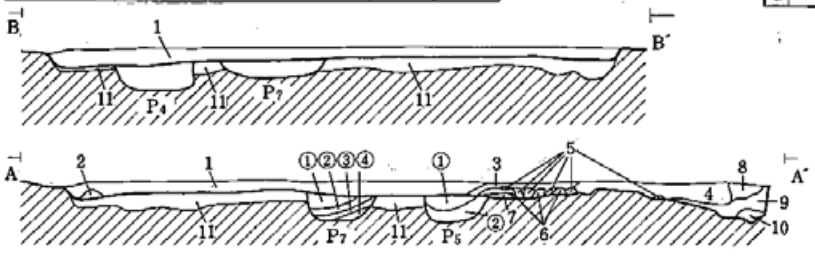


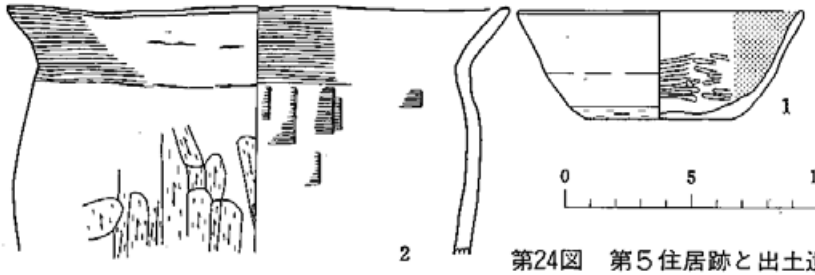
第2カマド煙道内堆積土

No	土色	土性	備考
1	褐色(7.5YR5/6)	シルト	木炭・焼土を含む
2	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	木炭・灰を含む
3	にぶい褐色(7.5YR5/4)		灰の層

層位	層No.	土色	土性	混入物・その他	備考	遺物取り上げ層
第1層	1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	わずかに木炭・地山粒・酸化鉄分を含む		1層
	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト質粘土	1層の土を粒状に若干含む・地山ブロック		
	3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	1層よりも木炭・焼土を多く含む	カマド内堆積土	
	4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	1層よりも木炭を多く含む	煙道内堆積土	第1カマド
	5	にぶい褐色(7.5YR5/3)	粘土	わずかに焼土を含む	カマド崩壊土	〃
	6	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	焼土のブロック	〃	〃
	7	暗褐色(7.5YR3/3)	粘土	灰の層で、わずかに木炭を含む	カマド内堆積土	〃
	8	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト質粘土	灰を含む	煙道上層堆積土	〃
	9	黒褐色(10YR3/2)	シルト		〃	〃
	10	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質粘土	灰を含む	〃	〃
	11	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロックを含む	住居周辺堆土	

層No	土色	土性	備考			土色	土性	備考	
1	暗褐色(7.5YR3/3)	粘土	焼土・木炭を多く含む	P3	①	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	灰化物・焼土をわずかに含む	P5
2	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト質粘土	炭を多量に含む		②	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山・焼土ブロックを多く含む	
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	焼土・木炭を含む	P4	①	暗褐色(10YR3/3)	シルト	灰化物をわずかに含む	P7
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト質粘土	木炭を多量に含む		②	灰黄褐色(2.5YR5/2)	粘土	灰化物をわずかに含む	
					③	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロックを含む	
					④	暗褐色(10YR3/3)	シルト	灰化物をわずかに含む	





1. 土師器 坏（堆積土）
2. 土師器 甕（カマド支脚）
3. 石 鏃（堆積土）

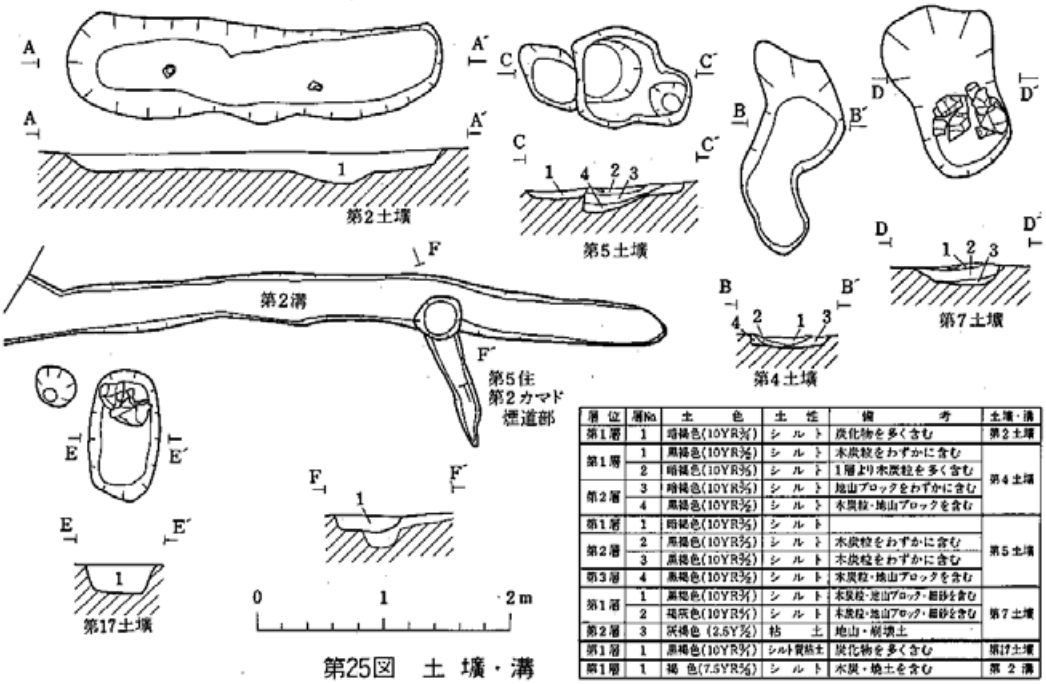
第24図　第5住居跡と出土遺物

（2）土壙・溝とその出土遺物

土壙・溝はすべて地山面で確認されており、平面形・規模・深さ、などは第1表にまとめたとおりである。

第１表　土壙・溝の一覧表

遺構名	地区	重複	平面形	規模(m)	深さ(m)	壁の立上り	底面の形態	堆積土	出土遺物
1土壙	BA－101・102		歪んだ楕円形	2 × 0.9	35	緩やか	平坦	1層	なし
2土壙	BD・BE－100・101		隅丸の長方形	3 × 0.8	10～20	緩やか	波状	1層	土師器・須恵器
3土壙	BD－101		不整の長方形	0.8 ×0.65	4	緩やか	平坦	1層	なし
4土壙	BA・BB－162	6住との新旧関係不明	歪んだ楕円形	1.6 × 0.6	10	急角度	平坦	2層	縄文土器・弥生土器・石器
5土壙	BB－162	6住との新旧関係不明	歪んだ楕円形	1.4 × 0.8	24	緩やか	平坦	3層	縄文土器・石器
6土壙	BA・BB－162・163	6住を切っている	楕円形	1.7 × 0.7	30	急角度	丸底状	3層	なし
7土壙	BA－166		不整の楕円形	1.2 × 0.8	35	緩やか	丸底状	2層	縄文土器・石器
9土壙	BB－170		不整の楕円形	2 × 0.8	25	急角度	平坦	3層	なし
10土壙	AT・BA－171・172	11土壙との新旧関係不明	楕円形	2.2 × 0.9	20	急角度	平坦	3層	縄文土器・土師器・須恵器・石器
11土壙	AT－171	10土壙との新旧関係不明	円形	径 1.2	40	急角度	丸底状	3層	縄文土器・土師器・須恵器
12土壙	BA・BB－172		隅丸の三角形	2.8 × 1.6	40	緩やか	平坦	3層	縄文土器・須恵器
13土壙	BB－174・175		楕円形	2.6 × 0.8	50	緩やか	尖底状	2層	縄文土器
14土壙	BA－172・173		くの字に歪んだ形	2.2 × 2	26	急角度	平坦	4層	なし
15土壙	BA－174	16土壙を切っている	不整の円形	径 0.9	40	垂直	平坦	3層	なし
16土壙	BB－174	15土壙に切られている	不整の楕円形	2.2 × 1.6	40	緩やか	丸底状	3層	なし
17土壙	BD－240		楕円形	1 × 0.5	20	急角度	平坦	1層	縄文土器
18土壙	BK－101	1住との新旧関係不明	(P3) 楕円形 (P4) 楕円形 (P5) 楕円形	0.6 × 0.5 0.6× 0.4 0.8× 0.6	18 16 10	緩やか 緩やか 緩やか	丸底状 丸底状 平坦	2層 1層 1層	土師器
1 溝	BC－99			2.2 × 0.6	6～25	緩やか	丸底状	1層	土師器・須恵器
2 溝	BA・BB－100・101	5住煙出を切っている		5.4 × 0.4	10～13	急角度	平坦	1層	なし
3 溝	BB－239・240	7・8住を切っている		5 × 1	30	緩やか	不明	2層	縄文土器
4 溝	BA－167			2.8×0.4～1.2	10～27	緩やか		2層	縄文土器



層位	層No.	土色	土性	備考	土壙・溝
第1層	1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	炭化物を多く含む	第2土壙
第1層	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭粒をわずかに含む	第4土壙
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	1層より木炭粒を多く含む	
第2層	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロックをわずかに含む	
	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭粒・地山ブロックを含む	
第1層	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト		第5土壙
第2層	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭粒をわずかに含む	
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭粒をわずかに含む	
第3層	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭粒・地山ブロックを含む	
第1層	1	黒褐色(10YR3/4)	シルト	木炭粒・地山ブロック・細砂を含む	第7土壙
	2	褐灰色(10YR5/1)	シルト	木炭粒・地山ブロック・細砂を含む	
第2層	3	灰褐色 (2.5Y3/2)	粘土	地山・崩壊土	
第1層	1	黒褐色(10YR3/4)	シルト質粘土	炭化物を多く含む	第17土壙
第1層	1	褐色(7.5YR5/6)	シルト	木炭・焼土を含む	第2溝

第25図　土壙・溝

出土遺物

〔第２土壙〕土師器坏（第27図10）、土師器甕（第27図14）、須恵器坏（第27図11・13）が出土しており、すべて製作に際しロクロを使用している。底部切り離しは、10・11が回転ヘラ切り技法、14が回転糸切り技法で行なわれており、13は回転ヘラケズリによる調整のため不明である。なお、11・13の底面の部分にはナデ状の痕跡が認められるが、再調整とは考え難い。

〔第４土壙〕第27図６は体部資料である。半截竹管による平行沈線文が施されている。

〔第５土壙〕第27図２は口縁部資料である。口縁部は平口縁で内彎気味と考えられる。沈線により縄文のある部分と無文の部分とに区画されている。

〔第７土壙〕口縁部資料（第27図４・５）が出土している。５は口縁部傾きが外反気味で、小突起を有している。口縁部の直下を巡る１条の沈線により、無文帯と無節縄文（Ｌ）のある部分に区画されている。また、小突起から垂直に隆起線文が施され、口縁部では隆起線上に２個の刻目が施されている。４の口縁部傾きは外反気味である。口縁部に巡る1条の沈線により無文帯と縄文（ＬＲ）のある部分とに区画されている。

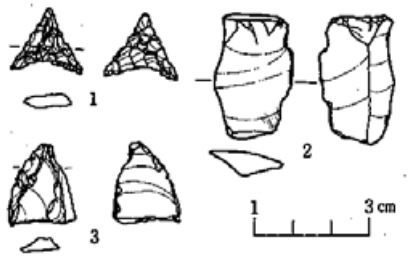
〔第17土壙〕第27図１は体部上半から底部にかけて残存しており、体部は内彎している。体部上半には沈線により文様が描かれ、縄文（ＲＬ）のある部分と無文の部分とに区画されている。また体部中央に１条の沈線が波状気味に巡っており、体部下半には縄文（ＲＬ）が施されている。

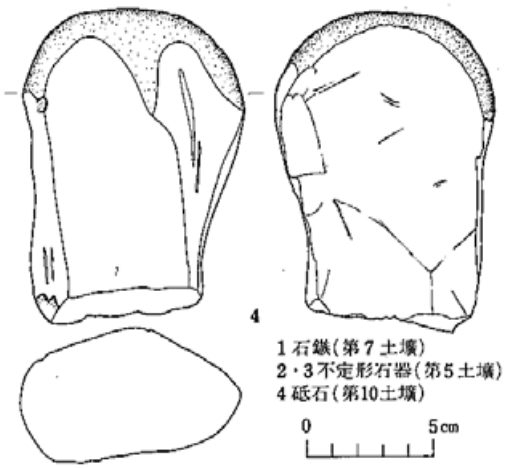
〔第18土壙〕土師器坏（第27図７・８・９）が出土している。９は口縁部破片、７・８は底部破片であり、３点とも製作に際してロクロを使用している。９は体部から口縁部まで直線的に外傾する器形である。７は体部下半から底部全面にかけて回転ヘラケズリが施され、底部の切り離しは不明である。８は底部が回転糸切技法で切り離された後に、体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリが施されている。３点とも内面にヘラミガキ・黒色処理が加えられている。

〔第１溝〕須恵器坏（第27図12）や須恵器壺の高台部（第27図15）が出土しており、ともに製作に際してロクロを使用している。12の底部切り離しは回転ヘラ切りである。15は自然釉が認められる。

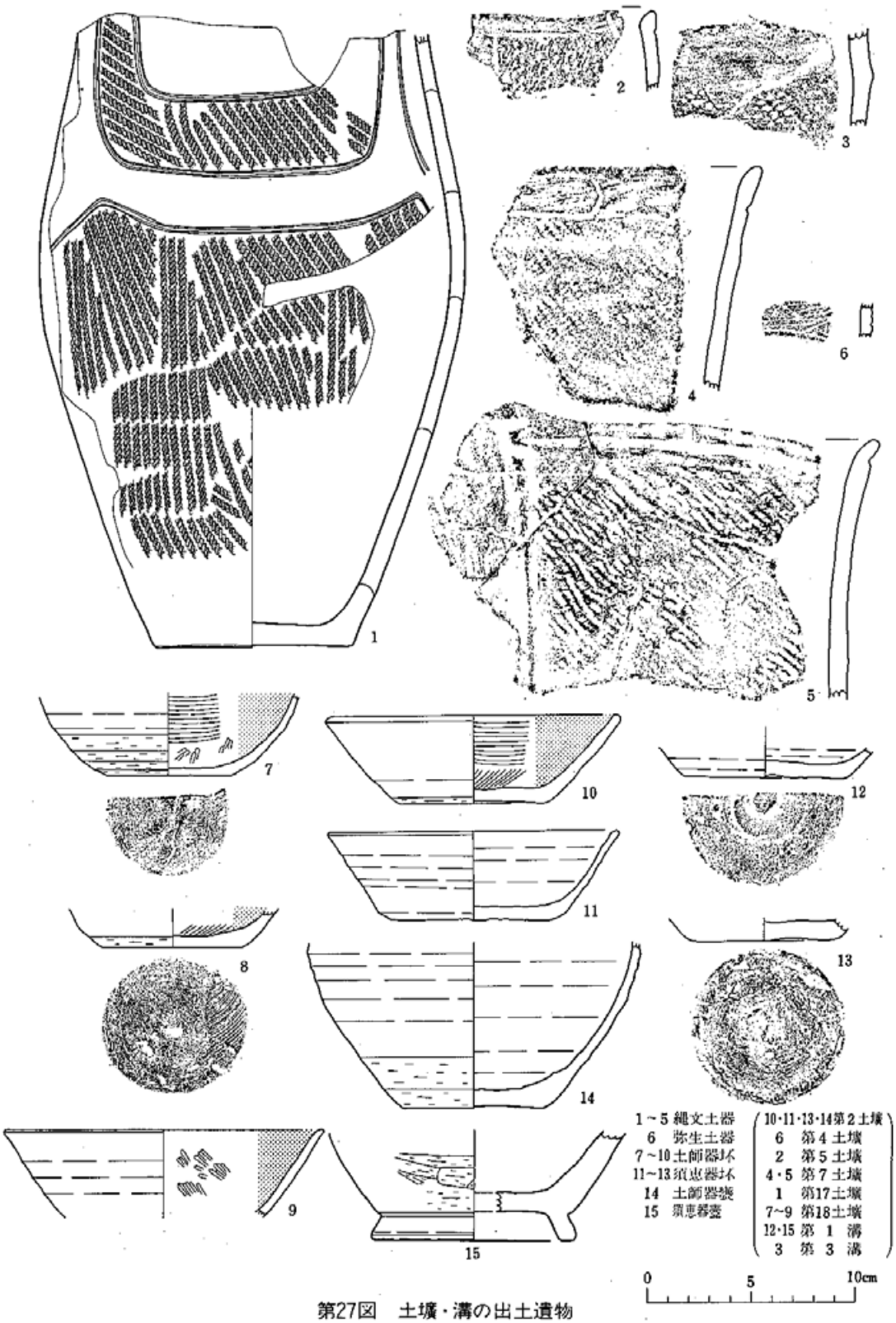
〔第３溝〕第27図３は体部資料である。隆起線文により縄文（ＬＲ）のある部分と無文の部分とに区画されている。

石器は第４・５・７・10土壙から出土している。





第26図　土壙の出土遺物



第27図　土壙・溝の出土遺物

４．遺構以外の出土遺物

遺構以外には、調査区の基本層位第Ⅰ層、第Ⅴ層から遺物が出土している。また、工事中に出土した遺物をあわせて述べることにする。

(1) 基本層位第Ⅰ層からの出土遺物

出土遺物には縄文土器・土師器・須恵器・石器があり、調査区内のほぼ全域から出土しているが、縄文土器はＢＡ・ＢＢ－163～166区、土師器・須恵器はＢＡ～ＣＪ－100・101区に集中して出土する傾向がみられる。

縄文土器

第28図１は口縁部傾きが外反し、体部がふくらむ深鉢形土器である。口縁部には８個の山形突起が配され、口縁上端部には沈線が施されている。頸部に巡る１条の沈線文により口縁部の無文帯と体部に区画され、体部には地文として縄文（ＲＬ）が施されている。

第28図２は台付土器の台部破片である。台部には３条の平行沈線が巡っている。

その他の遺物としては、石鏃・石匙・石箆・磨製石斧・凹石など（第29・30・31図）が出土している。

(2) 基本層位第Ⅴ層からの出土遺物

出土遺物には縄文土器・石器があり、ＢＡ・ＢＢ－163～166区、ＢＡ・ＢＢ－232～239区から出土している。土器はすべて破片資料であり、器形や文様構成などについては不明である。

口縁部資料は、外反する資料が大部分である。文様表現技法などを基準に類別すると、頸部の文様帯（隆起線文と刺突文による）により縄文のある部分と無文の部分とに区画されているもの（第29図１）、隆起線文により縄文のある部分と無文の部分とに区画されているもの（第29図２～４）、隆沈文により縄文（ＲＬ）のある部分と無文の部分とに区画されているもの（第29図５）、沈線文により刺突文のある部分と無文とに区画されているもの（第29図６）、縄文（ＬＲ）だけのもの（第29図７）、区画する線はなく、縄文（ＲＬ）のある部分と無文の部分をもつもの（第29図８・９）などに分けられる。

体部資料（第29図10・11）は沈線文により縄文（ＬＲ）のある部分と無文の部分とに区画されている。

その他の遺物としては、石鏃・石匙・石錐・磨製石斧・凹石など（第29・31図）が出土している。

(3) 工事中に出土した遺物

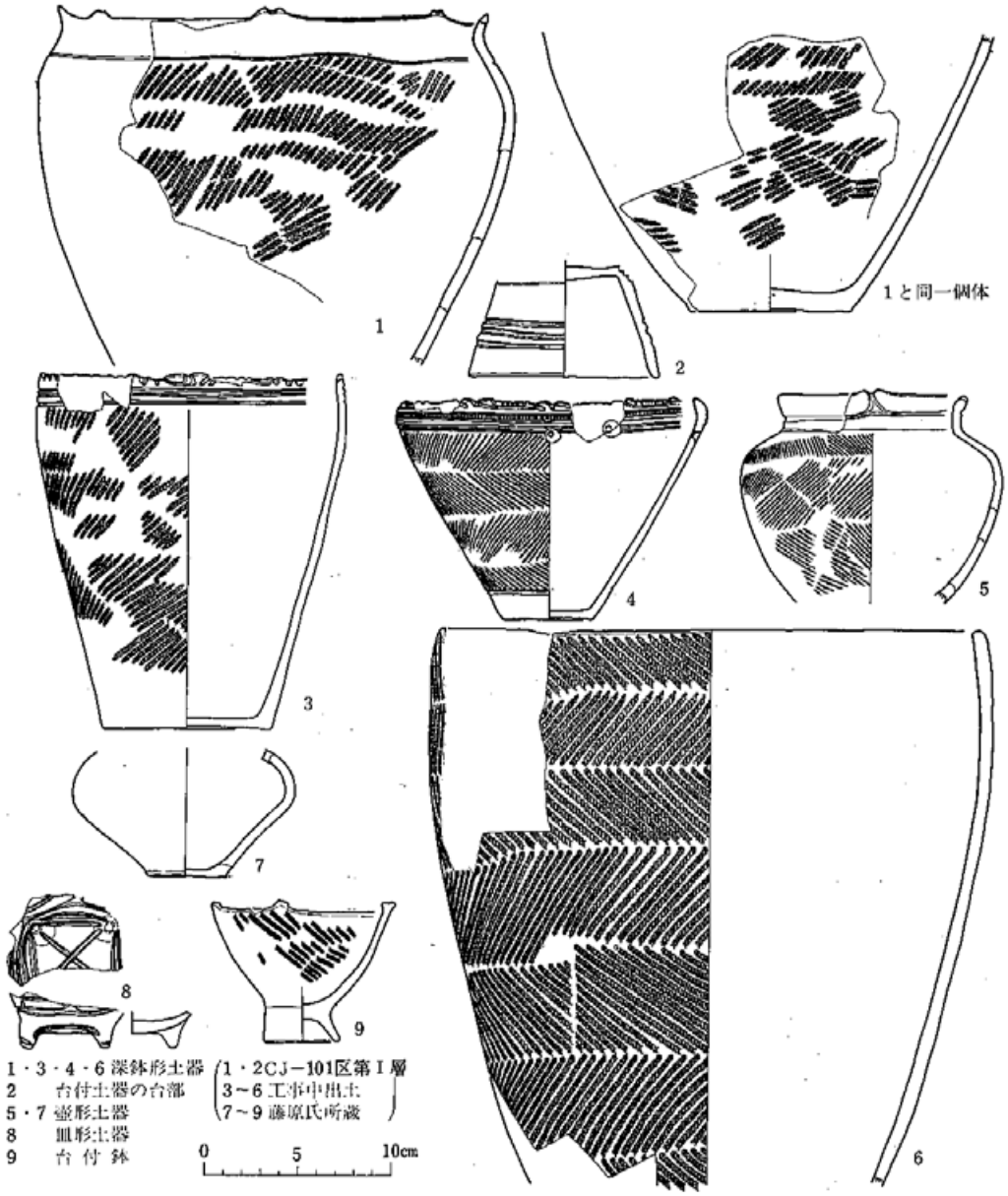
遺物が発見された地点は、昭和53年度の範囲確認調査でピットの検出されたＥＮ226（小川：1979）の地点付近である（第４図）。

深鉢形土器　第28図４は口縁部が内反しており、口縁上端部には12個の小突起を配し、その間に彫刻的な刻みを入れている。口縁部には３条の平行沈線による沈線帯を有し、その上部に1条刻目帯を巡らせている。体部には羽状縄文が施され、体部下半は１条の沈線文が巡り、その下部は無文帯である。

第28図３は口縁部がやや直立しており、口縁上端部に小突起を配し、その間に彫刻的な刻みを入れている。口縁部には４と同様の沈線帯を有し、その下部には縄文（ＬＲ）が施されている。

第28図６は底部欠損の粗製土器である。口縁形態は内反気味の平縁であり、口縁部直下から体部にかけて羽状縄文が施されている。

壺形土器　第28図５は口縁部がやや外反し、肩部がふくらんだ器形である。口縁上端部には小突起が２個配されていると考えられる。口縁部に三叉状文が描かれており、体部には羽状縄文が施されている。底部は欠損している。



第28図　基本層位第Ⅰ層、工事中出土、藤原氏所蔵の遺物

５．藤原二郎氏の所蔵遺物（註）

遺物の発見された地点は、前述した「工事中に出土した遺物」と同地点及び陸羽東線南側の水田までの広い範囲である（第４図）。

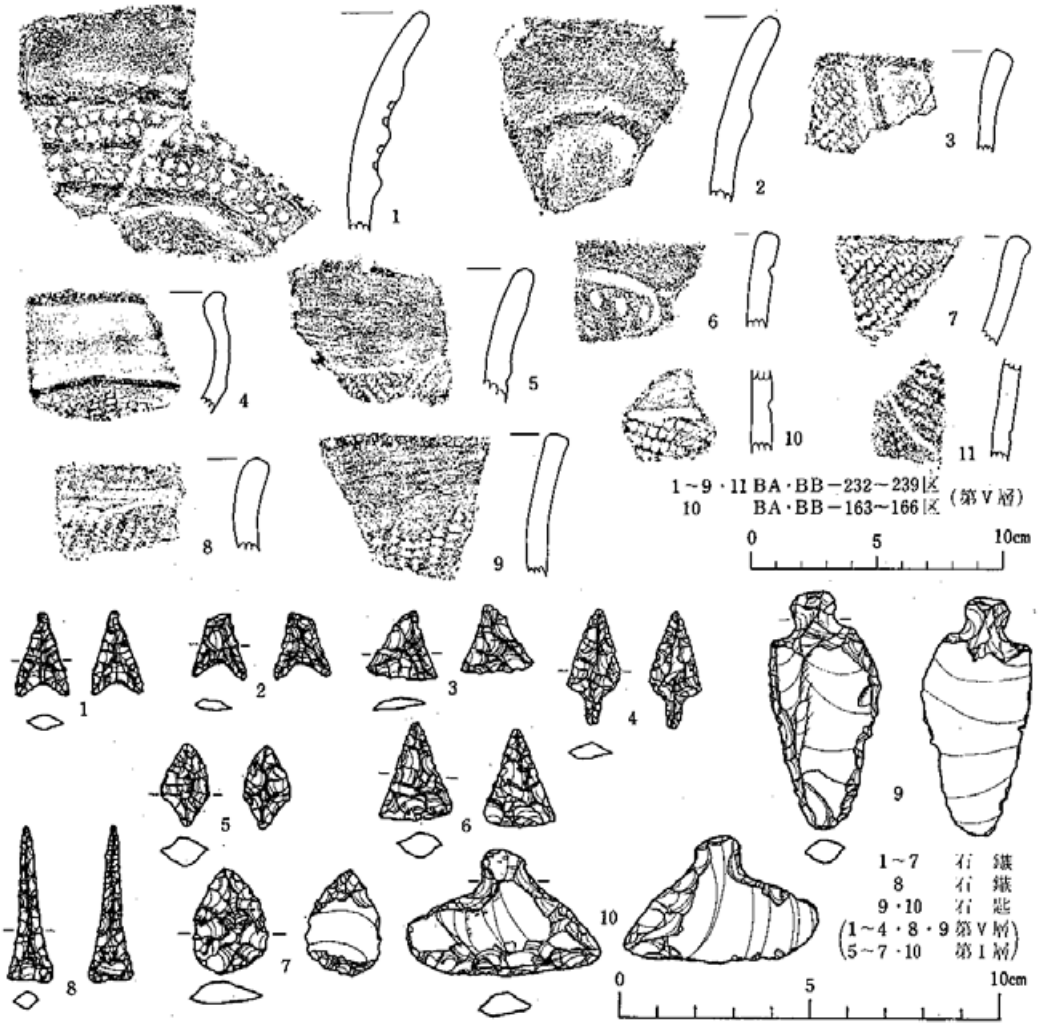
壺形土器　第28図７は、体部から底部にかけて残存しており、器形から急須とも考えられる。体部全面が無文である。

皿形土器　第28図８は４個の脚をもつと考えられる小形土器で、体部から底部にかけて残存している。体部および底部には沈線により文様が描かれている。

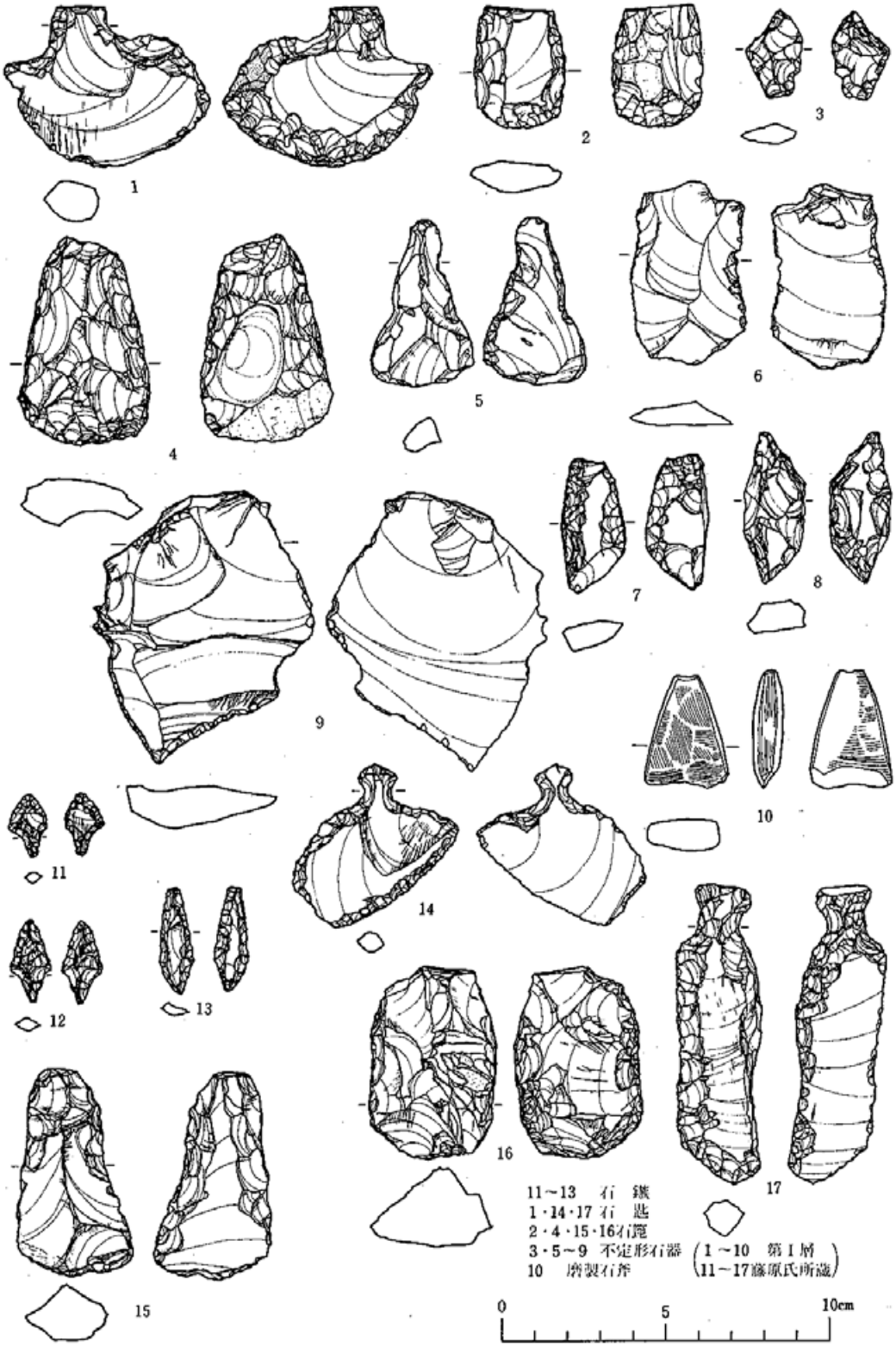
台付鉢　第28図９は口縁部に４個の小突起を有し、突起上端には刻みが入れられている。体部には縄文（ＲＬ）が施され、台部は無文である。

その他の遺物としては、石鏃・石匙・石箆・打製石斧・円形石製品など（第30・31図）がある。

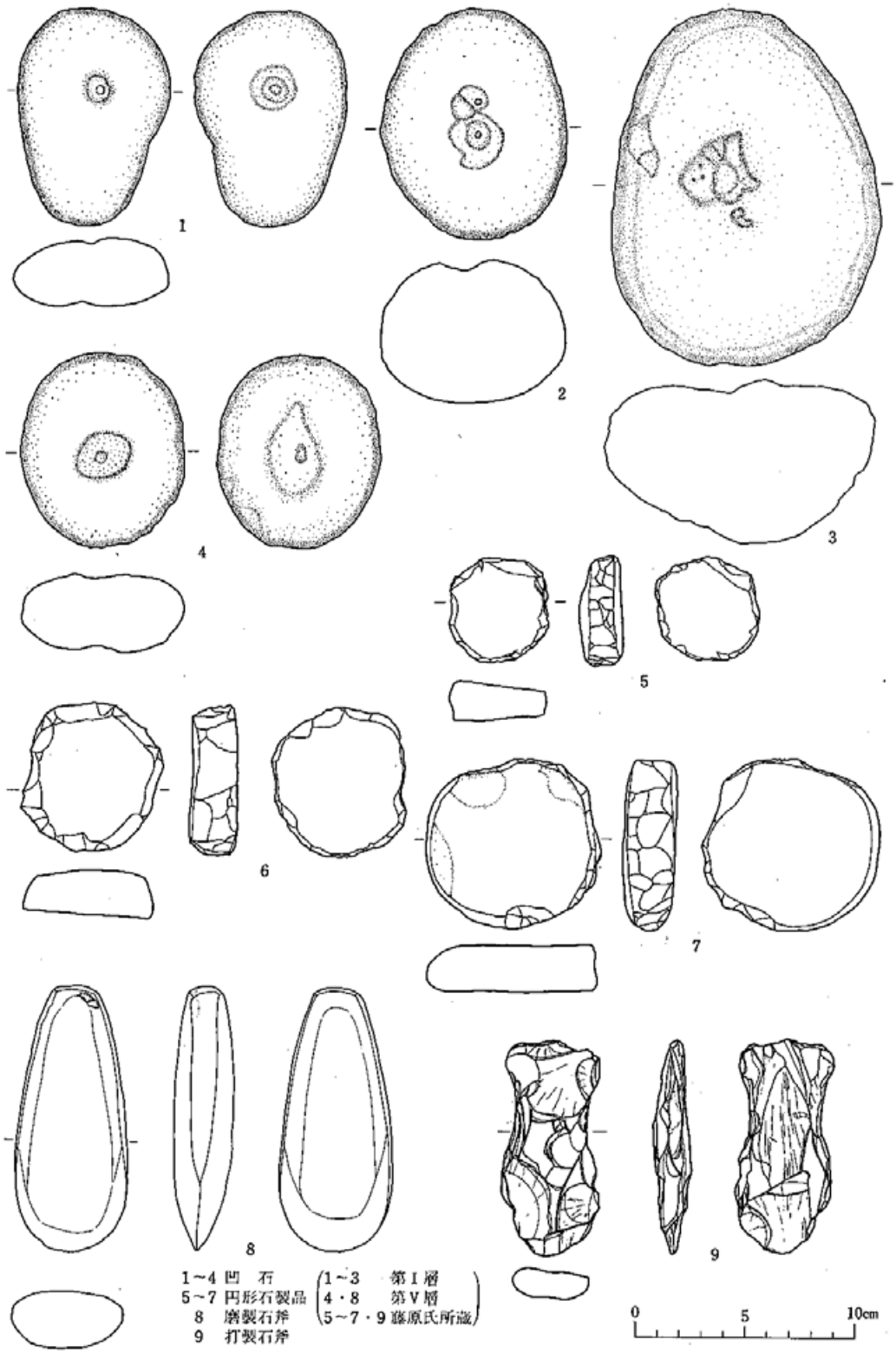
（註）これらの遺物は藤原二郎氏の承託を得て掲載したものである。



第29図　基本層位第Ⅰ・Ⅴ層の出土遺物



第30図　基本層位第Ⅰ層・藤原氏所蔵の遺物



第31図　基本層位第Ⅰ・Ⅴ層、藤原氏所蔵の遺物

Ⅴ．遺物・遺構に関する考察と問題点

１．遺　物

（１）縄文土器

Ⅳ章では器形や文様構成などのうかがえる土器や特徴的な文様をもつ破片資料を個々に取り上げ述べて来た。ここでは図示遺物の中でも完形もしくは口縁部から体部中央まで残存する土器に限定し、時期的に３群に分けて述べてみたい。

〔第１群土器〕中期末（大木10式）に属すると考えられる土器群である。第７・８・９住では、器形や文様構成などのうかがえる土器が床面や炉から出土しているが、第６住では、この時期の特徴をもつ破片資料が床面から出土している。器形には深鉢形土器と浅鉢形土器があり、これらの土器は磨消縄文手法によって文様が描かれている。また、磨消縄文には、縄文（地文）を施した後に線によって区画するものと、線によって区画した後に縄文（地文）を施するもの「充填縄文」の二種類が認められる。

（深鉢形土器）口縁部は平口縁か波状口縁で、外反しており、体部がふくらむ器形である。分類から除外されているが、平口縁で直立気味の円筒状の器形（口縁部から体部上半が残存）と考えられる土器もある。器形や文様などを基準に分類すると、A類：頸部に巡る文様によって、口縁部文様帯と体部文様帯とに区画されるもの、B類：口縁部文様帯と体部文様帯とに区画されないもの、の２類に大別される。また、A類は頸部に巡る文様の種類により２類に、B類は体部中央に巡る沈線の有無により２類に、それぞれ細別される。

ＡⅠ類：口縁部が波状口縁で外反し、体部がふくらむ器形である。頸部に隆起線と刺突の組み合わせによる文様帯を有し、口縁部無文帯と体部文様帯とに区画されている。体部文様帯は隆起線によって楕円文や渦巻文が4個描かれ、横方向に展開している。地文としては、縄文（ＲＬ、ＬＲ）や撚糸文（Ｒ）が施されている（第９図１～４）。

ＡⅡ類：口縁部が平口縁で外反し、体部がふくらむ器形である。頸部に隆起線が巡り、口縁部無文帯と体部文様帯とに区画されている。体部文様帯は隆起線によって文様が描かれ、横方向に展開すると考えられる。地文としては、縄文（ＲＬ、ＬＲ）が施されている（第10図１・２）。

ＢⅠ類：口縁部が波状口縁で外反し、体部がふくらむ器形である。口縁部から体部にかけて、隆沈文によって逆Ｓ字状文が４個描かれ、横方向に展開している。地文としては、縄文（ＲＬ）が施されている（第11図１）。

ＢⅡ類：口縁部が平口縁で外反し、体部がふくらむ器形である。体部中央に沈線が巡り、体部上半と体部下半とに区画している。体部上半は沈線によって斜方向に伸びた逆Ｓ字状文が

４個描かれ、横方向に展開している。逆Ｓ字状文内及び体部下半には、地文として複節縄文（ＲＬＲ）が施されている（第14図１）。

（浅鉢形土器）器形や文様構成のわかるものは１点だけであり、口縁部から体部にかけて残存している。口縁部が平口縁で内彎する器形であり、口縁上端部断面は平坦である。口縁部から体部にかけて、隆起線による渦巻文が５個描かれ、横方向に展開すると考えられる。地文としては、縄文（ＲＬ）が施されている（第11図２）。

この土器群は、川崎町中沢遺跡（後藤他：1975）、湯坪遺跡（一条：1978）、河北町南境貝塚（宮城県教委：1969）、涌谷町長根貝塚（宮城県教委：1969）、福島県上原Ａ遺跡（福島県教委：1975）などに類例がある。

〔第２群土器〕後期初頭に属すると考えられる土器で、第９住堆積土から１点出土している。口縁部はゆるやかな波状口縁で直立気味と考えられ、体部がややふくらむ深鉢形土器である。口縁部直下には１条の沈線が巡っている。体部にはＳ字状連鎖沈線文と、この文様の上端を頂点とする沈線区画による逆Ｖ字状文の組み合わせが４個描かれている。地文としては、撚糸文（Ｒ）が施されているが、部分的に磨消縄文の消し残しがみられる（第16図４）。

Ｓ字状連鎖沈線文をもつ土器は南方町青島貝塚（後藤・加藤他：1975）、松島町西ノ浜貝塚（宮城県教委：1967）、岩手県貝鳥貝塚（草間・金子：1971）などに類例がみられる。

〔第３群土器〕晩期に属すると考えられる土器群であり基本層位第Ｉ層出土土器、工事中に出土した土器、藤原二郎氏の所蔵土器がこれにあたる。器形としては、深鉢形土器・壺形土器・台付鉢・皿形土器などがある。

（深鉢形土器）口縁上端部に山形突起が配され、その間に刻みが入れられている。また、口縁部には３条の沈線による沈線帯をもち、その上部に刻目帯が入れられている。この土器は一迫町巻堀遺跡（一迫町教委：1977）に類例がみられ、晩期中葉（大洞C_1～C_2）に属すると考えられる（第28図３・４）。

（壺形土器）口縁部上端部に山形突起が配され、口縁部に三叉状文が描かれている。この三叉状文は晩期前葉（大洞Ｂ）の土器の主要なモチーフであることから、この土器は晩期前葉（大洞Ｂ）に属する可能性がある（第28図５）。

（台付土器・皿形土器）平行沈線が施されているもので、所属時期は確定できないが、晩期後葉（大洞Ａ～Ａ´）と考えられる（第29図２・８）。

（２）弥生土器

第４土壙の堆積土から出土した体部破片である。半截竹管による平行沈線文が施されており、

弥生時代の「十三塚式」と考えられる。名取市十三塚遺跡（名取市教委：1979）などに類例がみられる。

（３）土師器　土師器には坏と甕がある。

(坏) 器形は、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するものが多く、やや丸味をもつものもある。坏はすべて製作に際しロクロを使用しており、内面にはヘラミガキ・黒色処理が加えられている。底部の切り離し技法や再調整の種類によって第２表のように分類される。

Ａ・Ｂ・Ｃ類はすべて製作に際してロクロを使用しており、土師器の編年において「表杉ノ入式期」（平安時代）に属すると考えられる。図示遺物のうち、第１住ではＢⅡ類、第４住ではＢⅠ類、第２土壙ではＡ類、第18土壙ではＢⅡ類とＣ類が遺構に伴って出土している。なお、第２・３・５住では、第８表に示すとおり量は少ないが、ロクロ使用の破片資料がカマドやピットから出土している。

(甕) 製作に際し、ロクロ使用のものと不使用のものとがあり、完形は１点出土している。完形品は、ロクロ不使用で、口径と器高が同じ長さであるが、歪みが著しい。この他に全体形のわかるものはないため分類はおこなえない。

これらの甕は少量のため十分な検討はできないが、ロクロ使用の土師器坏と共伴していることから、甕は表杉の入式期（平安時代）に属すると考えられる。

（４）須恵器　須恵器には坏・甕・双耳坏などがある。しかし、坏を除いたものは量も少なく、破片である。ここでは、坏だけをとって分類してみたい。

(坏) 器形はすべて、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するものである。底部切り離し技法、再調整などによって第３表のように分類されている。

Ａ・Ｂ・Ｃ類はすべて土師器坏と共伴しており、「表杉ノ入式期」（平安時代）に属すると考えられる。図示遺物のうち、第２住ではＢ類、第４住ではＡ類、第２土壙ではＡ類とＣ類が遺構に伴って出土している。なお、第１・３住では、第８表に示すとおり量は少ないが、破片資料が床面・カマド・ピットから出土している。

第２表　土師器坏の分類

底部切り離し	切り離し後の再調整		再調整のある部位	内面調整
Ａ．回転ヘラ切り	有	回転ヘラケズリ	体部下端～底部	ヘラミガキ・黒色処理
Ｂ．回転糸切り	有	Ⅰ手持ちヘラケズリ	体部下半	
		Ⅱ回転ヘラケズリ	(a)体部下端～底部周縁	
			(b)体部下端～底部全面	
Ｃ．切り離し不明	有	回転ヘラケズリ	(a)体部下半～底部全面 (b)体部下端～底部全面	

第３表　須恵器坏の分類

底部切り離し	切り離し後の再調整
Ａ．回転ヘラ切り	無
Ｂ．回転糸切り	無
Ｃ．　不　明	有　回転ヘラケズリ

２．遺　構

（１）縄文時代の竪穴住居跡

第６～９住に伴う土器は第Ⅰ群土器に属している。よって、住居跡はすべて縄文時代中期末（大木10式期）に属すると考えられる。これらの住居跡の構造については第４表に示すとおりである。

ここでは、柱穴と炉を取り上げて考察を加えてみたい。

柱穴が確認されたのは第７・９住である。第７住では炉の両脇に２個検出されたが、炉の長軸方向にはピットは確認できなかった。第９住は湧水のため不明な点も多いが、６個のピットの配置に規則性がみられ、大きさ・深さ・土色・土性等にも共通性があることから、６本柱を基本とした住居の可能性がある。なお、参考までに大木10式期の住居跡についてみると、３本柱は中沢遺跡や福島県上原Ａ遺跡、４本柱は秋田県館下Ⅰ遺跡（市川：1979）、５本柱は長根貝塚や福島県上原Ａ遺跡などで確認されている。

炉の構造については次の４タイプがある。Ⅰ：（土器埋設石囲炉）…第６住炉、Ⅱ：土器埋設石囲部＋敷石石組部＋掘り込み部）…第７住炉、Ⅲ：（石組部＋掘り込み部）…第９住１号炉、Ⅳ：（石組部Ⅰ〔土器埋設石囲部〕＋石組部Ⅱ）…第９住２号炉。なお、第８住炉は土器埋設石囲部と石組部の一部とが残存していることから、ⅡまたはⅣに属するものと思われる。

Ⅰは土器埋設石囲炉であり、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳは複式炉である。これらの類例は上深沢遺跡（宮城県教委：1978）、湯坪遺跡、中沢遺跡などで確認されている。

埋設土器の残存状態については、体部から底部が残存している土器（第６住・８住・９住２号炉）と口縁部から体部が残存している土器（第７住）とに分けられるが、中沢遺跡や湯坪遺跡では後者の土器が多い傾向がみられる。玉造遺跡では、炉が少数であるため、断定し難いが、埋設土器の機能上意味のあるものかも知れない。

（２）平安時代の竪穴住居跡

第１～５住に伴う土師器坏や須恵器坏は、すべて製作に際してロクロを使用している。よって、住居跡はすべて表杉ノ入式期（平安時代）に属すると考えられる。

これらの住居跡の構造については第5表に示す通りである。

（３）土壙・溝

第７土壙、第17土壙は底面から縄文時代中期末（大木10式期）の深鉢形土器が出土している。このことから、中期末に属する可能性がある。また、第２土壙、第18土壙はロクロを使用した土師器坏が底面から出土しており、平安時代（表杉ノ入式期）に属する可能性がある。その他の遺構については、堆積土から遺物の出土している遺構（第４・５・10～13土壙、第１・３・４溝）と出土遺物のない遺構（第１・３・６・９・14～16土壙・第２溝）があり、いずれも所属時期は不明である。

第４表　縄文時代の住居跡一覧表

住居跡	確認面	重　複	平面形	規　模	壁（残存高）	床面	周溝	柱　穴	炉			
									付設場所		長軸方向	構　造
第6住	地山面	第6土壙に切られている	不明	不　明	不　明	掘り方埋土	不明	不　明	不　明		不　明	土器埋設石囲炉
第7住	地山面	第8住と重複第3溝に切られている	不整の円形	径約4ｍ	地山（約20cm）	掘り方埋土	無	3　個（内2個は柱穴）	中央南寄り		N－6°－E	土器埋設石囲部＋敷石石組部＋掘込み部
第8住	不明	第7住と重複	不明	不　明	不　明	不明	不明	不　明	不　明		N－70°－E	土器埋設石囲部＋石組部
第9住	地山面	無	円形	径約4.5ｍ	地山（約20～30cm）	掘り方埋土	無	6　個	1号炉	中央南寄り	N－13°－W	石組部＋掘り込み部
									2号炉	中央南寄り	N－2°－W	石組部Ⅰ（土器埋設石囲部？）＋石組部Ⅱ

第５表　平安時代の住居跡一覧表

住居跡	確認面	重　複	平面形	規　模	壁（残存高）	床　面	周溝	柱穴	カマド						貯蔵穴・状ピット
									付設場所		長軸方向	焚焼部構築方法	煙道の傾斜	煙出しピット	
第1住	地山面	無	方形？	北辺約4.6ｍ	地山（約4cm）	地山と掘り方埋土	無	不明	不　明						北西隅（P1）北東隅（P2）
第2住	地山面	無	不整の長方形	東辺約4.4ｍ北辺約3.4ｍ	地山（15～20cm）	掘り方埋土	無	不明	東辺中央南寄り		N-72°E	粘土で構築	→	32×24cmの楕円形	中央南寄り
第3住	地山面	無	方形	1辺約3.4ｍ	地山（15～20cm）	掘り方埋土	無	不明	北辺中央		N-1°E	粘土で構築	→	径約40cmの円形	北東隅
第4住	地山面	無	方形	1辺約4.6ｍ	地山（5～11cm）	掘り方埋土	無	4本柱を基本	東辺中央南寄り		S-76°E	地山掘り出し＋粘土構築	～	40×30cmの楕円形	南東隅
第5住	地山面	第2溝に切られている	長方形	東辺約4.5ｍ北辺約4.1ｍ	地山（8～12cm）	掘り方埋土	無	不明	第1カマド	東辺中央	S-81°E	粘土で構築	→	35×30cmの楕円形	
									第2カマド	東辺中央南寄り	S-79°E	不　明	→	径約30cmの円形	

Ⅵ. ま　と　め

１．玉造遺跡は、江合川（荒雄川）によって形成された段丘上（上川原面）に立地している。

２．調査により、縄文時代に属する竪穴住居跡４軒と土壙２基、平安時代に属する竪穴住居跡5軒と土壙２基、時期不明の土壙13基、溝４条が発見された。

人々は縄文時代から平安時代にかけて断続的ではあるが、微高地上に集落を営み、生活の場となっていたことが明らかになった。

３．発見された遺物には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器などがある。

縄文土器はほとんどが縄文時代中期末に属するもので、他には後期初頭に属するものや晩期前葉～後葉に属するものがある。

弥生土器は破片資料であるが、弥生時代（十三塚式期）に属するものである。

土師器・須恵器については、平安時代（表杉ノ入式期）に属するものである。

石器には、石鏃・石匙・石錐などの剥片石器や磨製石斧・凹石・砥石などがある。

４．遺跡の範囲は微高地の広がる地域であり、今回調査した陸羽東線北側の水田のみならず、南側まで含めて、その面積は約160,000㎡と考えられる。

引用・参考文献

市川金丸（1979）：「東北北部の縄文時代中期の竪穴住居跡」『考古学ジャーナル』№170
一条孝夫（1978）：「湯坪遺跡発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第54集
一迫町教委（1977）：『巻堀遺跡』
氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』
小川淳一（1979）：「玉造遺跡・遺跡詳細分布調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第58集
小元久二夫（1966）：「宮城県鳴子盆地の地形発達史」『地理学評論』第39巻第８号
興野・遠藤（1970）：「宮城県玉造郡岩出山町の考古学考古学遺跡」『岩出山町史』下巻
草間・金子（1971）：『貝鳥貝塚』
後藤勝彦他（1972）：「宮城県柴田郡川崎町中沢遺跡発掘調査報告」『川崎町史（資料編）』
後藤・加藤他（1975）：「青島貝塚」『南方町史（資料編）』
小山・竹原（1975）：『新版標準土色帳』
紫桃正隆（1973）：『仙台領内古城・館』第三巻
石器文化談話会（1978）：「座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅰ」『石器文化談話会誌第１集』
芹沢長介（1960）：『石器時代の日本』
名取市教委（1979）：「十三塚遺跡」『名取市文化財調査報告書』第６集
丹羽　茂（1971）：「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『福島大学考古学研究会研究紀要』第１冊
芳賀良光（1968）：「宮城県宮戸島貝塚梨木囲遺跡の研究」『仙台・湾周辺の考古学的形究』
林　謙作（1965）：「東北」『日本の考古学』Ⅱ
福島県教委（1975）：「上原Ａ遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』
南方町教委（1978）：「長者原貝塚」『南方町文化財調査報告書』第１集
宮城県教委（1967）：「西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第13集
宮城県教委（1969）：「長根貝塚・埋蔵文化財緊急発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第19集
宮城県教委（1969）：「南境貝塚・埋蔵文化財第四次緊急調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第20集
宮城県教委　東北地方建設局仙台工事事務所（1973）：「菅生田遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第29集
宮城県教委　日本道路公団（1978）：「上深沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第52集
宮城県教委（1979）：「遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集（修正版）
宮城県教委（1979）：「遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第47集（修正版）
山形県教委（1979）：「熊ノ前遺跡」『山形県埋蔵文化財調査報告書』第16集
山内　清男（1979）：『日本先史土器の縄紋』

（遺構に伴う土器）　**第６表　図示土器集計表**　（遺構に伴なわない土器）

					第1住	第2住	第3住	第4住	第5住	第7住	第8住	第2土壙	第18土壙	第4住	第5住	第7住	第9住	第1溝	基本層位第Ⅰ層	工事中出土	藤原氏所蔵
縄文土器	第1群土器	深鉢形土器	A	Ⅰ						2						2					
				Ⅱ						2											
			B	Ⅰ						1											
				Ⅱ							1										
		浅鉢形土器								1											
	第2群土器																1				
	第3群土器																		2	4	3
土師器	坏	A										1									
		B	Ⅰ					1													
			Ⅱ		1								1								
		C											1		1						
	甕	ロクロ使用			1	1	1	1				1		1							
		ロクロ不使用						3	1												
須恵器	坏	A						3				1						1			
		B				1															
		C										1									
	双耳坏													1							
	壺																	1			

（註）分類の不明な土器は除外している

第7表　縄文土器破片集計表

部位	文様表現技法	地文	内面	6住 床面	6住 炉	6住 掘り方埋土	7住 第1層	7住 床面	7住 炉	7住 P3	8住 堆積土7	8住 床面	8住 炉	9住 堆積土1層	9住 堆積土2層	9住 堆積土3・4層	9住 堆積土5層	9住 床面	9住 P1	基本層位第I層 5A−CJ 100・101	基本層位第I層 5A・BD 163〜166	基本層位第I層 BB −237	基本層位第V層 BA・BB 163〜166	基本層位第V層 BA・BB 232〜239	計
口縁部		R L	ミガキ				2	1			3				1									2	9
		L R	ミガキ				1	4			1					1								1	8
			ミガキ	7		1	21	9	4	1	13			7	1	3	6							9	82
			不明				4	2			2				1									2	11
	隆起線文		ミガキ				1(例)	5(例)			7			2		1							1	2	19
	〃		不明				1	3						1											5
	〃	R L	ミガキ				5	3			2			1											11
	〃	L R	ミガキ					7			1						1							1	10
	〃	RLR	ミガキ				1																		1
	〃	不明縄文	ミガキ				3	3	1					1		1									9
	〃	刺突文	ミガキ											2											2
	〃 刺突文	不明縄文	ミガキ				2																		2
	〃 〃		ミガキ				2	1																1	4
	隆沈文	R L	ミガキ				8(例)		2																10
	〃	L R	ミガキ					1(例)			1			2	2				1					1	8
	〃	不明縄文	ミガキ					2			2			1											5
	〃		ミガキ											1											1
	〃 刺突文	不明縄文	ミガキ													1									1
	沈線文	L R	ミガキ	1										1											2
	〃	RLR	ミガキ															1							1
	〃	不明縄文	ミガキ	2							1			1	2	1									7
	〃		ミガキ	1							2			1										2	6
	〃	刺突文	ミガキ	1																					1
	〃 刺突文		ミガキ																					1	1
	刺突文		ミガキ																					1	1
体部		R L	ミガキ	2	1		53	30	5	1	35	3	5										5	45	186
		R L	不明	4			60		3															4	71
		L R	ミガキ	7		3	10	52	9		26	2								2		2	3	10	126
		L R	不明	1	1				1																3
		L	ミガキ	3			12		4																19
		L	不明				1																		1
		R	ミガキ																					1	1
		LRL	ミガキ																					1	1
		撚糸文R	ミガキ	2																					2
		撚糸文L	ミガキ	3		1						1											1		6
		不明縄文	ミガキ	27	1		84	62	10		15	1	1							2	2		9	76	290
		不明縄文	不明				15	5	6		6												2	11	45
	刺突文		ミガキ				1																		1
			ミガキ	40		1	73	36(例)	5		45	3								5	1		19	49	277
			不明	66	7	39	130	93	5		16	2									20		59	101	538
	沈線文	R L	ミガキ	2		1		1			3														7
	〃	L R	ミガキ				1		2		4		3							1			2	1	14
	〃	〃	不明		4																				4
	〃	不明縄文	ミガキ	5																			1		6
	〃	不明縄文	不明		1																			1	2
	〃		ミガキ	1		1	2				1		1								1				7
	〃		不明	1							1													1	3
		櫛目状沈線文	ミガキ	1																					1
	刺突文		不明																					3	3
	隆起線文		ミガキ	3			30	19	2		9												5	9	77
	〃		不明				1		1	1														7	5
	〃	R L	ミガキ				10	8	1		2		1												22
	〃	L R	ミガキ				28	17			4													5	54
	〃	L	ミガキ				1																		1
	〃	不明縄文	ミガキ				20	12															1	13	46
	〃 刺突文		ミガキ	2			1	1																	4
	〃 〃	R L	ミガキ								1														1
	隆沈文		ミガキ			1	4(例)	4		1	6													8	24
	〃		不明				1(例)																		1
	〃	R L	ミガキ				3	3	1		5		1											3	16
	〃	L R	ミガキ				12(例)	6	4		7													2	31
	〃	L	ミガキ					1	1																2
	〃	撚糸文L	ミガキ					1																	1
	〃	不明縄文	ミガキ									1											1		2
	〃	RLR	ミガキ	1			14	6	10		8												1	11	51
	〃 刺突文	R L	ミガキ					1																	1
底部			ミガキ	3		1	7	8	1		6			6	1	4					1		1	12	51
			ナデ	1																					1
			不明	1			1				2													8	12
合計				188	15	49	626	407	78	4	238	13	12	27	8	12	7	1	1	10	35	2	111	400	2,234
				252			1,115				253			56						37			511		

第8表　土師器・須恵器破片集計表

種別	器形	部位	器面調整	1住			2住					3住		4住													5住									基本層1層			計
			外面－内面	第1・2層	床面	P2	第1層	第2層	床面	カマド	掘り方埋土	第1～4層	カマド	第1層	床面	カマド	壁溝	P3	P4	P11	P12	P13	P16	P19	P20	P22	第1層	カマド	壁溝	煙出し	P1	P3	P4	P5	掘り方埋土	BA～CJ	CL～CQ	BX～BB	
土師器	坏	口縁部	ロクロ－ミガキ(黒)	2	6	1	3							2		1											2									2			19
			ロクロ－ロクロ										1	3													3	1											8
			ロクロ－不明	1	1		1							2													1												6
			不明－ミガキ(黒)				1	2																			1									1		1	6
			不明－ミガキ													1																							1
			不明－不明				3							1																						1			5
		体部	ロクロ－ミガキ(黒)	3	3		3							2																									11
			ロクロ－ロクロ											3													1												4
			ロクロ－不明				1			1				1																						1			4
			不明－ミガキ(黒)		2	1	3	3				1															1					1				3			15
			不明－ミガキ	1		1																														1			3
			不明－ロクロ				1																																1
			不明－不明	7	2		21							16													2					1							49
		底部	ヘラ切り				1																																1
			不明－ミガキ(黒)																																	1			1
			不明－不明	2								1		2																									5
	甕	口縁部	横ナデ－横ナデ																																	1			1
			ロクロ－ロクロ	6			2	5				1	1	10		1				1							2	1						1	2				33
			ロクロ－不明	1		1	3	2						2		1											1												11
			不明－不明				2	10	1			1		3		2			1								3				1				1				25
		体部	刷毛目－刷毛目											1																									1
			刷毛目－ナデ										1	2		1																							4
			ケズリ－刷毛目				4							1																						1			6
			ケズリ－ヘラナデ											1													3									1			5
			ケズリ－ナデ	3	5		5	7	1	3		4		18	1	2	2			1	2				2	14	3	5		1	4		2		1	27			13
			ケズリ－ミガキ																																	1			1
			ケズリ－ロクロ	1				1																			3												5
			ケズリ－不明	5	5	2	20	6		1		4	2	42	2	2	2			1	3		1	1	2	1	13	4							2				123
			ミガキ－ヘラナデ					1																															1
			ミガキ－ナデ					2																															2
			ミガキ－ミガキ																																	1			1
			ロクロ－ロクロ			1		1		1				2		3															2								10
			ロクロ－ナデ		3			1	1					4		1						1																	11
			ロクロ－ミガキ(黒)	1																																			1
			ロクロ－不明	1		1								2	1	5											1	1						1					13
			不明－刷毛目	1				1						1																						1			4
			不明－ヘラナデ			1																																	1
			不明－ナデ	3	1		1	1			2			5	1	3					1	2		2			3								2				27
			不明－ロクロ	1												1							1																3
			不明－不明	11	5	1	203	67	4			22	5	139	7	7		1			7	8	5	2	5	3	40	5	1		3	5				5			561
		底部	回転糸切り													1																							1
			ヘラ切り																					1															1
			手持ちヘラケズリ		1		2							3									1		1	1													9
			木葉痕					1																			1	1											3
			不明				1	2				1		5		1										1	3	1									1		16
須恵器	坏	口縁部	ロクロ(自然釉)－ロクロ(自然釉)		1																																		1
			ロクロ－ロクロ	4	1	2	3	5	3			2	1	9		4					1			1	1		9							1		4			51
			不明－不明											1																									1
		体部	ロクロ－ロクロ	1			3	2	3					4													4								1	3			21
			ロクロ－不明																								1												1
			不明－ロクロ									1																											1
			不明－不明					1																			2												3
		底部	回転糸切り																																	2			2
			ヘラ切り				1																																1
			回転ヘラケズリ																																	1		1	2
			手持ちヘラケズリ				1																												1				2
			不明					1				1		1													1									2			6
	甕	口縁部	ロクロ－ロクロ	1										1																		1							3
		体部	平行タタキ目－ナデ	2				1																													1		4
			平行タタキ目－オサエ				1	1				1		1												1										1			5
			平行タタキ目－不明				1	2				2		1																									7
			ケズリ－ナデ				1																																1
			ケズリ－不明	1										1																									2
			ナデ－ロクロ																																		1		1
			ロクロ－ロクロ		1									2											1														4
			不明－ロクロ	1										1																									2
			不明－不明				1																																1
	高台	台部	ロクロ－ロクロ											2													1									1			4
	蓋	口辺部	ロクロ－ロクロ									1															1												2
		天井部	ロクロ－ロクロ											1																			1						2
合計				60	37	12	203	126	13	6	2	43	11	279	12	37	4	1	1	3	14	11	8	7	12	21	108	19	1	1	10	8	2	4	10	62	3	2	1,262

第9表　石器集計表

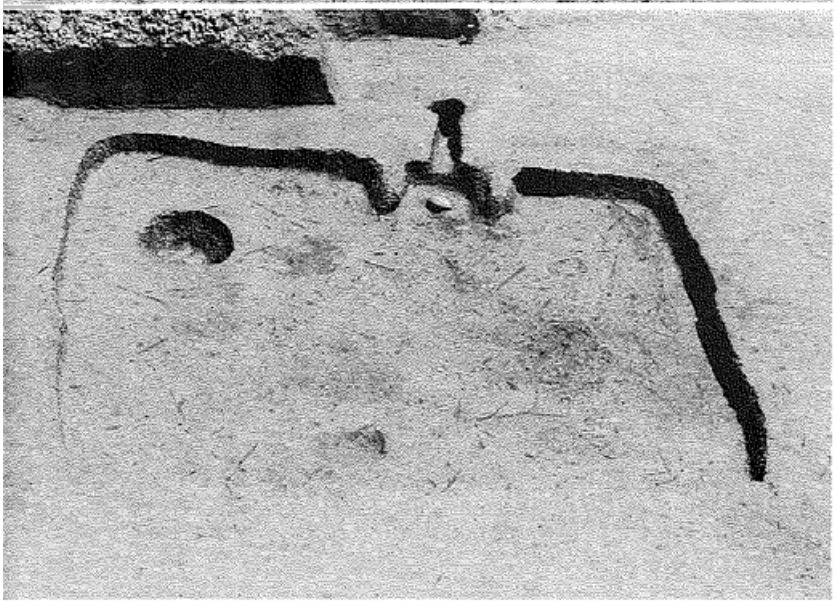
石器 ＼ 出土地点層位		1住 第1層	2住 第2層	3住 第1層	3住 床面	4住 第1層	4住 カマド内	4住 P23	4住 掘り方埋土	5住 第1層	6住 第1層	6住 床面	6住 掘り方埋土	7住 第1層	7住 床面	8住 第1層	9住 第1層	9住 第2層	9住 第3層	9住 第5層	9住 床面	9住 P4	9住 掘り方埋土	第4土壙	第5土壙	第7土壙	第8土壙	第10土壙	基本層位第I層	基本層位第V層 BA-CJ 109-205	基本層位第V層 BA·BB 161-166	基本層位第V層 BA·BB 223-229	基本層位第V層 BA 264	調査区外(表面採集)	小計
剥片石器	石鏃	1		1						1		2		1				1		1	1					1			3		4			3	20
	石匙																1	1											2		1			2	7
	石錐																														1				1
	石箆																												2					1	3
	不定形石器		1			1			1	3		5	5	11	1	5	5	2	9	1	1	1		2	2	5			26	1	1	1			90
剥片石器素材	剥片		1			10	1	1		10	3	6	8	7		2	13	1	6	5				1	4	10	1		22	2					114
	石核											1																	2						3
磨製石器	磨製石斧													1															1				1		3
	石剣												1																						1
礫石器	凹石												2	4				1			1		1						6		1				16
	磨石													2																					2
	石皿																																		0
	砥石			1	1	1																						1							4
	打製石斧																																	1	1
	円石製打器																																	3	3
小計		1	2	2	1	12	1	1	1	14	3	14	16	26	1	7	19	8	15	7	3	1	1	3	6	16	1	1	64	3	8	1	1	10	268

第10表　石器計測表

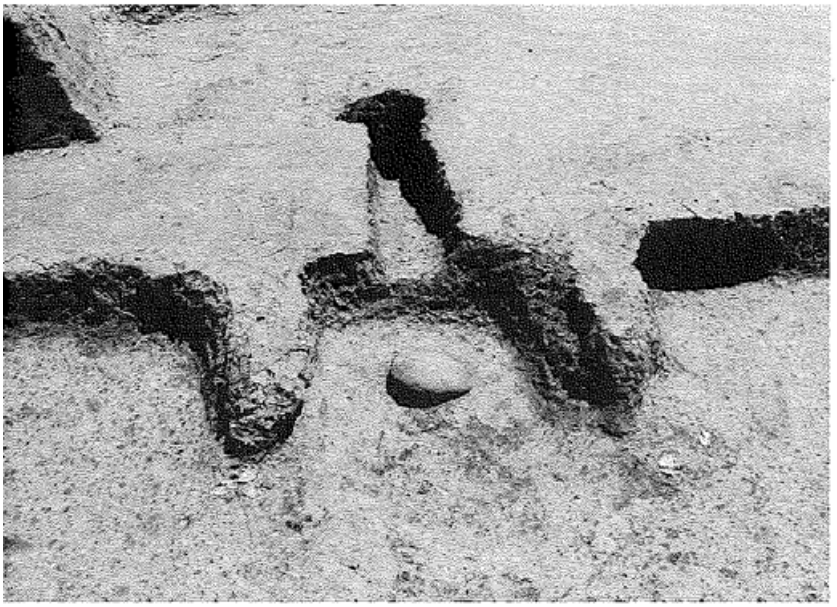
石器番号	種別	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	出土地点層位	図面番号
1	石鏃	19	13	2	0.3	珪質頁岩	6住床面	第7図1
2	〃	32	28	12	7.8		〃	第7図2
3	〃	(28)	15	4	1	珪質頁岩	7住第1層	第13図6
4	〃	20	13	3	0.4	珪質頁岩	9住第2層	第18図1
5	〃	36	25	8	7.5		〃第5層	第18図3
6	〃	29	14	4	0.7	黒曜石	〃床面	第18図2
7	〃	(24)	15	3	1	玉ずい	1住第1層	第19図3
8	〃	22	15	3	0.7		3住第1層	第21図4
9	〃	(18)	11	4	0.5	珪質頁岩	5住第1層	第24図3
10	〃	17	19	4	0.5	黒曜石	第7土壙	第26図1
11	〃	22	13	4	0.7	珪質頁岩	BA·BB161～166 基本層位第V層	第29図1
12	〃	(17)	14	3	0.4	珪質頁岩(凝灰岩質?)	〃	第29図2
13	〃	16	19	3	0.7	流紋岩	〃	第29図3
14	〃	31	18	5	1.3	玉ずい	〃	第29図4
15	〃	26	19	7	2	珪質頁岩	基本層位第I層	第29図6
16	〃	28	20	6	3	珪質頁岩	〃	第29図7
17	〃	22	12	8	1.5	珪質頁岩	〃	第29図5
18	石匙	67	34	10	19	珪質頁岩	9住第1層	第18図5
19	〃	53	21	9	9		〃第2層	第18図4
20	〃	63	29	7	11.5	石英安山岩	BA·BB161～166 基本層位第V層	第29図9
21	〃	51	34	6	9.5	珪質頁岩	基本層位第I層	第29図10
22	〃	62	49	12	34	珪質凝灰岩	〃	第30図1
23	石錐	41	12	5	1.2	珪質頁岩	BA·BB161～166 基本層位第V層	第29図8
24	石箆	64	40	14	33	細粒凝灰質頁岩	基本層位第I層	第30図2
25	〃	38	27	10	13.5	珪質頁岩	〃	第30図4
26	不定形石器	20	15	12	4	玉ずい	6住床面	第7図4
27	〃	43	29	12	14		〃	第7図5
28	〃	54	54	17	39.5	珪質頁岩	6住掘り方埋土	第7図3
29	〃	49	44	13	23.5	珪質頁岩(凝灰岩・質?)	〃	第7図6
30	〃	55	22	5	7		9住第1層	第18図6
31	不定形石器	51	26	6	6.5		9住第1層	第18図7
32	〃	40	33	10	12.6	珪質頁岩	〃第2層	第18図9
33	〃	70	29	11	15.4	珪質頁岩	〃第5層	第18図8
34	〃	33	20	6	2.6		第5土壙	第26図2
35	〃	21	17	4	1.8		〃	第26図3
36	〃	27	17	6	1.8	流紋岩	基本層位第I層	第30図3
37	〃	47	10	9	9	珪質頁岩	〃	第30図8
38	〃	(41)	18	8	7.5		基本層位第I層	第30図7
39	〃	51	31	14	17	細粒凝灰質頁岩	〃	第30図5
40	〃	56	34	10	19	珪質頁岩	〃	第30図6
41	〃	87	66	14	63.5		〃	第30図9
42	石剣破片	(42)	26	8	11.5	石英安山岩	6住掘り方埋土	第7図8
43	磨製石斧	(100)	52	25	200	石英安山岩質凝灰岩	7住第1層	第13図7
44	〃	121	50	27	240	石英安山岩	BA－264 基本層位第V層	第31図8
45	〃	(34)	(25)	10	10.5		基本層位第I層	第30図10
46	凹石	124	64	45	450	石英安山岩	6住掘り方埋土	第7図7
47	〃	122	95	62	880	石英安山岩	7住第1層	第13図1
48	〃	137	86	62	840	石英安山岩	〃	第13図4
49	〃	(85)	67	48	410	石英安山岩	〃	第13図5
50	〃	(134)	63	30	210	石英安山岩	〃	第13図3
51	〃	122	(98)	52		石英安山岩	9住床面	第18図10
52	〃	90	75	36	310	石英安山岩(鳴子火山?)	BA·BB161～166 基本層位第V層	第31図4
53	〃	106	85	65	700	石英安山岩(鳴子火山?)	基本層位第I層	第31図2
54	〃	100	69	30	280	石英安山岩	〃	第31図1
55	〃	162	120	73	1310	石英安山岩(鳴子火山?)	〃	第31図3
56	磨石	(117)	65	27	330	砂質凝灰岩	7住第1層	第13図2
57	砥石	59	28	25	2500		3住第1層	第21図3
58	〃	69	45	45			〃床面	第21図2
59	〃	60	40	26	90	石英安山岩質凝灰岩	4住第1層	第23図15
60	〃	120	87	50	670	石英安山岩質凝灰岩	第10土壙	第26図4

図 版 1

1．第1住居跡
（南西より）



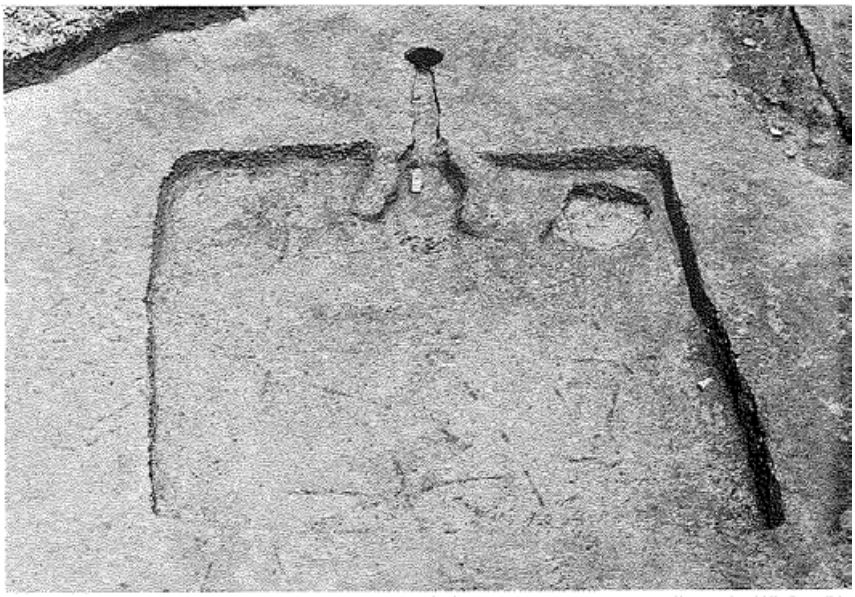
2．第2住居跡
（南西より）



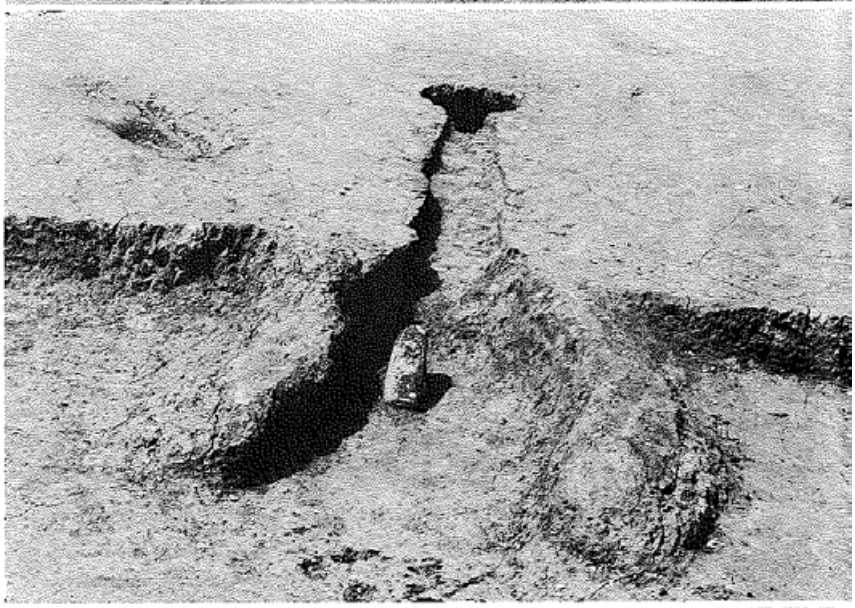
3．第2住居跡
カ マ ド

図 版 2

1．第３住居跡
（南より）



2．第３住居跡
カ マ ド



3．第４住居跡
（西より）

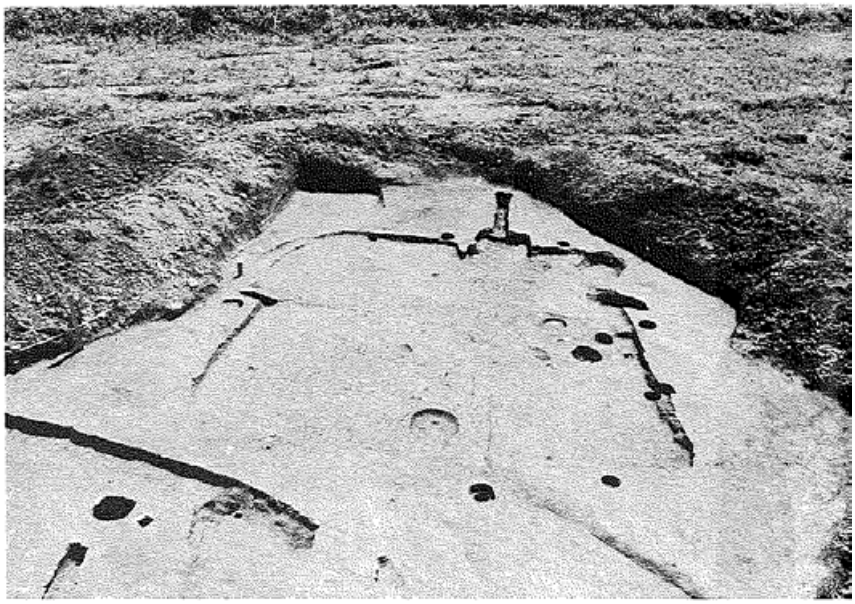
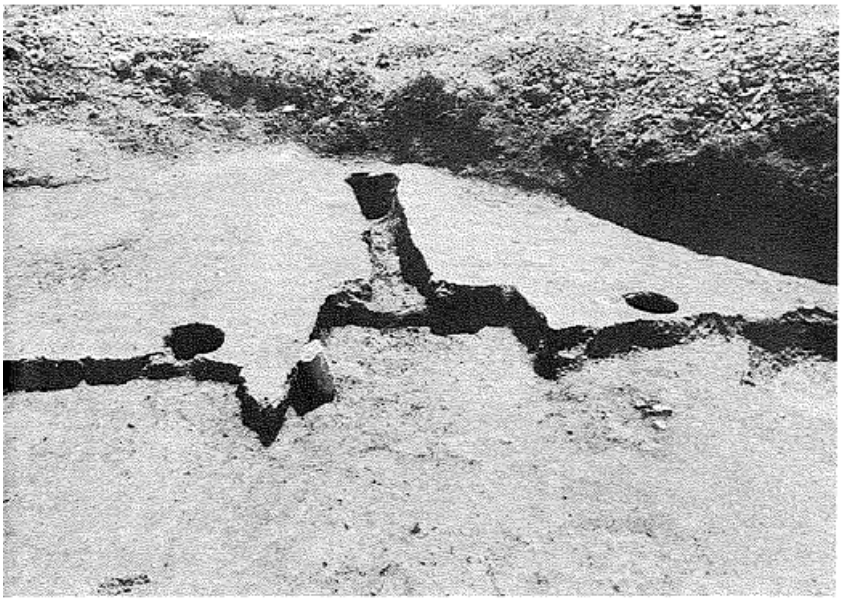
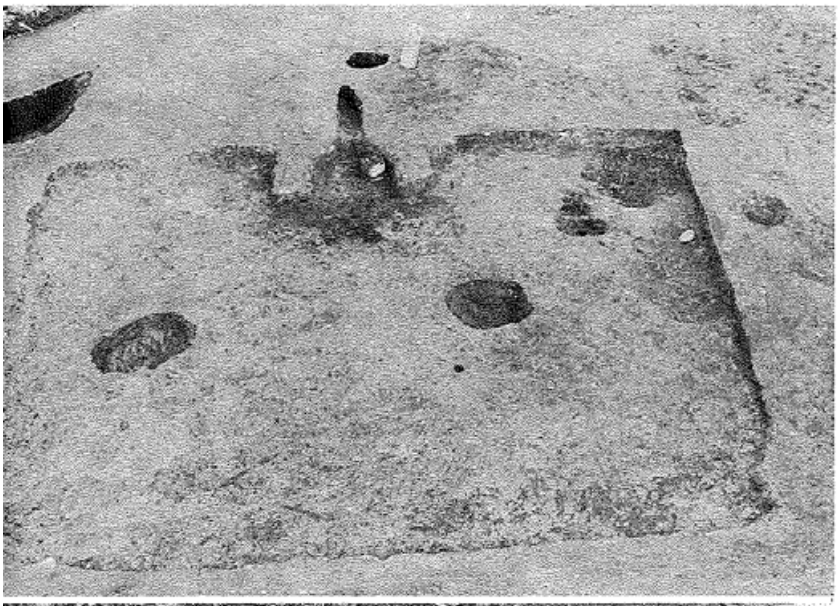


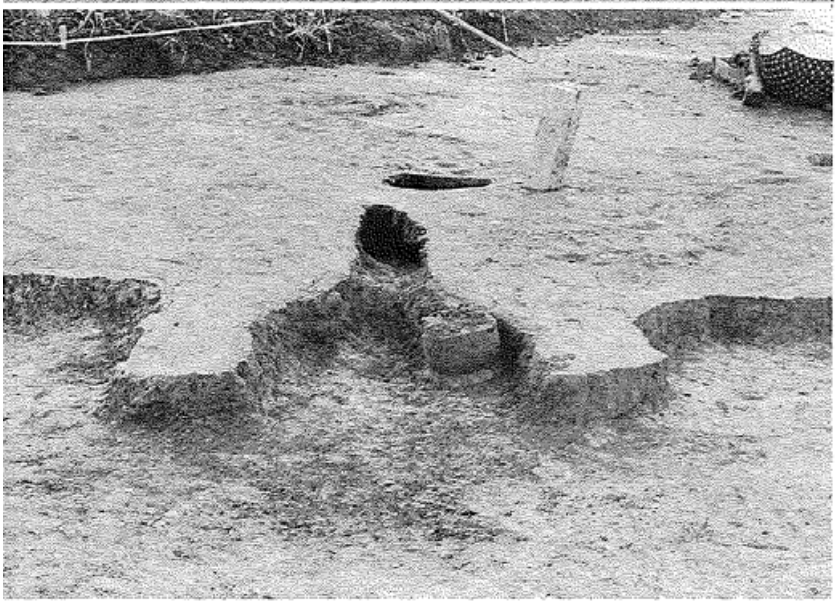
図 版 3



1．第４住居跡
カ マ ド



2．第５住居跡
（西より）

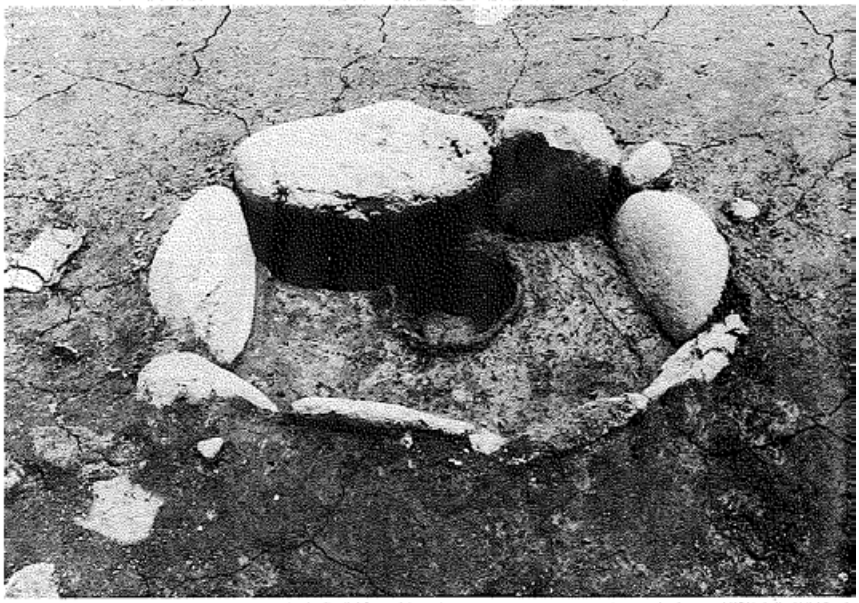


3．第５住居跡
カ マ ド

図 版 4

1．第6住居跡
（北西より）

2．第6住居跡
炉



3．第7住居跡
（南より）

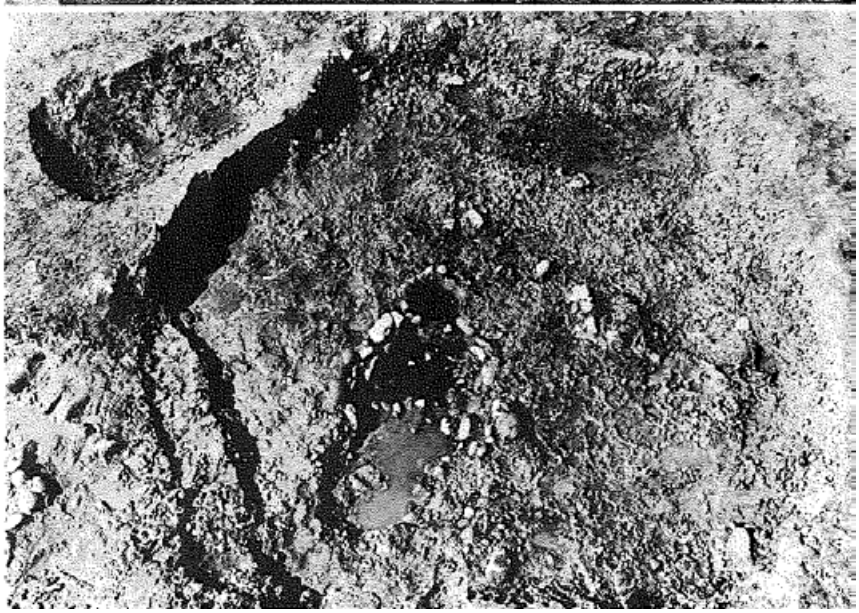


図 版 5

1．第７住居跡
炉

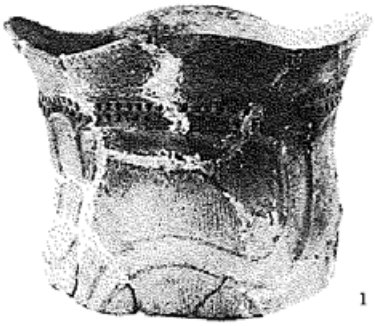
2．第８住居跡
（南より）

図 版 6

1．第9住居跡
（南より）

2．第9住居跡
炉

3．発掘調査参加者
記 念 撮 影


1

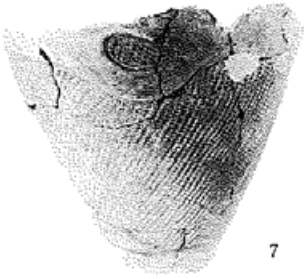
2

3

4

5

6


7

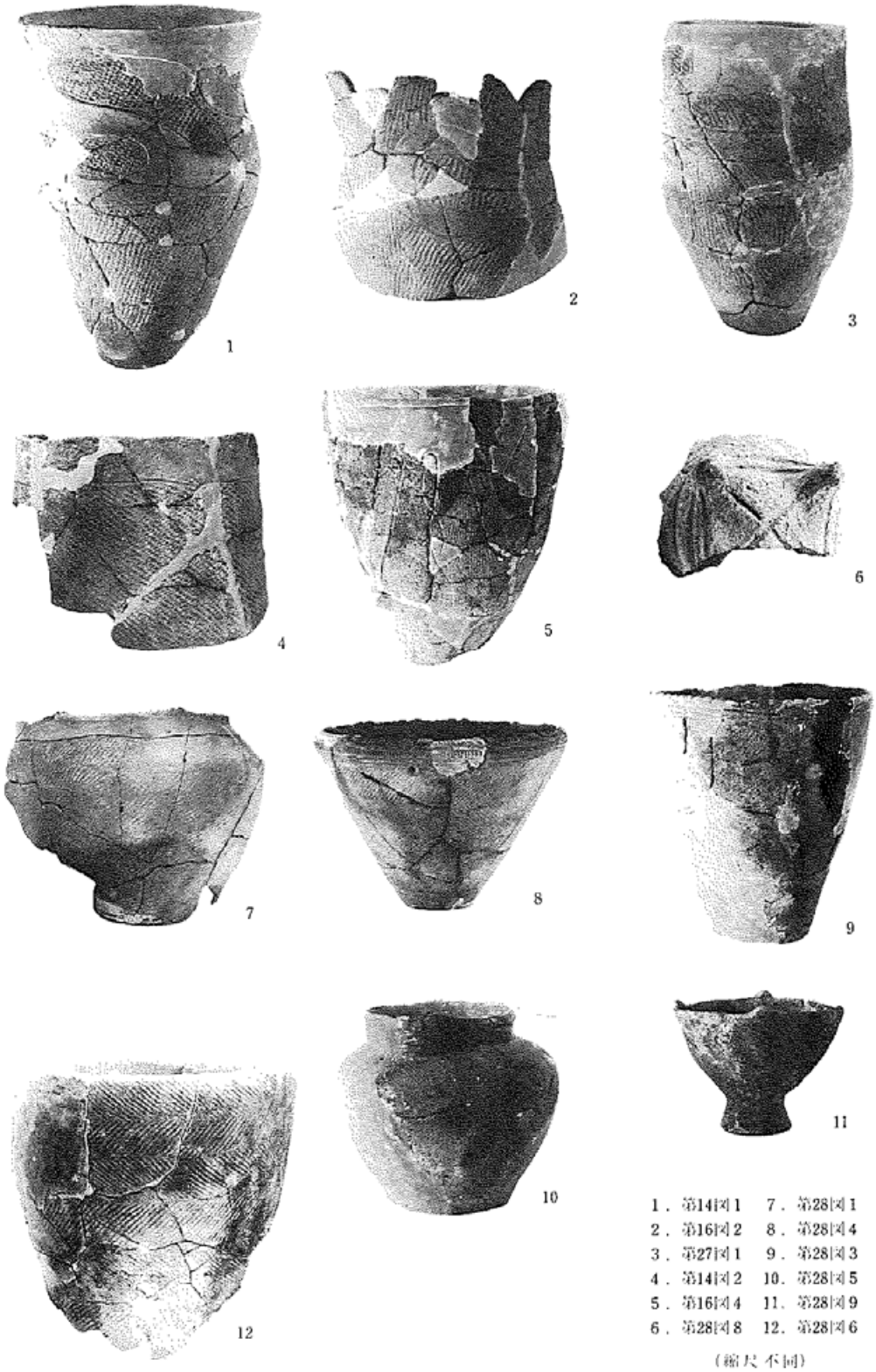
8

9

1．第9図3　6．第10図1
2．第9図4　7．第16図1
3．第9図1　8．第11図1
4．第9図2　9．第11図2
5．第10図2

（縮尺不同）

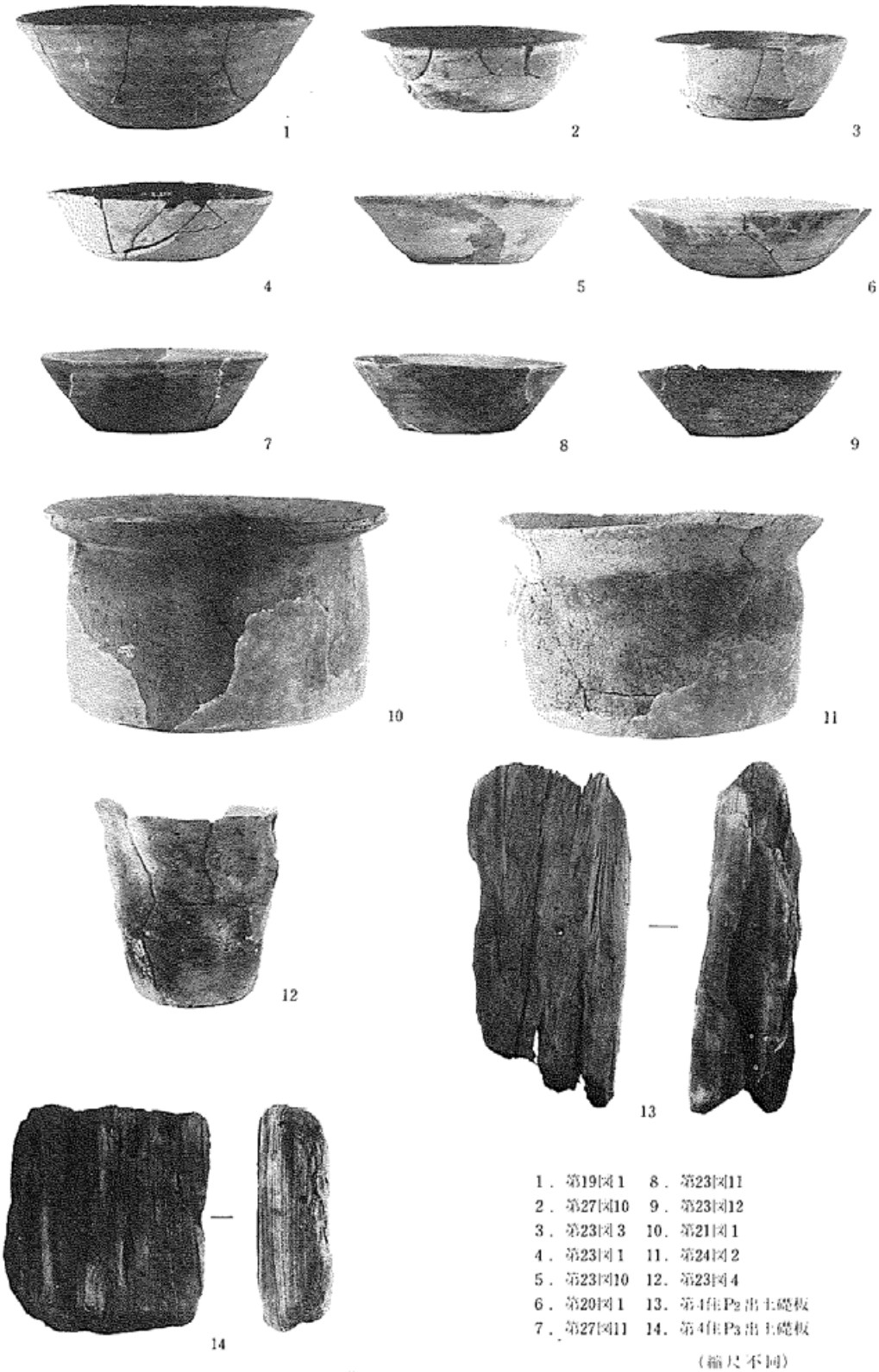
図版7　縄文土器



1．第14図1　7．第28図1
2．第16図2　8．第28図4
3．第27図1　9．第28図3
4．第14図2　10．第28図5
5．第16図4　11．第28図9
6．第28図8　12．第28図6

（縮尺不同）

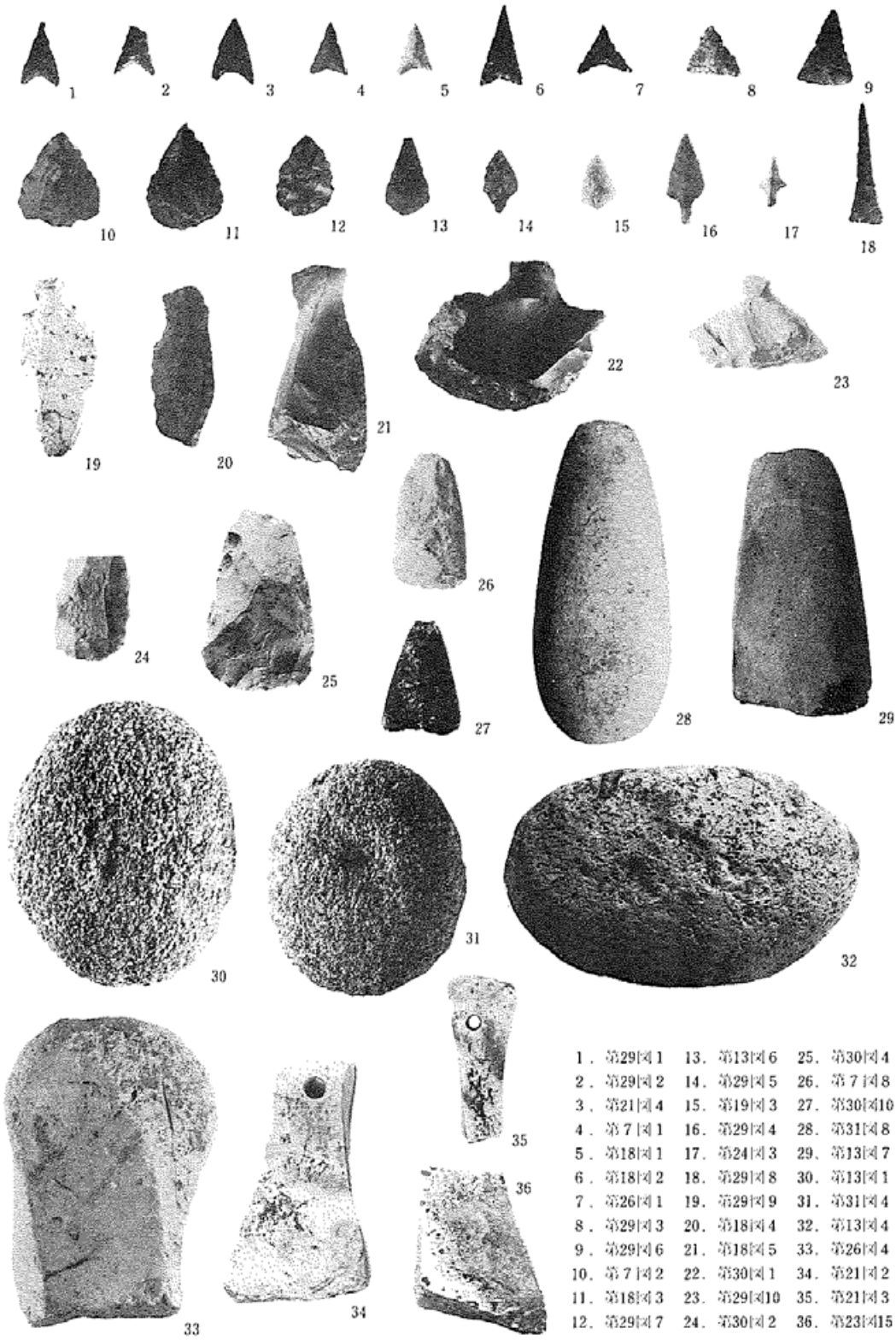
図版8　縄文土器



1．第19図1　8．第23図11
2．第27図10　9．第23図12
3．第23図3　10．第21図1
4．第23図1　11．第24図2
5．第23図10　12．第23図4
6．第20図1　13．第4住P2出土礎板
7．第27図11　14．第4住P3出土礎板

（縮尺不同）

図 版 9　土師器・須恵器・礎板



1．第29図1　13．第13図6　25．第30図4
2．第29図2　14．第29図5　26．第7図8
3．第21図4　15．第19図3　27．第30図10
4．第7図1　16．第29図4　28．第31図8
5．第18図1　17．第24図3　29．第13図7
6．第18図2　18．第29図8　30．第13図1
7．第26図1　19．第29図9　31．第31図4
8．第29図3　20．第18図4　32．第13図4
9．第29図6　21．第18図5　33．第26図4
10．第7図2　22．第30図1　34．第21図2
11．第18図3　23．第29図10　35．第21図3
12．第29図7　24．第30図2　36．第23図15

（縮尺不同）

図版 10　　石　器